

# 神奈川県立博物館研究報告

## — 人文科学 —

### 第 43 号

## 【研究ノート】

- 鳥居 和郎 北条氏銅像の改変について  
—北条早雲像、氏康像、時長像などとの比較から— (1)
- 丹治 雄一 明治期の箱根山周辺産安山岩の石材利用と  
土屋大次郎の事業活動 (15)

## 【資料紹介】

- 千葉 毅 神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代燃糸文土器群  
—林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料— (31)
- 吉永亜紀子・千葉 毅 神奈川県立歴史博物館所蔵の縄文時代前期貝塚出土動物遺体  
—横浜市上台遺跡住居址内貝塚ブロックサンプルの分析— (81)
- 高橋 健・千葉 毅 神奈川県立歴史博物館所蔵の骨角器  
—林國治氏、赤星直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料— (101)
- 建石 徹・降幡 順子・千葉 毅 神奈川県立歴史博物館所蔵横浜市称名寺貝塚  
採集土器の胎土分析および赤色顔料分析 (113)
- 神野 祐太 神奈川県立歴史博物館所蔵の銅造観音菩薩立像について  
—付・神奈川県所在善光寺式阿弥陀及び脇侍像一覧— (121)
- 鳥居 和郎 山北中学校遺跡出土の武蔵型板碑について (135)
- 小井川 理 個人所蔵 永徳四年銘鶴岡八幡宮金銅納経札について (145)
- 根本佐智子・古宮 雅明 松平造酒助江戸在勤日記  
—元治元年九月十一日～十月朔日— (155)
- 寺崎 弘康・武田周一郎 横浜正金銀行中井芳楠・長三郎関係資料群について (177)
- 【事業報告】
- 嶋村 元宏 幕末期の日露関係資料について  
—「海の学び調査・研究サポート」支援事業報告— (199)

2016

神奈川県立歴史博物館

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の

縄文時代燃糸文期土器群

— 林國治氏旧蔵の横浜市十王堂免遺跡採集資料 —

千葉 毅

【キーワード】

十王堂免遺跡 赤徳原遺跡 縄文土器 燃糸文土器

大浦山式土器 無文土器 林國治

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市十王堂免遺跡採集縄文土器の報告を行なった。この資料は戦前戦後にかけて横浜市域周辺で考古資料を採集していた林國治氏の旧蔵資料である。

土器群の主体となる時期は縄文時代燃糸文期後半であり、当該期の遺跡としては多量の土器が採集されている。採集された土器片の数は、燃糸文期前半の土器群が八十六点、大浦山式土器が二六〇点、東山式土器が二十二点、無文土器が二八六点、早期後半の土器群が一〇点、草創期降線文期の可能性のある土器が五点となる。

これまでも指摘されてきた切れ目状の補修孔についてのほか、器面調整具の痕跡、口縁部の黒色化した土器、土器の大きさについて若干の考察を行なった。

はじめに

神奈川県立歴史博物館では、その前身となる神奈川県立博物館の一六七年の設立以来、県内を中心とした考古資料の収集に努めてきた。現在、当館ではそれらの整理作業を進めており、整理が進んだ資料から順次報告を行なっている。

本稿では、横浜市十王堂免遺跡採集の縄文土器の報告を行なう。これは林國治氏により一九五〇年代後半に採集された資料で、一九六六年に当館へ収蔵された。

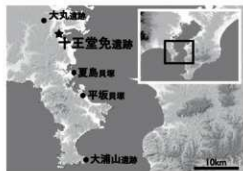
一 林國治氏による資料採集の経緯と遺跡の概要

(一) 燃糸文土器研究と林國治氏の採集活動

林國治氏は戦前戦後にかけて、横浜市域を中心に考古資料の採集を精力的に行なっていた在野の考古学研究者である<sup>1)</sup>。

一九四〇年代、五〇年代の考古学界では、縄文土器の起源をめぐる議論が盛んに行なわれており、その最古の段階に位置づけられると考えられていた燃糸文土器の探求が進められていた。なかでも明治大学の杉原莊介氏、芹沢長介氏らや横須賀考古学会の赤星直忠氏、岡本勇氏らは神奈川県域での発掘調査を多く実施し、横浜市南部から三浦半島周辺は燃糸文土器研究の重要なフィールドとなっていた(杉原・芹沢一九五七、芹沢一九五七、岡本一九六〇など)。そのような中で林氏は横浜市十王堂免遺跡で採集した土器に燃糸文土器の含まれることを知り、それ以降、本遺跡での採集を精力的に行なうことになったのである。

十王堂免遺跡は、現在の横浜市磯子区汐見台に存在した遺跡である(第一図)。燃糸文期の遺物を多く出土する遺跡であったが、開発のために一



第1図 十王堂免遺跡の位置

九六〇年代前半には消滅してしまつた。そのため、今日では林氏の採集した資料群は十王堂免遺跡の内容を知るために欠くことの出来ないものとなっている。

林氏は後年に回想録をいくつか著しており、十王堂免遺跡についての記述も認められる。重要な記述であるため、やや長くなるが引用しておきたい。

「二十九年四月八日に始めてこの遺跡

に赴いた。場所は起伏の多い台地で、より北は急斜面が段々畑となり、東南は斜面が雑木林、その下方田圃に続く低地は畑であり、中央畑の北側は細い道が一本通つて、畑と急斜面の雑木林とを境している。東南側も同じく四〜五十センチの道が一筋通つている。中央の畑をかつて開墾した折に出土した土器、石器を投棄したと考えられる。二次的堆積の処が北側雑木林の一部にある。(中略) 三十二年十月の始めに赴いたときは、東南斜面雑木林の中に入った。(中略) 山芋を掘つた穴が二個ならんで口を開いている。ボーリング棒を持つていたので、一つの穴の内壁を突いて見ると、小さな土器片が落ちていつた。とり上げて見ると口辺部で、口唇が稍肥厚して、燃系文は密に縦走しており、トジ穴といわれる穴も一個開いている。(中略) これは縄文初頭の夏島式土器であったのである。(中略) そして幾日かの後、即ち十月十日に山芋の穴を中心に試掘した。出土したのは無文土器片と共に横走燃系文土器だった。(中略) 明治大学講師芹沢長介氏を遺跡へ案内して、大学で発掘したいとの話を伺がい。(中略) 三十三年六月二十八、二十九、

三十の三日間、芹沢長介氏によって発掘調査が行なわれ、大勢の学生が発掘に参加した。(中略) 十王堂免は隣接の磯子区森町赤穂原、磯子区間渡りと共に、ニュータウン磯子団地として造成工事が行なわれ、高い処はブルドーザーで深く削り押し崩され、低い処は盛り上り、そして鉄筋コンクリートのアパートが数十棟建ちならんだ。そのため、早期、中期の遺跡が四箇所破壊や文字通り埋滅してしまつた。そして町名も三者揃一して磯子区汐見台となつた。」(林一九六七)

「三十三年すぎの頃から、十王堂免、平台、大塚、赤穂原、同塚塚山、磯子町間渡り等の在遺跡の広地域がニュータウン磯子団地としての造成工事、十王堂免、平台から始められた。遺跡の埋滅、土器、石器等資料の滅失を惜しみ、毎週の日曜日雨の降る日も工事場所に赴いて土器片、石器等の採集に努めた。採集した資料は頗ぶる多数であつた。」(林一九七七)

「昭和三十三年六月二十八日、調査者を芹沢長介氏、多数の学生が参加して発掘が開始された。場所は森町赤穂原の最西北端、私が昭和三十三年秋、試掘によつて大浦山式、平坂式の土器片数十個を採集したところである。」(林一九七九)

これらの記述を参照すると、林氏は一九五四年四月八日に初めて十王堂免遺跡を訪れて以来、継続的に本遺跡を踏査し、一九五〇年代後半には開発にさらされた本遺跡において丹念に遺物の採集を行なつていたことが分かる。また、そうして得られた資料を裏見した明治大学の芹沢長介氏が現地の発掘調査を希望し、実際に一九五八年に調査が実施されている。芹沢氏による発掘調査の報告書は未刊だが、一九六二年刊行の「日本考古学年報」に若干の記述があり、それによると芹沢氏が林氏採集資料を裏見したのは一九五八年三月のようである(芹沢一九六二)。

第1表 主な燃糸文土器研究と林國治氏の動向

1941	白崎高保が1936年に福岡台遺跡で発見した燃糸文土器を発表。
1942～1948	白崎高保・江坂輝雄・矢島清作・吉田格らによって燃糸文土器の研究が進展。
1949	5月～6月 平塚貝塚調査 (芹沢長介・杉原荘介・岡本真ら) 2月 大満山遺跡調査【試掘】 (赤塚直忠・岡本真ら)
1950	2月～4月 夏島貝塚調査【1次】 (杉原荘介・芹沢長介ら)
1951	11月～1952年1月 大丸遺跡調査 (芹沢長介ら)
1952	
1953	平塚貝塚報告 (岡本真)
1954	
1955	6月 夏島貝塚調査【2次】 (杉原荘介・芹沢長介ら)
1956	
1957	大丸遺跡報告 (芹沢長介) 夏島貝塚報告 (杉原荘介・芹沢長介)
1958	3月 芹沢長介が林國治採集資料を見て発掘を希望 6月 赤塚原遺跡調査 (芹沢長介ら) 6月 大満山遺跡調査 (横濱市博物館)
1959	紅取遺跡群、ゴルフ場・ニュータウン建設開始
1960	大満山遺跡報告 (岡本真)
1961	
1961～1962	十王堂免遺跡、ゴルフ場・ニュータウン建設のためほぼ破壊
1966	林採集資料が神奈川県立博物館(準備室)に収蔵される

先述のように、当時の考古学界では、最古の縄文土器としての燃糸文土器の探求が盛んに行なわれていた。林氏が十王堂免遺跡を踏査、燃糸文土器を採集していた時期はまさにそのような時期にあたっている(第1表)。

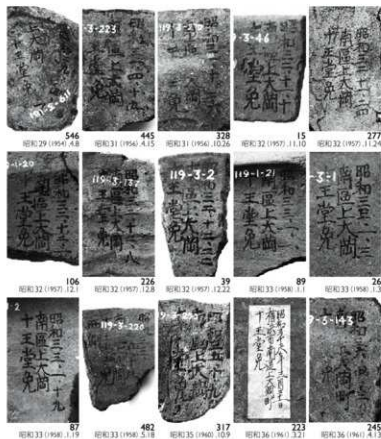
林氏は大学等で考古学の専門的教育を受けておらず、在野にあつて基本的に独学で研究を行なっていたが、学界の最新の動向にも目を向けて活動していたことが窺われる。

林氏の採集資料は一九六六年に当館に収蔵された。それらの中には、林氏により採集年月日、採集場所が墨書で注記されているものが多く存在する(第2図)。十王堂免の地名とともに記された日付の中で最も古いものは林氏が初めて本遺跡を訪れたと述べている一九五四年四月八日付けのものであり、最も新しいものは一九六一年四月十三日付けである。本地域の造成の主目的であつた磯子団地建設の工事が起されたのは一九六一年一月二十八日であるから、工事が開始されてから数ヶ月の間は現地踏査を継続していたようである。

(2) 遺跡の位置および林氏の採集地点

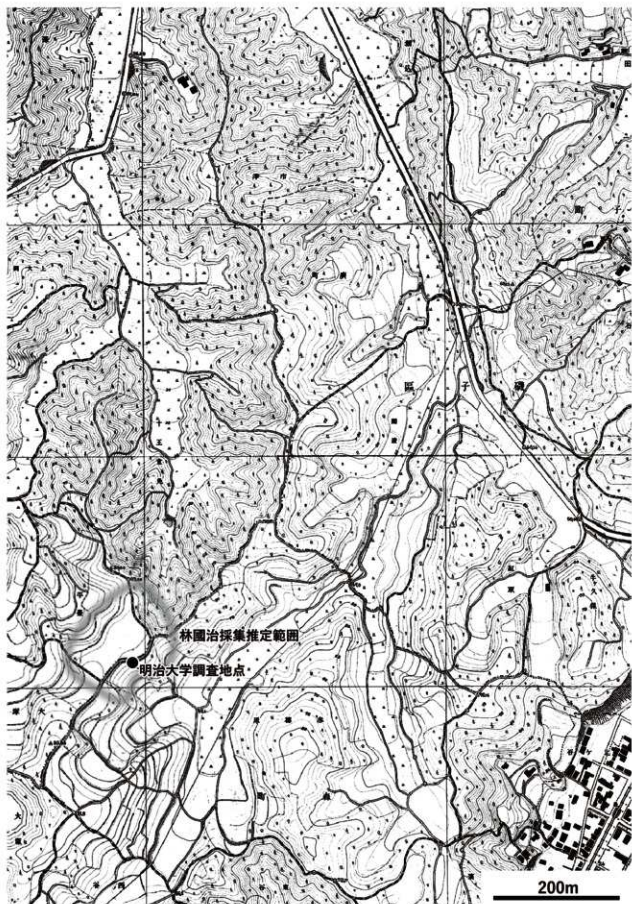
十王堂免遺跡周辺は一九六〇年代以降の開発に伴う造成工事のため、大幅に地形が改変されている。遺跡範囲の行政区画も造成前は横浜市南区上大岡町十王堂免、平白、磯子区森町赤穂原にわたっていたようだが、一九六三年六月の整理により一帯は磯子区汐見台となった。

遺跡がほぼ消滅してしまった今日となつては、遺跡の正確な範囲を求めることは困難だが、林氏の採集地点は氏の記述と造成が行なわれる以前の地形図から、おおよその位置を推測することが出来る(第3図)。先に引用したように十王堂免遺跡に関する氏の記述は複数存在するが、一



第2図 林氏による土器片への注記





第3図 十王堂免遺跡周辺の地形と林氏採集推定範囲および明治大学調査地点  
 横浜市 1/3000 地形図「磯子」昭和8年（横浜開港資料館所蔵）より作成

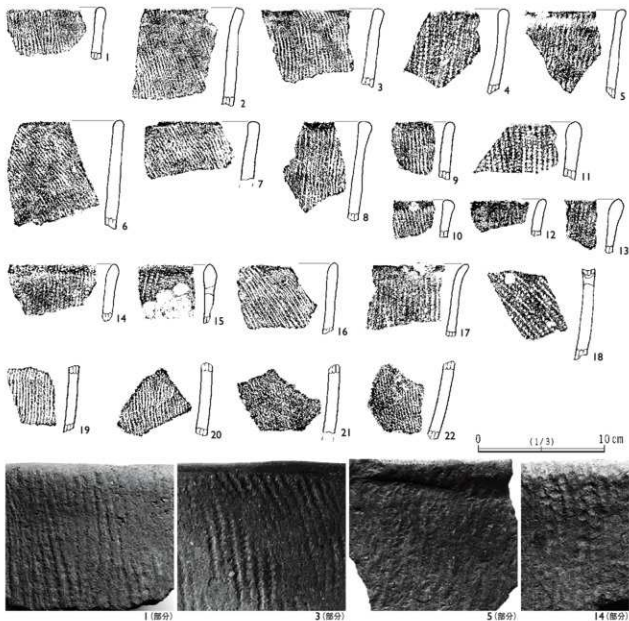


第4図 十王堂免遺跡周辺の現在の地形と林氏採集推定範囲明治大学調査地点  
 国土地理院 1/10,000 地形図「上大岡」平成16年に、昭和8年の地形図からトレースした境界を重ねて作成

九六七年度の記述が最も具体的で参考になる。ただ、氏の「台地の一部が中央が畑」で「西より北は急斜面が段々畑となり、東南は斜面が雑木林、その下方田圃に続く低地は畑」という表現が該当しそうなのは地形図の十王堂免の範囲内には見当たらず、付近では平台の東南部にある平坦地がそれに当たりそうである。一方で、氏の採集資料には「平台」や「森町赤穂原」「森町赤穂原経塚山」といった注記も一定数存在することから、これらの地区名を使い分けていたようである。そう考えると、林氏のこれらの地区の認識と行政区画としての字との間には微妙なズレがあった可能性もあろう。いづれにしても、林氏の記述と地形図を参照する限り、林氏のいう「十王堂免」は地形図での平台および森町赤穂原の一部を含んでいると考えてよいだろう。なお、赤穂原という地名は森町の他に上大岡町にも存在するが（平台の西に隣接、第4図）、林氏の注記はいずれも「森町赤穂原」と表記されており、上大岡町赤穂原のものは見当たらない。

(3) 明治大学調査地点「赤穂原遺跡」——との関係

明治大学の芹沢長介氏は一九五八年三月に林氏の採集資料を見直し本遺跡の発掘調査を希望、六月に発掘調査を実施している。調査概要は、一九五八年年度の「日本考古学年報」に「横浜市赤穂原遺跡」として記されている（芹沢一九六二）。それによると、所在地は「磯子区森町赤穂原」で「標高は約八〇m」「磯子の海岸から直線距離にして約八〇〇m」「南東にむく斜面の一端に、包含層が露出している」とのことである。また明治大学に保管されている当時の調査記録によると、調査地点は現在の汐見台小学校の敷地内に該当するという。これらは林氏の記述にある「東南斜面雑木林」や「森町赤穂原の最西北端」という表記とも矛盾しない。



第5図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (1) (当館蔵)

これらのことから明治大学の調査地点は林氏の「十王堂免」としていた範囲に含まれると考えてよいだろう(第3・4図)。

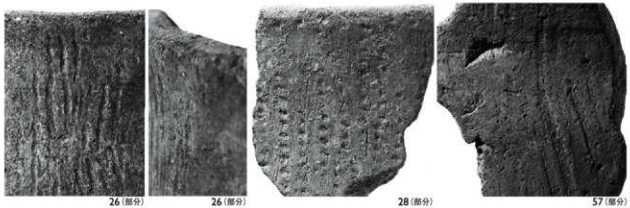
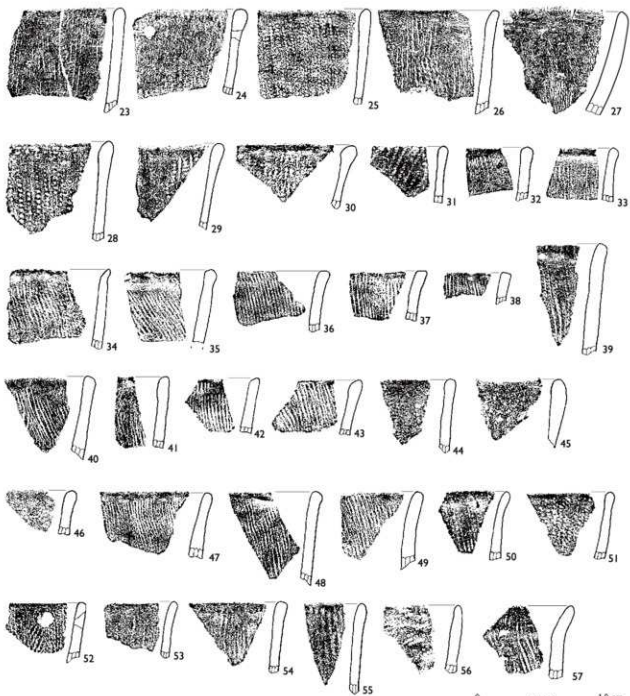
明治大学の調査以降、芹沢氏の記述が引用され「赤穂原遺跡」と呼称されることが多い(神奈川県史編纂室編一九七九など)、本稿では林氏にならい十王堂免遺跡としておく。

なお、明治大学の調査の際には、表土から加曽利E式土器、その下層から勝坂式土器、阿玉台式土器が多数、その下方の黒色土層から「典型的な大浦山式土器」が多数、さらにその下層からは「夏局式と考えられる破片」が少数出土したらしい(芹沢一九六二)。

## 二 林氏採集土器群について―観察所見―

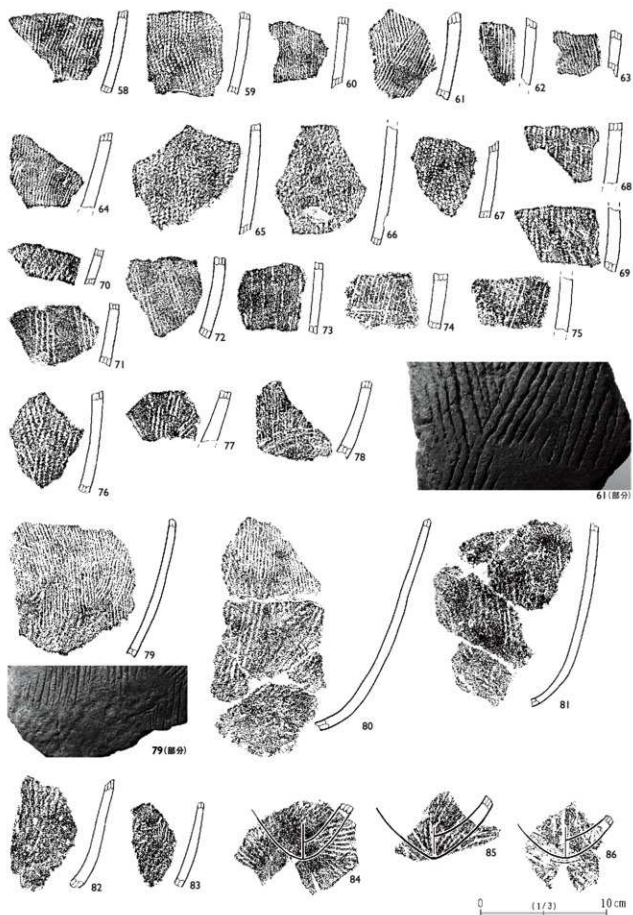
本章では林氏が採集した土器群の観察所見を記載していく。林氏の収集した資料はいずれも表面採集品であるため、層位的な検討や分布の傾向等を検討するための情報は欠落している。ここでは主に型式学的な分類により記述していく。

土器群の主体は燃糸文土器である。その他に早期後半、中期中葉、後葉の土器がある。押型文土器は含まれない。なお、中期土器については本稿では紙面、作業上の制約から削



第6图 横浜市十王堂免遣跡採集土器 (2) (当館蔵)





第7図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (3) (当館蔵)

第2表 横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表(夏島式・稲荷台式)

番号	注記番号	重量 (g)	施文具	縦文調整(内面)	番号	注記番号	重量 (g)	施文具	縦文調整(内面)
1	119-3-035	28	捺糸丸	不浮腫	44	119-3-025	19	捺糸不明	不浮腫
2	119-3-047	57	捺糸丸	不浮腫	45	119-3-302	26	不明	捺糸(横)
3	119-3-008	56	RL?	ナデ	46	—	15	捺糸L	ナデ
4	119-3-009	39	捺糸丸	ヒガキ(横)	47	119-3-003	40	捺糸L	ナデ
5	119-3-032	34	RL	不浮腫	48	119-3-029	30	捺糸L	不浮腫
6	119-3-004	73	捺糸丸	捺糸(横)	49	119-3-020	26	捺糸L	捺糸(横)
7	119-3-013	43	捺糸丸	不浮腫	50	119-3-023	17	捺糸丸?	不浮腫
8	119-3-017	34	捺糸丸	不浮腫	51	119-3-043	21	捺糸丸?	捺糸(横・斜)
9	119-3-042	16	捺糸丸	不浮腫	52	119-3-034	22	捺糸丸	捺糸(横)
10	119-3-030	11	捺糸L?	捺糸(横)	53	119-3-033	17	捺糸L?	不浮腫
11	119-3-024	28	RL	ヒガキ(横)	54	119-3-027	24	捺糸L?	捺糸(横)
12	—	12	捺糸丸	捺糸(横)	55	119-3-038	22	捺糸不明	捺糸(横)
13	119-3-028	13	捺糸丸	捺糸(横)	56	119-3-076	24	RL	不浮腫, 凹凸あり
14	119-3-010	29	捺糸丸?	ナデ	57	119-3-311	30	結条体	捺糸(横)
15	119-3-046	22	捺糸L?	ナデ	58	119-3-118	42	RL	ナデ
17	119-3-022	33	捺糸L	不浮腫	59	119-3-112	48	捺糸L	捺糸(横)
17	119-3-005	31	捺糸L	不浮腫	60	—	24	捺糸L	不浮腫
18	119-3-044	35	RL	ナデ	61	119-3-103	46	捺糸丸	不浮腫
19	119-3-105	22	捺糸丸	不浮腫	62	—	15	捺糸L	不浮腫
20	119-3-134	25	捺糸丸?	不浮腫	63	—	15	捺糸L	ナデ
21	—	31	捺糸L	不浮腫	64	—	34	捺糸丸?	不浮腫
22	—	27	捺糸L	ナデ	65	119-3-121	67	捺糸丸	ナデ
23	119-3-045	86	捺糸L	不浮腫	66	119-3-152	69	捺糸丸?	不浮腫
24	119-3-048	65	捺糸L?	捺糸(横)	67	119-3-107	31	RL?	ナデ(横)→ヒガキ
25	119-3-007	71	ナデ	ナデ	68	—	32	捺糸丸?	ナデ
26	119-3-001	75	捺糸丸	不浮腫	69	119-3-131	40	RL?	ナデ
27	119-3-050	81	捺糸L	ナデ	70	—	13	捺糸L	ナデ
28	119-3-014	61	捺糸L	捺糸(横)	71	—	33	捺糸L	ナデ
29	119-3-031	28	RL?	捺糸(横)	72	119-3-136	43	捺糸L	不浮腫
30	119-3-056	29	捺糸L	ケズリ状の捺糸(横)	73	—	35	捺糸L	捺糸(横)
31	119-3-012	16	捺糸L	捺糸(横)	74	—	29	捺糸不明	不浮腫
32	119-3-018	19	捺糸L	捺糸(横)	75	—	30	捺糸不明	不浮腫
33	119-3-040	19	捺糸丸	ヒガキ	76	—	41	捺糸丸	不浮腫
34	119-3-006	39	捺糸丸	ナデ	77	—	31	捺糸丸	不浮腫
35	119-3-011	36	捺糸丸	捺糸(横)	78	—	35	捺糸L	ナデ
36	119-3-016	23	捺糸L	捺糸(横)	79	119-3-097A	91	捺糸丸-RL	ナデ(捺糸)後(捺糸)
37	119-3-019	18	捺糸丸?	ナデ	80	119-3-097B	139	捺糸丸-RL	ナデ(捺糸)後(捺糸)
38	—	11	捺糸丸	捺糸(横)	81	119-3-097C	105	捺糸丸-RL	ナデ(捺糸)後(捺糸)
39	119-3-002	34	捺糸丸	捺糸(横)	82	119-3-097D	40	捺糸丸-RL	ナデ(捺糸)後(捺糸)
40	119-3-021	32	捺糸丸	捺糸(横)	83	119-3-097E	16	捺糸丸-RL	ナデ(捺糸)後(捺糸)
41	119-3-041	15	捺糸丸	不浮腫	84	119-4-120	73	捺糸丸	不明
42	119-3-039	16	捺糸丸?	ナデ	85	119-3-153	48	捺糸丸	ナデ
43	119-3-015	24	捺糸丸	不浮腫	86	119-3-187	31	不明	ナデ

れるもので、捺糸文の条間が狭く、施文がやや深いものを一括した。1

(1) 夏島式(第5図, 第2表)

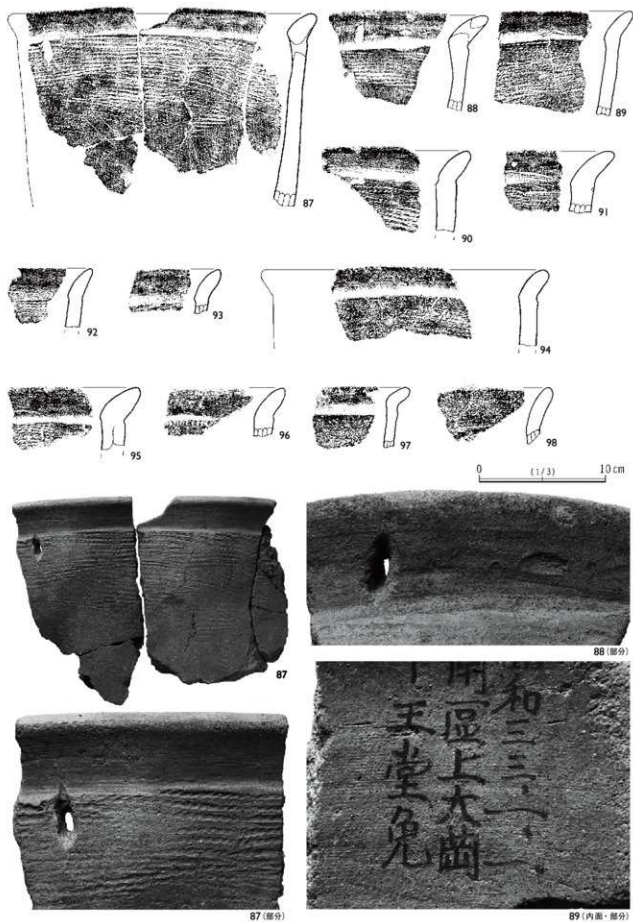
1〜22は夏島式である。縦文あるいは斜位に捺糸文および縄文が施されるもので、捺糸文の条間が狭く、施文がやや深いものを一括した。1は丸棒状のものが多く、2、3は口唇部が面取りされ角頭状となる。5、10、15等は口唇部が肥厚する。施文原体は、3がRL?、5、11、18がRLの縄文となる他は捺糸文が用いられる。捺糸文の捻りはRとLがおおよそ半々となる。

(2) 稲荷台式(第6・7図, 第2表)

23〜86は稲荷台式である。縦文あるいは斜位に捺糸文および縄文が施されるもので、夏島式に比べ捺糸文の条間がやや広がり、施文も浅くなる。また、捺糸文、縄文の捻りが不均質で粗く、施文単位も乱雑なものが多くなる。口縁は弱く外反するものが多い。断面は丸棒状のものが多く、37、38は角頭状となる。26にもわずかに平坦面が作出されている。24、28、30等のように口唇部が肥厚するものもある。原体には捺糸文が用いられるものがほとんどである。27では、口縁部直下は横位に、それ以下は縦位の施文となる。56には縄文が施文される。施文は乱雑で、器面には凹凸が目立つ。

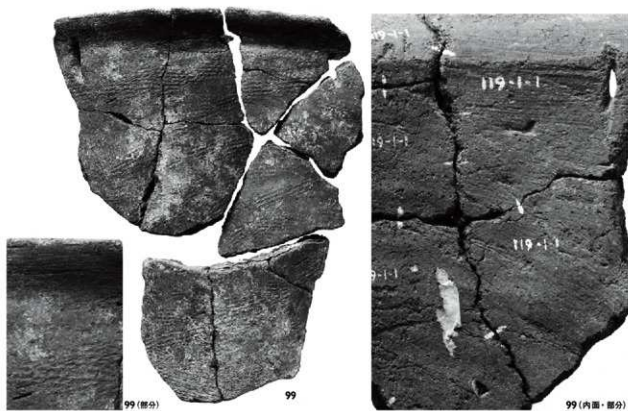
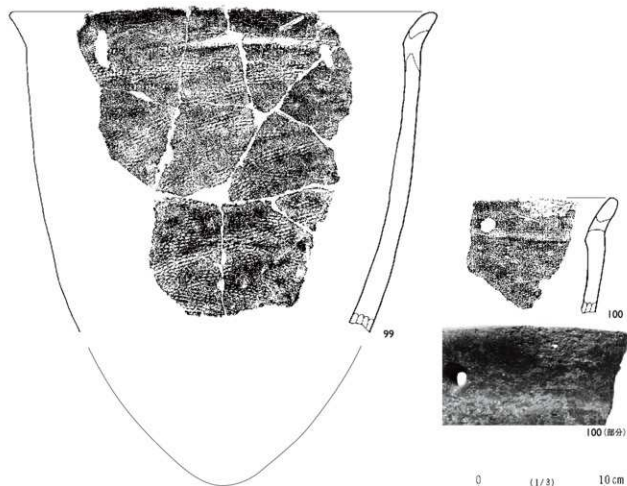
57は絡条体条痕文が施される。口縁がやや外反し内面には稜が作出される点から後述の大浦山式である可能性も考えられるが、口縁部付近での縦位施文という点から稲荷台式とした。

79〜83は焼成や胎土等の類似性が同一

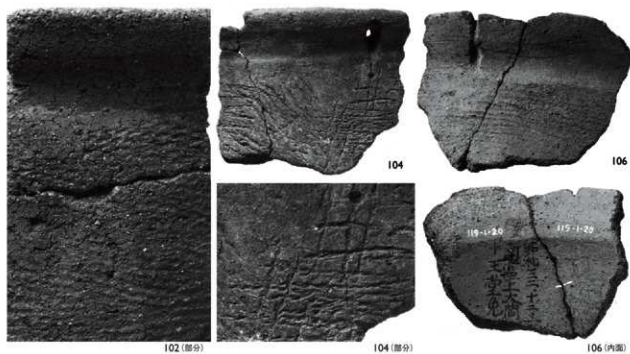
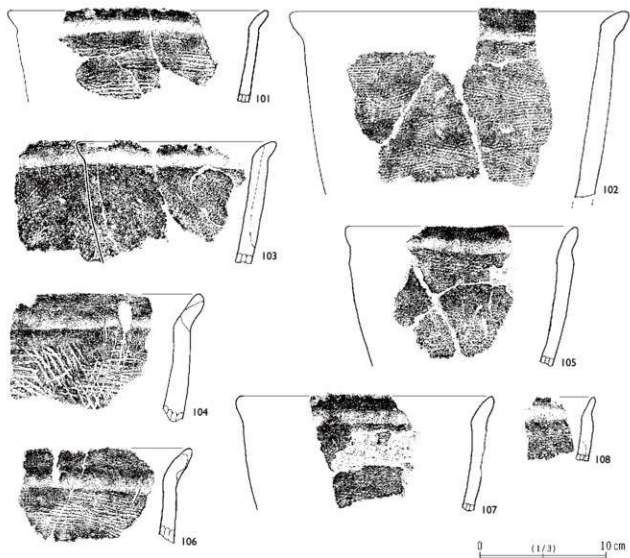


第8図 横浜市十王堂免遺跡採集土器(4) (当館蔵)





第9図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (5) (当館蔵)



第10図 横浜市十王堂免遺跡採集土器(6) (当館蔵)

個体と考えられる。一全体に捺糸文と縄文の両者が施文される事例であり、類例がない。胴部下半の破片と思われる。下方に縄文Rが施文された後、上方に捺糸文Rが施される。他の土器片に比べ、器壁が薄く、焼成もやや異なる。早期後半等の他時期の所産である可能性も考えられるが、捺糸文の様相が他の桶荷台式土器と類似する点等から本時期とした。

84は底部破片である。いずれも底部際まで縦位の捺糸文が施される。先端部の内面はわずかに肥厚する。

### (3) 大浦山式(第8・20図、第3・5表)

87・276は横位に捺糸文が施されるもので大浦山式に比定される。大浦山式にはいくつかの分類案、編年案が示されているが(岡本一九六〇、宮崎一九八一、原田一九八九、石井一九九一、戸田一九九五、原田二〇〇八など)、未だ共通理解には至っていないようである。本稿では新しい分類案を示すことはせず、これらの成果を参照しつつ記述していく。

大浦山式の口縁部形態に大きく二つの種類があることは当初から指摘されている通りである(岡本一九六〇)。一つは口縁部下に屈曲をもつもので、岡本勇氏により「大浦山式a類」とされた一群、もう一方は屈曲をもたず直立するもので「大浦山式b類」とされた一群である。本稿ではこれにならひ呼称する。林氏資料においては前者は五十九点、後者は八〇点確認できた。いずれも平縁で波状口縁や突起等はない。

厚めの器壁、赤褐色を帯びた胎土に白色の砂粒が目立つ点等はこれまでに指摘されてきた通りである。また岡本氏が「軽鬆」とした胎土「脆く」「火山灰を思わせるような粘着性に乏しい」土<sup>粒</sup>が用いられる例も散見される。これらには器壁に発泡痕のような1mm程度の小穴が多数認められることが多い。

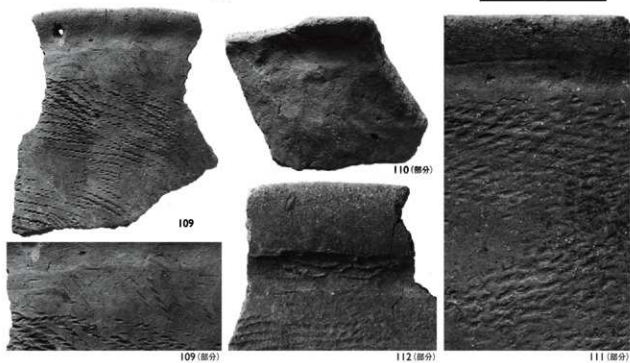
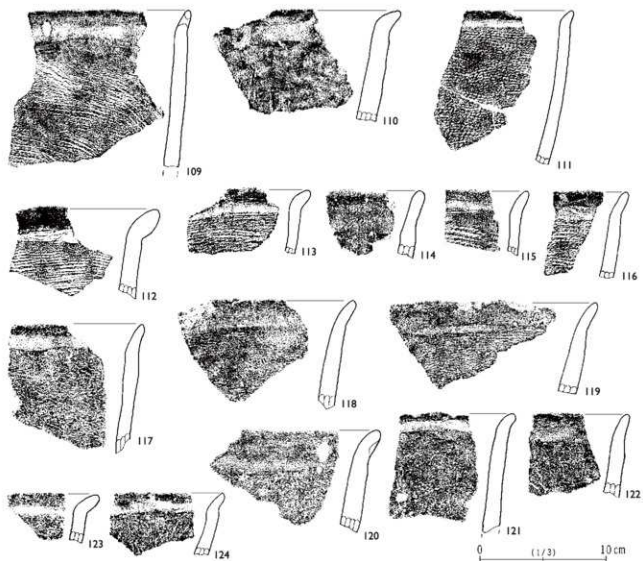
#### a. 口縁部に屈曲をもつもの—大浦山式a類—

87・145は口縁部に屈曲をもつもので「大浦山式a類」と呼称される一群である。原田昌幸氏(一九八九)が指摘するように屈曲部の形態にはいくつかのヴァリエーションがあり、段状となるもの(87・97など、原田氏の「形態③」に概ね該当する)、凹線状となるもの(100・122など、原田氏の「形態②」に概ね該当する)、緩いカーブとなるもの(125・145など、原田氏の「形態①」に概ね該当する)に大別できる。ただ、これらの差は漸位的であり、一全体内でも部位により形態が異なることもある。99では、破片の左方の屈曲は緩いカーブになっているが、右方では段状になる。

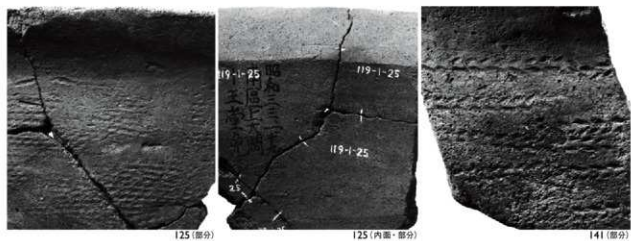
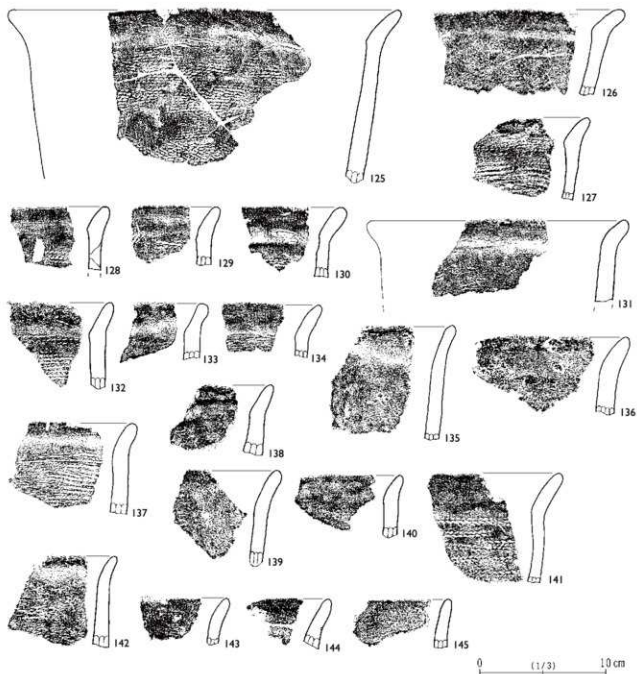
口縁部から屈曲部までは無文となる。無文部の幅は1〜3cm程度で、2〜3cm程度になるものが多い。器面には横位の調整痕が観察される(87・99などの写真参照)。

屈曲部内面形態にも、稜が作出されるもの(87・97、99・108など)、緩いカーブとなるもの(98、118・122など)があり漸位的な変化が見られる。傾向としては外面の屈曲部が段状になるものは内面にも明確な稜が作出されるものが多く、外面が凹線状、緩いカーブになるものは内面も緩いカーブになるものが多いようである。

外面の屈曲部以下には捺糸文が横位に施文される。原体は捺糸Rがほとんどを占める。条間隔は1〜2mm程度のものが多いが、4〜5mm程度とやや広いもの(104、106、109など)も認められる。施文範囲は屈曲部以下の全面に及ぶが、87のように屈曲部下10cm程度に施文され、それ以下は疎らとなる例もある。施文の密度はあまり高くなく、無文部も多く残される。圧痕は深く、節の明瞭なものが多い。また、原体の回転方向は横位であるが、施文単位の一つ一つは弧状となるものが多く、口縁部



第 11 図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (7) (当館蔵)



第12図 横浜市十王堂免遺跡採集土器(8) (当館蔵)

から胴部上半においては弧は上を向くことが多い。これは施文する際、正位の土器に向き合い施文したことを示している可能性がある。捺糸文は屈曲部の端から施文されるものが多いが、屈曲部の調整痕を観察すると、調整により盛り上がりつつ粘土が捺糸文を押し潰している箇所が確認できることから(87)の写真参照、捺糸文を施文した後には屈曲部の調整を行なっていることが分かる。屈曲部以下の器面についても同様で、捺糸文が一部磨り消し状になったり、節の縁が潰れている箇所が散見できる。また捺糸文が施文されていない箇所も平滑に撫でられることが多い。これらのことから、捺糸文を施文した後には器面全体が弱く撫でられていると考えられる。この平滑な撫で調整の技法は大浦山式にみられる特徴の一つで(87、99、111などの写真参照)、これにより器面には独特の平滑なツヤが認められることが多い。調整の単位や方向は不明瞭である。またこの平滑面の厚さは非常に薄く、使用や埋没により容易に剥離してしまうようである。このような調整痕が残る技法については実験的な方法も含め今後の検討が必要であるが、器面を撫でる際に僅かに水分を含ませた状態で行なっていることなどが想像される。

99は捺糸文に加え、横位に連続する節状の点列が屈曲部下方に施文される。捺糸原体を回転させずに押捺した絡糸体圧痕であろう。捺糸文の後には施文されている。96の屈曲部に見られる点列も絡糸体圧痕の可能性がある。絡糸体圧痕をもつ土器片は大浦山遺跡でも出土している(岡本一九六〇)。器面には白色の付着物が目立つ。104は捺糸文が横位、斜位に施文される。残存部が少なく全体の構成は不明だが、鋸歯状の施文となる可能性もある。捺糸文の鋸歯状施文は大浦山式にはみられない要素で、近隣では花輪台式の一部に横位、縦位、斜位を組み合わせた施文が確認できる(千葉県南外輪戸遺跡例など、中西・中野一九八五)。本資料は器

形や胎土等の特徴から大浦山式土器と考えておくが、文様施文の技法は関東地方東部の要素の影響を受けている可能性も指摘しておきたい。109にも屈曲部下に縦位の捺糸施文がわずかに認められるが、施文は弱く疎らであり、偶発的な痕跡の可能性もある。141は一段の縄文RとLを一組として押捺施文されるもので、同様の手法による施文は胴部破片(250、251)にも確認できる。類例は横浜市山田大塚遺跡(横浜市埋蔵文化財センター編一九九〇)や藤沢市片瀬山遺跡(宮城北遺跡発掘調査団編一九九四)に存在し、石井寛氏は「大浦山I式土器a類」に至る前段階で横位が主体となる施文方向などから過渡期的様相を示すものと捉えている(石井一九九二)。戸田哲也氏はこれを「花輪台I式と共通する文様手法」とした上で、石井氏と同様に「横位多段施文の一段の縄という点においては、大浦山I式の横走捺糸文の初源的な文様と推測することも可能」だと指摘している(戸田一九九五)。

なお、屈曲する口縁部をもつものの中には、胴部が無文となるものも一定数存在するが(110、120、123など)、器形や屈曲部の作出、胎土等の類似性から大浦山式の一部分として扱っておく。ただその中で110は器壁がやや厚く、胎土も白色味を帯びている。器面には凹凸が顕著で他の土器群とはやや異なる様相を示している。

内面調整についても、全面が平滑に撫でられるものが多いが、擦痕が観察されるものもある。88は刷毛状の擦痕が横位に、99ではやや粗い擦痕が胴部上半では横位に、中位では斜位に認められる(写真参照)。98、105、107などの胎土はやや「軽鬆」である。また、補修孔をもつ破片が多く存在するが、これについては後述する。

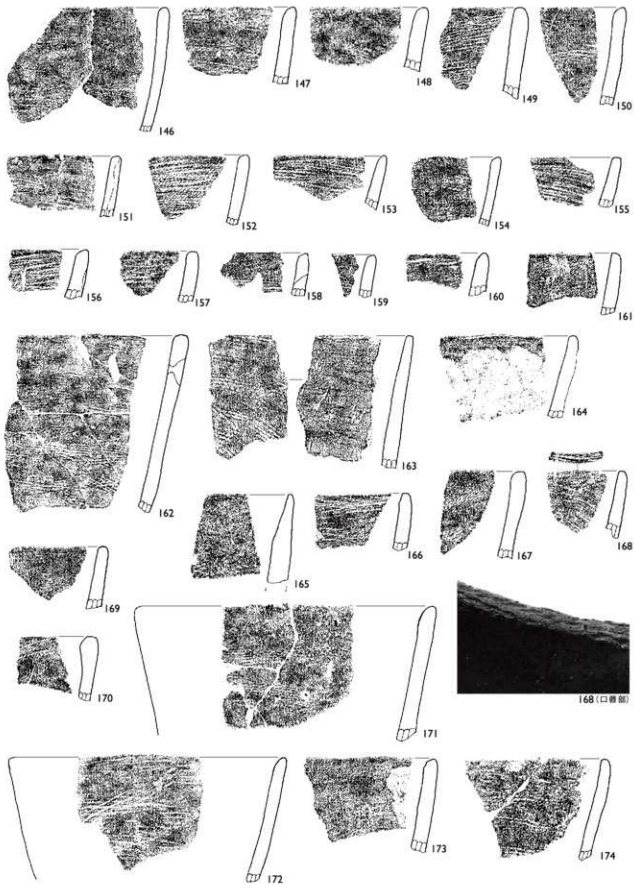
b. 口縁部が直立するもの—大浦山式b類—

146、222は口縁部が直立するもので「大浦山式b類」と呼称される一群

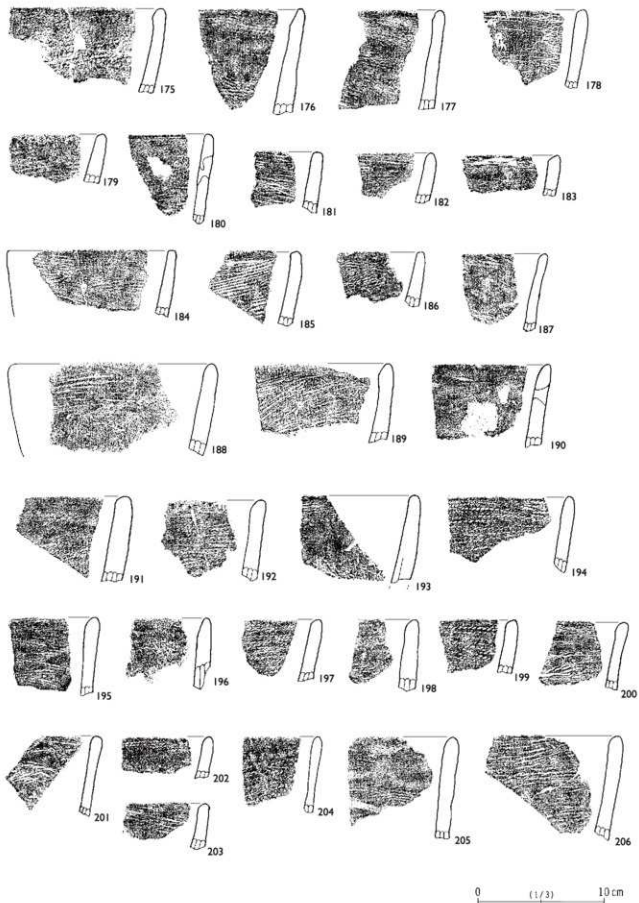
第3表 横浜市十五堂免遺跡採集土器観察表(大浦山式a類)

番号	注記番号	重量 (g)	施文具	器面調整(外面)		器面調整(内面)		備 考
				口縁～器底部	器底部以下	口縁～器底部	器底部以下	
87	119-1-002	524	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	磨痕(横・斜)	燃糸は一部磨り消し状になる。
88	119-1-005	120	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	不明	燃糸は一部磨り消し状になる。
89	119-1-021	107	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	磨痕(横)	燃糸は一部磨り消し状になる。
90	119-1-032	98	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	平滑なナデ	
91	119-1-016	62	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ナデ	
92	119-1-026	25	燃糸R	磨痕(横)	不明	不明	不明	
93	119-3-060	27	—	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	磨痕(横)	
94	119-1-019	123	燃糸R	磨痕(横?)	平滑なナデ?	磨痕(横)	磨痕(横)?・調整具痕跡?	器底部にも一部燃糸文施文される。
95	119-1-042	86	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	磨痕(横)	全体に磨成。
96	119-1-044	41	不明	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	器底部直下に輪状体圧痕あり。
97	119-1-027	36	燃糸R?	磨痕(横)	不明	不明	不明	
98	119-3-224	34	—	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	全体に磨成。
99	119-1-001	896	燃糸R	磨痕(横)	ナデ	磨痕(横)	磨痕(横・斜・器部下半は縦)	数か所に輪状体圧痕あり。
100	119-1-009	126	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	不明	
101	119-1-013	108	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	やや平滑なナデ	やや平滑なナデ・調整具痕跡?	燃糸文は一部磨り消える。
102	119-1-014	371	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	全体に器面荒れ。
103	119-1-028	305	燃糸R?	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ナデ	全体に器面荒れ。燃糸斜位施文?
104	119-1-033	211	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	粗い磨痕(横・斜)	器底面の燃糸文?・横位の燃糸文
105	119-1-003	147	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ケズリナデ	
106	119-1-020	131	燃糸R	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	
107	119-1-040	93	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ケズリナデ	器面の一部脱落。
108	119-3-085	25	—	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	粗い磨痕(横)	全体に磨成。
109	119-1-041	197	燃糸R	磨痕(横)	磨痕(横・斜)	磨痕(横)	磨痕(横・斜)	
110	119-1-012	181	—	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	ケズリ状磨痕(横・斜)	大浦山式類の器面磨成。器底部に凹み施文あり。破片下方部には浅溝の痕跡あり。粘土、色黄が他の土器とやや異なっており全体に堅縮な印象。
111	119-1-015	105	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	不明	不明	燃糸は一部磨り消し状になる。
112	119-1-034	82	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ナデ	器底部円周上には厚体圧痕が見える。
113	119-1-010	53	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	磨痕(横)	施文はごく浅い。
114	119-3-082	37	—	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ナデ	
115	119-1-031	31	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	磨痕(横)	
116	119-1-007	35	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	磨痕(横)	
117	119-1-038	121	燃糸R?	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	粗い磨痕(横・斜)	
118	119-1-035	118	燃糸R?	磨痕(横)	ナデ	磨痕(横)	磨痕(横)	施文はごく浅い。
119	119-1-030	113	燃糸R?	磨痕(横)	不明	不明	不明	全体に磨成。
120	119-1-022	111	—	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	
121	119-1-043	105	—	磨痕(横)	ケズリナデ	磨痕(横)	ケズリナデ?	
122	119-1-045	57	—	磨痕(横)	不明	不明	不明	一部に燃糸文のようにも見えるが、不明瞭。
123	119-1-024	28	—	不明	不明	磨痕(横)	不明	全体に磨成。
124	119-1-047	45	—	—	—	—	—	
125	119-1-025	354	燃糸R	磨痕(横・斜)	平滑なナデ	磨痕(横)	ナデ(横)	内面のナデが磨成。燃糸文は一部磨り消える。
126	119-1-006	136	—	磨痕(横)	不明	不明	不明	一部に燃糸文のような痕跡が見えるが、不明瞭。
127	119-1-023	60	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	ナデ・調整具痕跡?	
128	119-1-008	40	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	ナデ(横)	
129	119-3-073	34	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	ナデ	
130	119-1-037	41	燃糸R	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	ナデ	内面のナデが磨成。
131	119-1-011	109	燃糸R?	磨痕(横)	平滑なナデ	磨痕(横)	磨痕(横)	施文はごく浅い。
132	119-1-029	51	燃糸R	磨痕(横)	不明	不明	不明	
133	119-1-046	36	—	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	
134	119-1-036	31	不明	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	
135	119-1-039	86	—	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	ケズリナデ?	
136	119-3-063	86	—	不明	不明	不明	不明	一部に燃糸文のような痕跡が見えるが、不明瞭。
137	119-1-018	83	燃糸R	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	磨痕(横・斜)	
138	119-3-091	51	—	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	不明	
139	119-3-310	42	—	ケズリ状磨痕(斜)	ケズリ状磨痕(斜)	磨痕(斜)	磨痕(斜)	
140	119-1-004	39	—	磨痕(横)	磨痕(横)	磨痕(横)	ケズリ状磨痕(横・斜)	大浦山式類の器面磨成。器底部に凹み施文あり。横位の粗粒状体圧痕。
141	119-1-017	77	燃糸R・燃糸L	磨痕(横)	不明	磨痕(横)	不明	
142	119-1-084	59	燃糸R?	不明	不明	不明	不明	全体に磨成。
143	—	19	—	磨痕(横)	—	不明	不明	全体に磨成。
144	119-3-365	15	不明	磨痕(横)	—	磨痕(横)	—	
145	119-3-077	25	—	磨痕(横)	—	磨痕(横)	—	

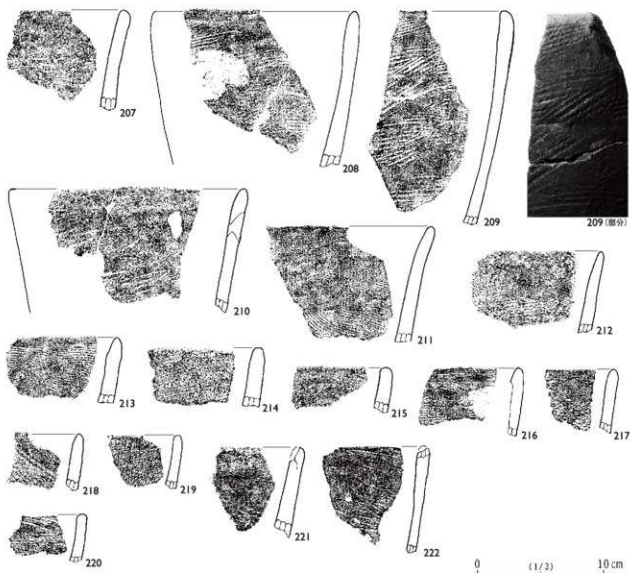




第13図 横浜市十王堂免遺跡採集土器(9) (当館蔵)



第14図 横浜市十王堂免遺跡採集土器(10) (当館蔵)

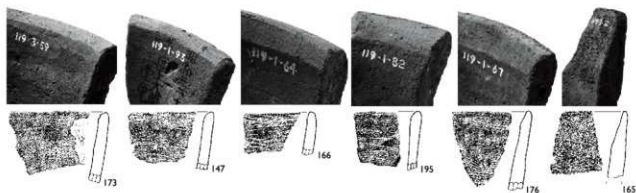


第15図 横浜市十五堂免遺跡採集土器 (11) (当館蔵)

である。口縁部形態以外の特徴―捺糸文やその施文範囲、胎土、焼成、色調、混和材、内外面の器面調整、補修孔など―は概ねa類と共通する。捺糸文は口唇直下から施文されるものが多いが、口唇部下の1cm弱を無文とするものもある(176、177など)。193は口唇部直下では横位の施文、2cm程の無文部を挟み下方は斜位施文となる。

口縁は緩く内湾あるいは直立するものが多く、外反するものは少ない。口唇部断面は、僅かに内削ぎ傾向の丸棒状となるものが多いが、面取りされ角頭状になるものも少数存在し(155、184など)、168では面取りされた口唇部にも横位の捺糸文が施文されている。原田氏も同様の傾向を指摘しており、「ほぼ円頭状のもの」「やや内削ぎ状で、断面がやや尖頭状を呈するもの」「口唇部上端に、狭小な平坦面が作られるもの」の三形態に分類している。また、口縁部内面に稜が作出されるものも散見される(第16図)。稜は角頭状口唇の内側の縁が下方へ移行することで生じたと考えられるかも知れない。a類にみられた内面に稜をもつ一群との関連も示唆される。内面調整についても基本的にはa類と同様だが、163の内面には調整具の痕跡が残る(後述)。205、213の器面は調整のため凹凸が目立つ。

なお、b類には横位の捺糸文以外の施文―a類



第16図 大浦山式土器b類のうち口縁部内面に稜がみられる土器群

にみられたような横位と斜位の組合せ、絡条体圧痕、原体横位押捺など―は認められなかったが、このこととa・b類の違いに関係があるのかは即断できない。「軽腫」な胎土をもつものはa類に比べ少なく、207、210、219に認められる。

c. 胴部および底部

223、251は胴部、252、276は底部の破片である。土器片の諸特徴はa、b類と基本的に同様で、いずれに属するかは判別できない。燃糸文の施文方向は胴部下半から底部へ近づくにつれ横位から斜位となり、ほとんど縦位になるものも存在する。243、252など。また施文單位の一つ一つが口縁部付近では上を向く弧状となるものが多いと指摘したが、胴下半から底部では下を向く弧状になることが多く、施文の際の身体動作を考える上で注意される。

施文には燃糸文のほか、絡条体圧痕(245、247、272)、横位押捺施文

(250、251)に加え、縦位の条線のあるもの(248、249、273、274)がある。絡条体圧痕は、これまでに知られていた例では破片が小さかったこともあり、文様要素としてではなく偶発的な原体接触の結果として捉えられてきた(岡本一九六〇、原田一九八九)。しかし、本遺跡例では複数の条が平行して押捺されており、条の長さも揃っている。これらは偶発で生じたとは思わず、一つの文様要素として認めてもよいだろう。花輪台式や、いわゆる「金堀式」(藤原一九七七)との関係も無視できない。250はRとLの原体を組み合わせて押捺施文されるが、251では二条のRを組み合せている。縦位の条線をもつものは大浦山遺跡にも類例があるが、岡本氏は「文様として意識的に施されたものではないだろう」としている(岡本一九六〇)。原田昌幸氏もこれらの土器に着目し、周辺他型式に手法上の類似するものを挙げるが「大浦山式土器で、モチーフが明確な沈線文併用個体の報告はない」とし、積極的な解釈は控えている(原田一九八九)。大浦山遺跡例では条線は平行する二本からなっており、岡本氏は燃糸原体の一端が偶然に器面に接触したことにより生じた痕跡と考えているが、本遺跡例では条線は四本程度で、やや様相は異なる。

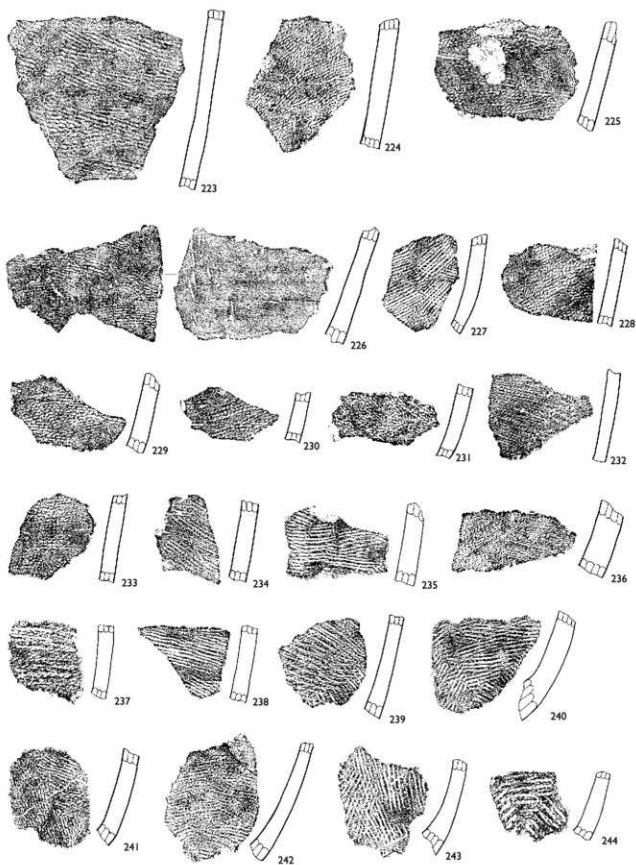
底部はやや尖り気味の丸底となるものが多い。先端部の内面は胴部器壁の倍近くの厚さに肥厚するものも多く、大浦山式の特徴の一つといえる。一方で259や268のようにあまり肥厚しないものもある。土器の大きさにも関連しよう。

燃糸の施文は、底部に近づくほど施文單位が小さくなり、先端部を取り巻くように施文することで、先端は菱形状や多角形状の施文になる(253、254、257など)。

275、276は施文の方向や胎土等他の土器群とは様相が異なっている。275は燃糸文が底部先端まで縦位に施されており、大浦山式以前の所産とも

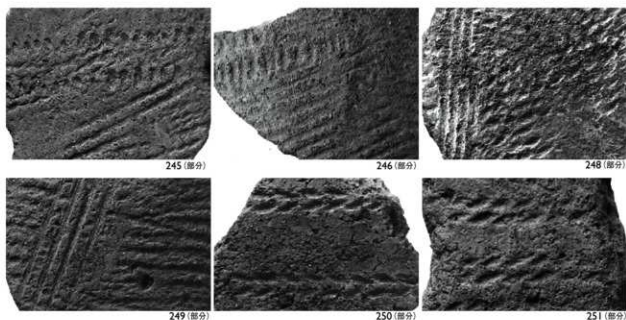
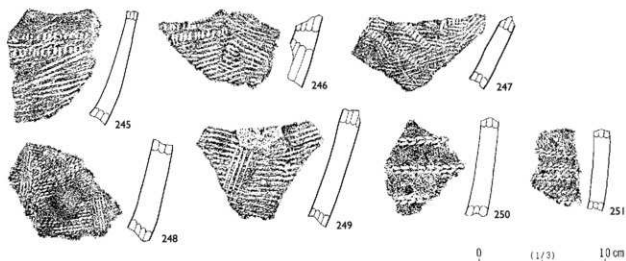
第4表 横浜市十五堂免遺跡採集土器観察表(大浦山式b類)

番号	注記番号	重量(g)	施文具	口器部断面形態	器面調整(外面)	器面調整(内面)	備考
146	119-1-090	123	燃赤丸	面取り・内縁	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	口縁部下6cmほどは無文となる。
147	119-1-093	64	燃赤丸	面取り・内縁・段あり	ナデ(横)	ナデ(横)	
148	119-1-069	65	燃赤丸	面取り・内縁・段あり	ナデ(横)	ナデ(横)	口縁から5mmほど下方に水平に削り付
149	119-1-083	53	燃赤丸	面取り・内縁	ナデ(横)	ナデ(横)	
150	119-1-049	54	燃赤丸	面取り・内縁	平滑なナデ(横)	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	
151	119-1-102	52	燃赤丸	面取り・内縁	不明	ナデ(横)	
152	119-1-063	41	燃赤丸	面取り・内縁	不明	ナデ(横)	
153	119-3-055	36	燃赤丸	面取り・内縁	不明	不明	
154	119-3-093	34	燃赤丸	面取り・内縁	平滑なナデ(縦?)	不明	
155	119-3-051	30	燃赤丸	面取り・内縁	平滑なナデ	不明	
156	119-3-057	29	燃赤丸	面取り・内縁	ナデ(横)	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	
157	119-3-079	24	燃赤丸?	面取り・内縁	不明	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	
158	119-3-095	21	燃赤丸	面取り・内縁・削り段あり	平滑なナデ(縦)	横紋(横)	
159	—	8	燃赤丸	面取り・内縁・削り段あり	平滑なナデ	ナデ(横)	
160	119-3-088	25	燃赤丸?	内肩ぎ	ナデ	ナデ	全体に厚減
161	119-3-384	35	燃赤丸	面取り・外縁	平滑なナデ	ナデ	施文はごく弱い
162	119-1-091	250	燃赤丸	面取り	平滑なナデ	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	
163	119-1-101	109	燃赤丸	面取り	ナデ	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	内面の調整具アタリ明瞭
164	119-1-056	73	燃赤丸	面取り	不明	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	外面の大部分は剥落
165	119-3-052	70	燃赤丸	面取り・幅広い段あり	ナデ	ナデ	
166	119-1-064	41	燃赤丸	面取り・やや幅広い段あり	平滑なナデ	ナデ(横)	
167	119-1-062	41	燃赤丸	面取り	ケズリ→ナデ(縦横)	ナデ(横)	
168	119-3-086	32	燃赤丸	面取り	不明	ナデ(横)	口唇にも燃赤施文
169	119-3-090	35	燃赤丸?	面取り	平滑なナデ(横)	ナデ(横)	
170	119-1-074	31	燃赤丸	面取り・肥厚・削り段あり	平滑なナデ	ナデ(横)	
171	119-1-070	230	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	ナデ(横)	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	全体に厚減、内面調整の傾力向の単位明瞭
172	119-1-050	130	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	燃赤の施文方向は、水平→斜位となる
173	119-3-059	100	燃赤丸	わずかに面取り・内縁・削り段あり	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	
174	119-1-052	97	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	ケズリ→ナデ	ケズリ→ナデ	
175	119-1-061	96	燃赤丸	わずかに面取り・内縁・削り段あり	平滑なナデ	ナデ(横)	
176	119-1-067	81	燃赤丸	わずかに面取り・やや幅広い段あり	平滑なナデ	ナデ(横)	
177	119-1-086	70	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	平滑なナデ	ナデ	
178	119-1-080	54	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	平滑なナデ	横紋(横)・調整具アタリ痕跡?	
179	119-3-072	39	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	不明	ナデ(横)	
180	119-1-058	40	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)	縁線(今中谷)を切つて、別の焼成あり
181	119-3-075	27	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)	
182	119-3-071	27	燃赤丸	わずかに面取り・内縁	ナデ(横)	ナデ(横)	施文は弱い
183	119-3-089	29	燃赤丸	わずかに面取り・内縁・削り段あり	ケズリ→ナデ	ナデ(横)	
184	119-1-078	65	燃赤丸	わずかに面取り	ナデ	不明	
185	119-3-092	40	燃赤丸	わずかに面取り	ナデ	不明	全体に厚減
186	119-3-065	31	燃赤丸?	わずかに面取り	ナデ(縦?)	横紋(横)	
187	119-3-083	31	燃赤丸?	わずかに面取り	平滑なナデ	ナデ	
188	119-1-072	124	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	ナデ	全体に厚減
189	119-1-094	84	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	ナデ	
190	119-1-048	75	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)	
191	119-1-089	74	燃赤丸	丸形状・内縁	横紋(横)	ナデ(横)	
192	119-1-051	59	燃赤丸	丸形状・内縁	不明	横紋(横)	
193	119-1-085	57	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	横紋(横)	口縁直下は水平、下下は斜位の燃赤施文
194	119-1-066	54	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	平滑なナデ	
195	119-1-082	48	燃赤丸	丸形状・内縁・やや幅広い削り段あり	平滑なナデ	平滑なナデ	
196	119-3-056	44	燃赤丸?	丸形状・内縁	不明	ナデ(横)	
197	119-1-055	30	燃赤丸	丸形状・内縁	不明	ナデ(横)	全体に厚減
198	119-3-066	32	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	横紋(横)	
199	119-3-058	33	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)	
200	119-3-062	31	燃赤丸	丸形状・内縁	平滑なナデ	ナデ(横)	
201	119-3-081	27	燃赤丸?	丸形状・内縁	ナデ	ナデ(横)	
202	119-3-096	28	燃赤丸	丸形状・内縁	ナデ(横)	横紋(横)	
203	119-3-084	23	燃赤丸	丸形状・内縁・削り段あり	横紋(横)	ナデ	施文は弱い
204	119-3-078	25	燃赤丸	丸形状・内縁	不明	横紋(横)	
205	119-1-087	73	燃赤丸	丸形状・段あり	ナデ	ナデ(横)・調整具アタリ痕跡?	器面調整のためか、外面は削り(凹み)がある
206	119-1-075	92	燃赤丸	丸形状・削り段あり	平滑なナデ(横)	ナデ(横)	口縁直下から施文
207	119-1-071	71	燃赤丸?	丸形状・外縁	不明	不明	全体に厚減
208	119-1-053	153	燃赤丸	丸形状	ナデ(横)	ナデ(横)	
209	119-1-060	151	燃赤丸	丸形状	平滑なナデ	ナデ(横)	燃赤の施文方向は、水平→斜位となる
210	119-1-088	146	燃赤丸	丸形状	ナデ	ナデ	
211	119-1-073	137	不明	丸形状	不明	不明	施文は浅く、一単位は小さい
212	119-1-059	74	燃赤丸	丸形状	不明	不明	全体に厚減
213	119-1-079	64	燃赤丸	丸形状	ナデ	ナデ(横)	器面調整のためか、外面は削り(凹み)がある
214	119-3-291	59	燃赤丸	丸形状	不明	不明	
215	119-3-061	32	燃赤丸?	丸形状	不明	不明	全体に厚減
216	119-3-053	29	燃赤丸	丸形状	ナデ(横)	ナデ(横)	内面の大部分は剥落
217	119-3-074	25	燃赤丸?	丸形状	平滑なナデ	ケズリ?→ナデ(ナデ)	
218	119-3-372	22	燃赤丸?	丸形状	ナデ	不明	全体に厚減
219	—	18	燃赤丸	丸形状	ナデ(縦?)	横紋(横)	
220	119-3-068	19	燃赤丸?	丸形状	不明	ナデ(横)	口唇は削られる
221	119-3-070	49	燃赤丸	不明	平滑なナデ	ナデ	
222	119-1-065	51	燃赤丸	不明	平滑なナデ	ナデ(横)	



0 (1/3) 10 cm

第 17 图 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (12) (当館蔵)



第18図 横浜市十五堂免遺跡採集土器 (13) (当館蔵)

考えられるが、底部付近の顕著な肥厚は夏島式や稲荷台式としては躊躇される。破片左上には斜位の燃糸文もわずかに確認できることから大浦山式の範疇で捉えておきたい。276も縦位施文だが、いずれの条も先端を中心に放射状となっており一条ずつの押捺施文であることが分かる。にわか大浦山式とはし難いが、275と同様に底部の顕著な肥厚は大浦山式以前とも考えうらい。ただ、275、276ともに胎土が緻密で焼成も堅緻であり他の大浦山式土器とは異なっている。

底部に明瞭な使用痕を残すものは少なく、107、258、268などの先端が磨り減っている以外は胴部や口縁部の表面との遺存状態の違いはほとんど認められない。

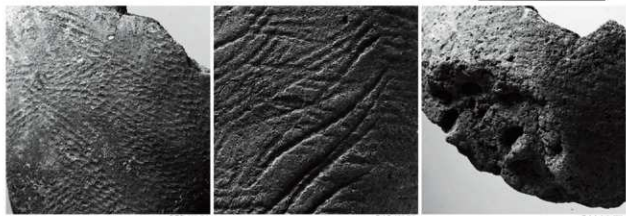
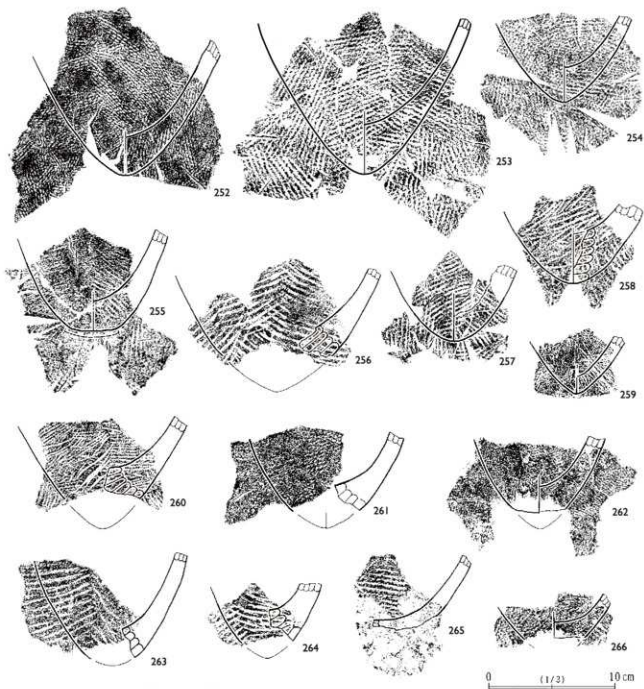
266は先端部が剥落しているが、その破断面には指頭状・爪状の刺突が認められる(写真参照)。土器製作時における底部先端の粘土接着の強化を図ったものであろう。同様の痕跡は264、265にも認められる。

「軽懸」な胎土は、胴部破片では243、237、底部破片では266、269に認められる。

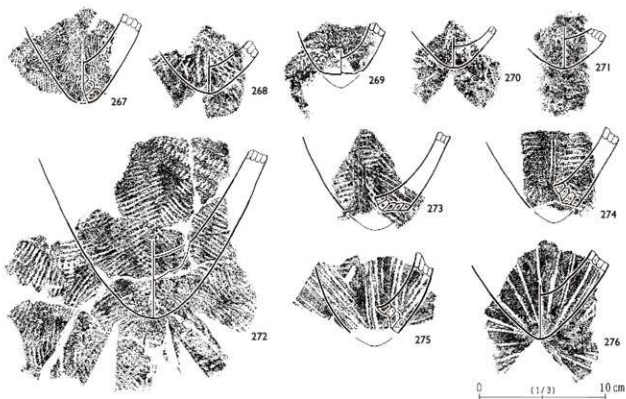
(4) 東山式 (第21図、第6表)

277、297は、口縁部直下に一条の沈線が巡り、それ以下は無文となる一群で、いわゆる東山式と呼





第19图 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (14) (当館藏)



275 (部分)



276 (部分)

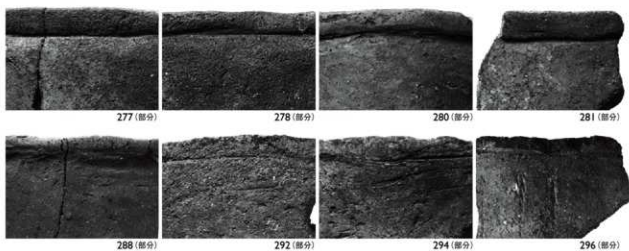
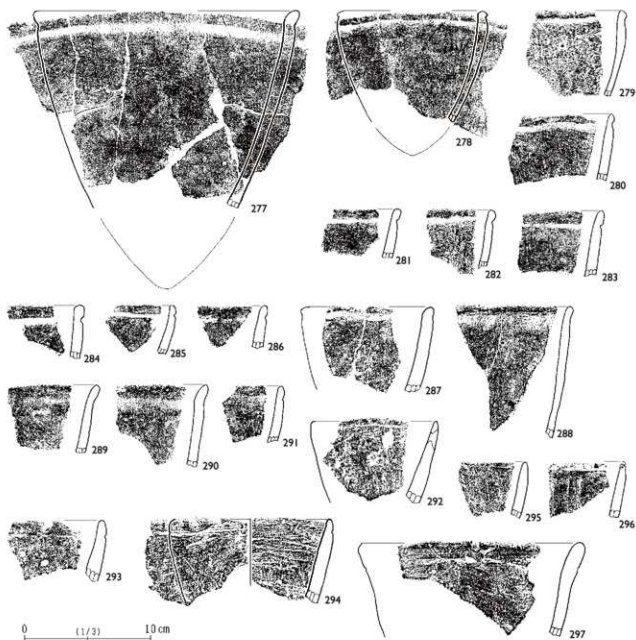
第20図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (15) (当館蔵)

称されるものである(原田一九八六)。原田氏は主に沈線描出技法、口唇断面形状とその整形手法を「手抜き方向性」から分類し東山式の変遷を整理している。それによると、沈線描出技法には、明瞭な単沈線によるもの、断面U字状で比較的太く明瞭な沈線によるもの、五〜六cm単位の細く浅い短沈線の連続となるものがあり、極めて漸位的な変化が認められる。また口唇部断面形状の概括的な変化として「上面が凹頭状から僅かに平坦面として意識される段階」、「外側に肥厚した口唇部上面が、確実な平坦面として意識される段階」、「口唇上面に加え、口唇直下の外面をも平坦面化し、断面がより整った角頭状になる段階」と整理している。また、角頭状断面となる段階には「むしろ尖頭状を呈する資料も存在する」。

林氏資料の中にも、段状となるもの(279、281など)、沈線、凹線となるものがあり、口唇部から沈線までの幅にも差が認められる。口縁部は緩く内湾するものが多い。口唇部断面は丸棒状となるが、外削ぎ状に弱く尖るものも散見される(280、291、292、294など)。原田氏の指摘し

第5表 横浜市十五堂免遺跡採集土器観察表 (大浦山式 胴部・底部)

番号	注記番号	重量(g)	施文具	器面調整(外面)	器面調整(内面)	備考
223	119-3-138	290	捺赤L?	ナデ	ナデ(横)	施文は浅い。内面の調整単位明確。
224	119-3-141	166	捺赤R	ナデ	ナデ?	横位・縦位の捺赤施文。
225	119-3-142	149	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	捺赤は一部磨り消し状になる。
226	119-3-137	222	捺赤R	ナデ	ナデ(横)・調整具痕跡明確	施文はごく浅い。内面の調整単位明確。
227	119-3-099	60	捺赤R	ナデ	不明	
228	119-3-104	77	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	捺赤は一部磨り消し状になる。
229	119-3-108	98	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	
230	119-3-115	48	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	
231	119-3-119	66	捺赤R	ナデ	ナデ(横)	
232	119-3-128	66	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	
233	119-3-129	64	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	捺赤は一部磨り消し状になる。
234	119-3-135	60	捺赤R	磨痕(縦)	磨痕(横・縦)	
235	119-3-149	92	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	横位(凹)の捺赤施文。
236	119-3-151	113	捺赤R	ナデ?	ナデ	横位・斜位の捺赤施文。
237	—	63	捺赤R	ナデ?	ナデ	
238	—	61	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	
239	119-3-148	83	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	
240	119-3-160	124	捺赤R	ナデ	ナデ	横位(凹)の捺赤施文。
241	119-3-166	95	捺赤R	平滑なナデ	不明瞭	横位・斜位の捺赤施文。
242	119-3-162	105	捺赤R	ナデ	ナデ	
243	119-3-161	85	捺赤R	ナデ	ナデ	底部付近鏡片。
244	—	50	捺赤R	平滑なナデ	不明瞭	底部付近鏡片。
245	119-3-143	101	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	捺赤文一絡状体圧痕。
246	119-3-144	101	捺赤R	ナデ	ナデ	捺赤文一絡状体圧痕。
247	119-3-147	87	捺赤R	ナデ	ナデ・一部条痕状磨痕	捺赤文一斜位の絡状体圧痕。
248	119-3-159	131	捺赤R	ナデ	ナデ	横位の捺赤文・縦位の磨面状沈線。
249	119-3-164	131	捺赤R	ナデ	ナデ(横)	横位(凹)の捺赤文・縦位の磨面状沈線。
250	—	67	捺赤R・捺赤L	ナデ	ナデ(横・斜)	横位の粗粒状絡状体圧痕。
251	—	39	捺赤R・捺赤L	ナデ	ナデ(横)	横位の粗粒状絡状体圧痕。
252	119-1-106	395	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	捺赤施文は横位、斜位で、底部先端まで及ぶ。先端は特にすり減らない。
253	119-1-104	440	捺赤R	不明	ナデ	
254	119-1-108	216	捺赤R	ナデ	ナデ	全体に摩滅。底部先端の捺赤施文は菱形状。
255	119-1-107	235	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	底部先端の捺赤施文は菱形状。底部先端すり減り。
256	119-3-154	184	捺赤R	ナデ	不明	捺赤文は一部磨り消える。
257	119-1-109	119	捺赤R	平滑なナデ	不明	底部先端の捺赤施文は菱形状。先端は特にすり減らない。内面は全体剥落。
258	119-1-116	143	捺赤R?	ナデ	不明	底部先端の捺赤施文は菱形状。先端はややすり減る。
259	119-3-183	40	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	底部先端の捺赤施文は菱形状。先端は特にすり減らない。
260	119-3-156	164	捺赤R	ナデ	ナデ	捺赤は一部欠れる。
261	119-3-157	127	捺赤R	不明	不明	全体に摩滅する。
262	119-3-167	201	捺赤R?	ナデ	ナデ	
263	—	110	捺赤R	ナデ	ナデ	底部付近鏡片。横位(凹)の捺赤施文。
264	—	68	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	横位(凹)の捺赤施文。底部との縦断面には指面状・爪状の凹凸あり。断面には粘土層ざらし痕が見える。
265	119-3-165	80	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	底部付近鏡片。断面の半分は剥落。底部との縦断面には指面状・爪状の凹凸が多数あり。
266	119-3-158	67	捺赤R?	ナデ	ナデ	底部との縦断面には指面状・爪状の凹凸が多数あり。
267	119-1-118	114	捺赤R	ナデ	不明	横位・斜位・縦位の捺赤施文。捺赤は細い。
268	119-1-119	64	捺赤L	平滑なナデ	ナデ	捺赤施文は横位、斜位で、底部先端まで及ぶ。先端はややすり減る。
269	—	48	捺赤R?	ナデ?	ナデ	全体に摩滅
270	119-3-189	38	捺赤R	不明	不明	縦位・斜位の捺赤施文。底部の壁厚の程度が薄い。
271	—	61	捺赤R	不明	ナデ	全体に摩滅
272	119-1-105	667	捺赤R	平滑なナデ	ナデ	横位(凹)・斜位の捺赤施文。底部先端の捺赤施文は菱形状。捺赤文一斜位の絡状体圧痕。先端はややすり減る。底部先端の内面は剥落。
273	119-3-163	64	捺赤R	ナデ	不明	横位の捺赤文を切って、縦位の沈線が描かれる。
274	—	94	捺赤R	ナデ?	ナデ	底部付近鏡片。横位の捺赤文一縦位の沈線
275	119-3-168	123	捺赤R	ナデ	ナデ	縦位の捺赤施文。施文は深い。破片上方には横位の捺赤施文も見える。
276	119-3-169	183	捺赤R	ナデ	磨痕(放射状)	縦位の捺赤施文。施文は深い。一条ごとの絡状体圧痕が、底部先端すり減り。



第 21 图 横浜市十王堂免道跡採集土器 (16) (当館藏)

第6表 横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表(東山式)

番号	注記番号	重量(g)	口縁下沈線	器面調整(外面)	器面調整(内面)
277	119-1-095	404	段状	ナデ	磨痕(口縁部下2cm程は横・以下は縦)
278	119-3-309	133	段状	ケズリ状の磨痕(縦)	不明
279	119-1-099	38	段状	磨痕(縦)→ナデ?	磨痕(口縁部下2cm程は横・以下は縦・斜)
280	119-1-098	40	段状	凹みあり。	磨痕(縦)、凹みあり。
281	119-3-401	19	沈線	不明	不乳、凹みあり。
282	119-3-306	19	段状	ケズリ→ナデ	ケズリ状の磨痕(縦)
283	119-3-308	31	磨き足し状の沈線	不明	不明
284	119-3-400	17	段状	ケズリ状の磨痕(縦)	粗い磨痕(縦)
285	119-3-305	12	沈線	ナデ	ナデ
286	119-3-304	12	磨き足し状の沈線	ナデ	不明磨
287	119-1-097	54	凹線	磨痕(横・斜)	磨痕(横・斜)
288	119-1-096	53	磨き足し状の沈線	ナデ	ナデ
289	119-3-303	26	磨き足し状の沈線	ナデ	ナデ
290	119-1-100	35	磨き足し状の沈線	ナデ	不明磨
291	119-3-307	15	磨き足し状の沈線	不明磨	不明磨
292	119-3-214	54	細沈線	ナデ	ナデ
293	119-3-367	31	細沈線	ケズリ→ナデ	ケズリ状の磨痕(縦)
294	119-3-227	78	磨き足し状の沈線	不明	不明
295	119-3-373	18	細沈線	ナデ	不明磨
296	119-3-049	20	沈線	ケズリ→ナデ	不明磨
297	119-3-312	100	磨き足し状の段?	ミガキ	ナデ

たような、平坦面が意識される明確な角頭状となるものは見られない。器形が復元できるものは少ないが、概ね砲弾形になるものと考えられる。器壁は大浦山式と比べ薄く、やや灰色がかつた褐色を呈するものが多い。287、290の沈線は凹線状となる。290の内面には緩い稜が作出されており、本資料が大浦山式 a 類である可能性も示している。ただ、277の口唇部も端部が外反することで内面に弱く稜が作出されており、290も同様のものと考えておきたい。292、297の沈線は細く鋭い。292や295は口唇部から沈線までの幅が極めて狭くなる。296は口縁部に細い沈線が巡り、その下方には縦位に擦糸文が施文される。条の間隔は広く回転施文が押捺によるものかは判断としない。東山式は通常胴部が無文となるため、厳密には本資料は含まれないと考えるが、近接型式にも類例がないため、とりあえ

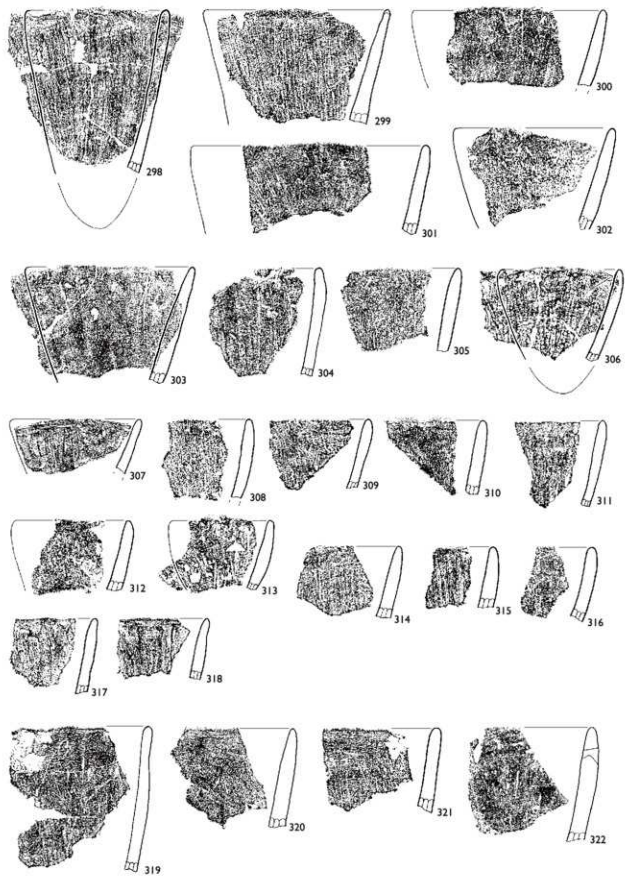
ず東山式に類似するものとして把握しておきたい。無文口縁部を沈線で区画し、それ以下が縦位の擦糸文となる点は稲荷原式の要素とも考えられるが、稲荷原式の口縁は肥厚し無文部も広い。さらに擦糸文の節は本資料に比し圧倒的に太い。これらのことを踏まえると本資料を稲荷原式とするのは難しい。297は口縁部がやや肥厚し外反する。他の東山式とはやや様相を異にしている。

#### (5) 無文土器(第22、31図、第7表)

298、561は無文土器である。破片数は二八六点で、林氏資料の中で最も多い。擦糸文期の無文土器については宮崎氏がその全体の概要を整理している(宮崎一九八二)。また、野内氏が細かな観察に基づく分類案を示し(野内一九八四)、それを原田氏が発展させ「平坂式」として再整理している(原田一九八七)。また、石井氏も指摘するように、無文土器は擦糸文期を通じて一定量伴うとも考えられており(石井一九九二)、これらの無文土器をそのまま「平坂式」ということは難しい。また、無文の底部破片では東山式の底部との判別も困難であり、ここに示す土器群の中には東山式に属するものも含まれる可能性も想定しておく必要がある。ここでは、主に口縁部断面形態、調整等から整理し記述する。

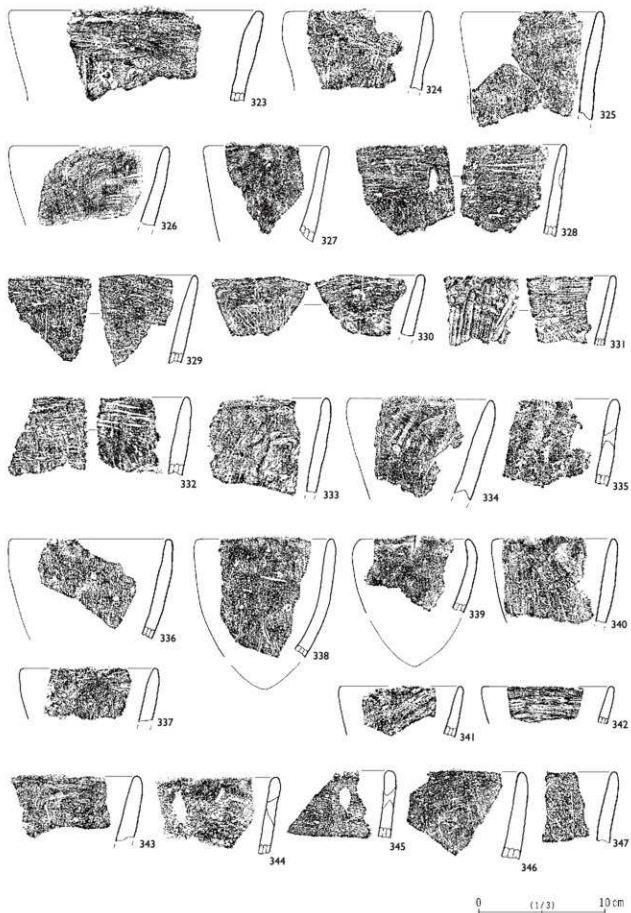
口縁部断面が丸棒状となるものは298、423、尖頭状となるものは424、472、角頭状となるものは473、484である。ほとんどが内湾あるいは直立する。298、368は口縁部が丸棒状で、口縁部直下のみ横方向、以下は縦方向の擦痕が観察される。その中でも298、318は横方向擦痕の幅が僅かで、口縁部直下のみとなる。369、380は口縁部の擦痕が斜方向となる。擦痕が明瞭に残るものも多い。調整の切り合いを観察すると、多くが全面を縦方向に調整した後、口縁部を横あるいは斜方向に調整している。

口縁部直下のみとなる。369、380は口縁部の擦痕が斜方向となる。擦痕が明瞭に残るものも多い。調整の切り合いを観察すると、多くが全面を縦方向に調整した後、口縁部を横あるいは斜方向に調整している。



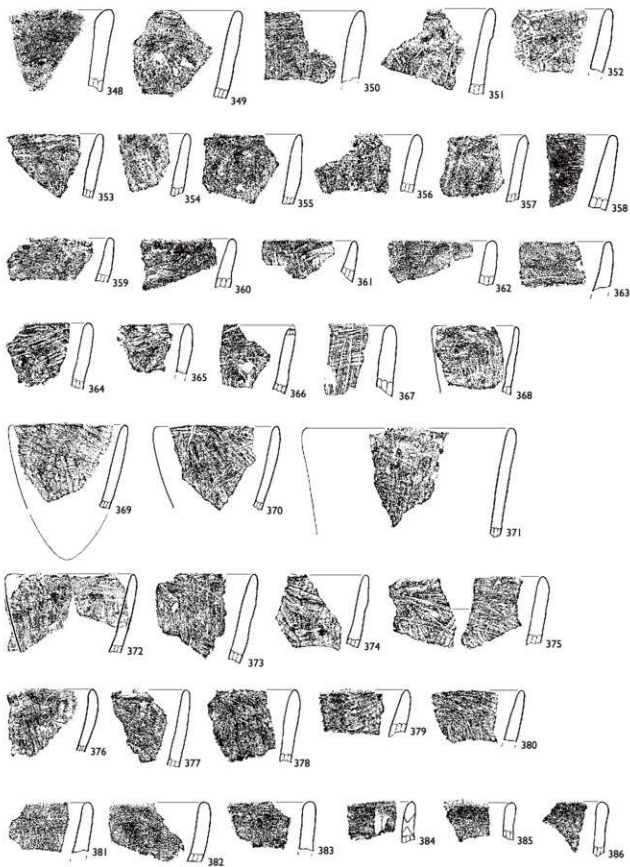
0 (1/3) 10 cm

第 22 図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (17) (当館蔵)



第 23 図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (18) (当館蔵)





0 (1/3) 10 cm

第 24 图 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (19) (当館蔵)

内面に明瞭な調整痕をもつものも散見される(328、329、331など)。内面の調整具は外面と異なるようで、条痕状の擦痕となるものが多い。

381、386は、口縁部が横方向に撫でられるものである。386を除く五点の調整は、大浦山式にみられる平滑な撫で調整に似ており、これらが大浦山式に属する破片である可能性もある。386は口唇部がやや肥厚しており、桶荷台式に伴う可能性がある。

387、394はケズリ状の粗い擦痕が横方向に観察される。これらは主に関東地方北部に分布する天矢場式の範疇で捉えられる土器群である(中村二〇〇)。特に387は口唇端から内面の磨き、黒色化がみられ、天矢場式の特徴をよく示している。

395、423の調整は不明瞭となる。423は胎土、色調、外反の様相等が他の土器群と異なっており、後期以降に下る可能性が高い。

424、472は口縁部断面が尖頭状となる。そのうち443、448が外削ぎ状、467、472が内削ぎ状、449、466がその中間な形状を示す。調整は丸棒状口縁と同様の様相で、口縁部が横方向、以下が縦方向となる。内削ぎ状となるものには、内削ぎの下端が稜のようになるものがあるが(467、469など)、これらの作出は大浦山式土器も類にみられた内面の稜をもつ土器群(第16図)と類似し、両者の関係を示す可能性がある。455の口縁には僅かに刻み状の凹みがあり、補修刻みの可能性もある。

473、484は口縁部断面が角頭状となる。面取りの意識はあまり強くなく、角は鋭い。473の口唇部には刻みが施される。

485、493は胴部破片である。いずれも縦方向の擦痕が顕著に認められる。487の上部には斜方向の擦痕が残る。485は補修孔が認められ、口縁部直下の破片であろう。

494、561は底部破片である。やや尖り気味の丸底となるものが多い。515、

519、520は先端に平坦面が認められ、いわゆる「半平底」となる(原田一九八七)。大浦山式の底部では、底部先端の内面が極端に肥厚するものが特徴的に見られたが、無文土器の底部においても一部に同様の様相が観察された。また、底部先端が底部先端が擦り減るものが散見された。擦り減りが観察されたものは図中に矢印でその範囲を示した。

器面調整は口縁部、胴部と同様の様相を示し、粗い擦痕をもつもの、撫でられるもの、不明瞭なもの等がある。

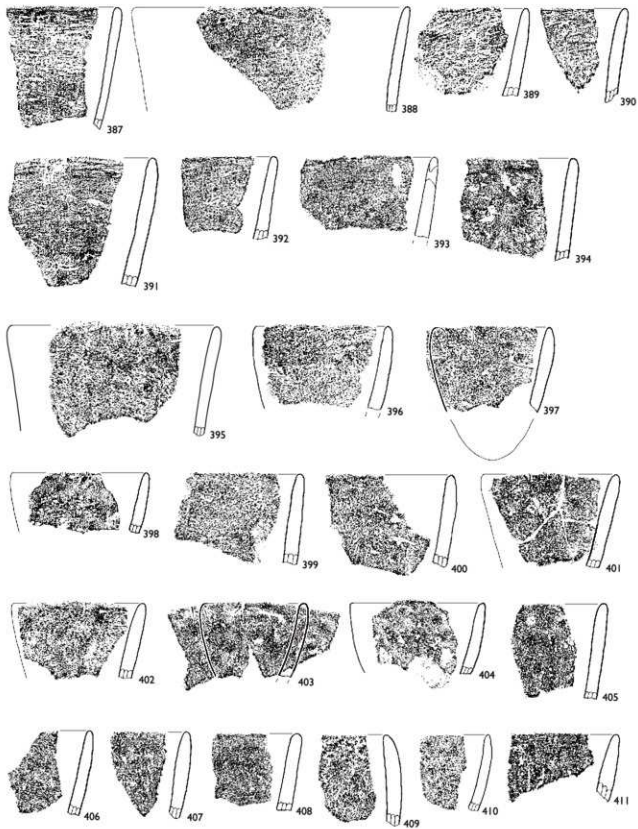
なお482には「南區上大岡十王堂西側」との注記があるが「西側」の文字が確認できるのは林氏資料の中で本資料のみである。

#### (6) 早期後半の土器群(第32図、第8表)

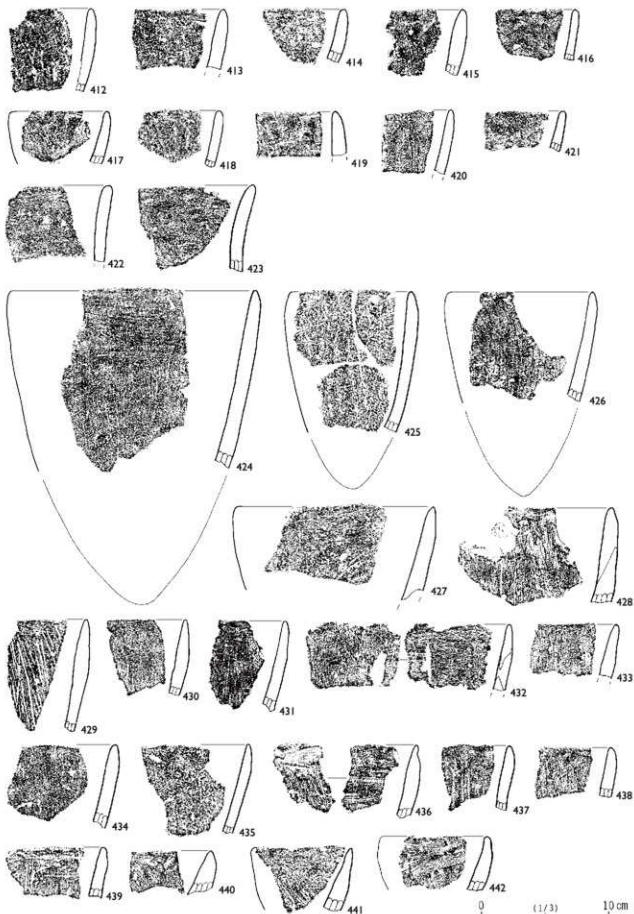
562、568は早期後半の所産と考えられる土器群である。いずれも無文の胴部から底部破片であり、口縁部破片は存在しない。

562、563の器面には全体に斜位の擦痕が顕著に認められる。内面にも粗い擦痕が横位に認められるが、あまり明瞭でない。胎土には砂粒を多く含み、全体にくすんだ赤褐色を呈する。562の底部は尖り気味の丸底となる。564、568の調整痕は不明瞭である。567は底面を欠くが、おそらく平底であろう。568はやや張り出し、突出した底部となる。

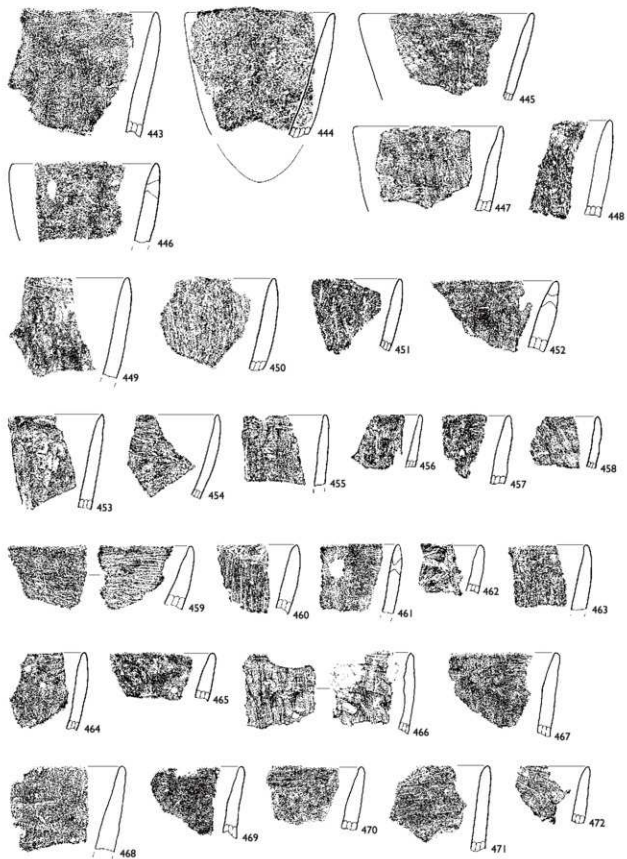
これらの明確な所属時期は不明だが、以上の要素から早期後半に属するものと考えられる。十王堂免遺跡から東へ六〇〇m程の位置には、当該時期を主体とする紅取遺跡が存在している(神奈川県立博物館編一九八〇)。紅取遺跡は、東海地方に由来を持つとされる入海式土器の出土で知られるが、562、563の調整や胎土の特徴は紅取遺跡出土の入海式土器とよく似ており、両者の関係を窺わせる。



第 25 図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (20) (当館蔵)

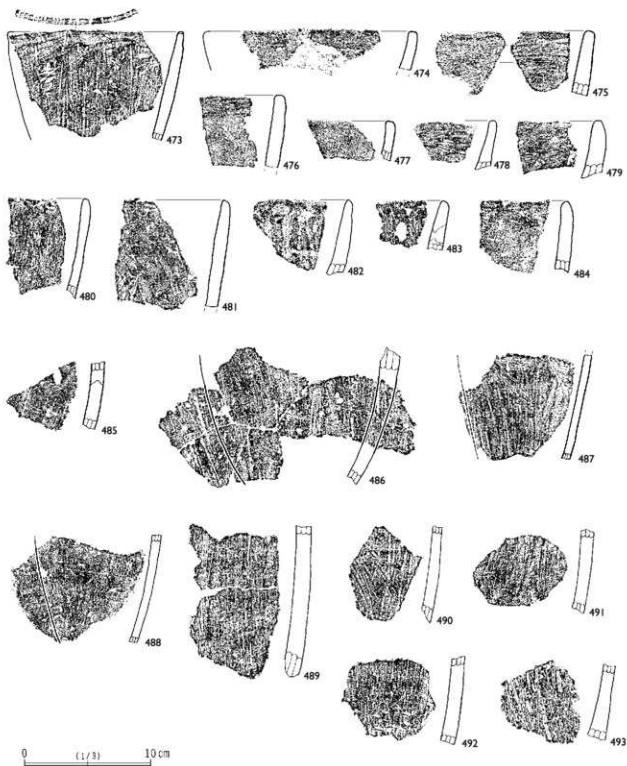


第 26 图 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (21) (当館蔵)



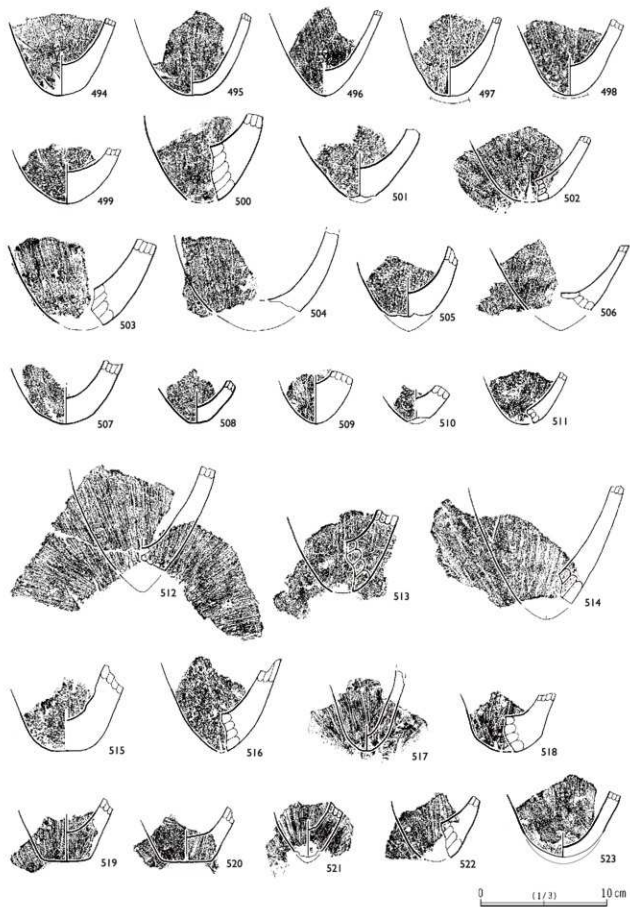
0 (1/3) 10 cm

第 27 图 横浜市十王堂免遣跡採集土器 (22) (当館蔵)

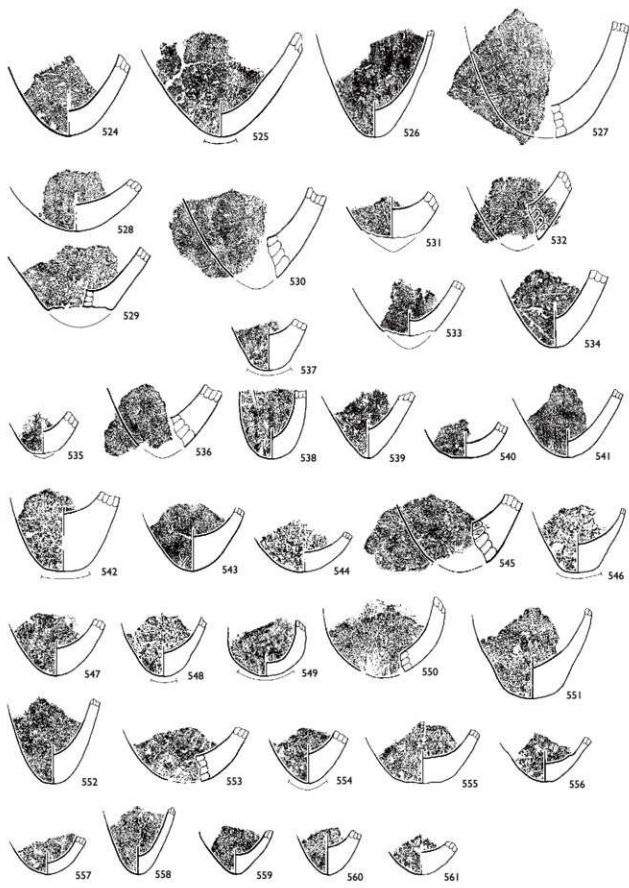


第 28 図 横浜市十王堂免遣跡採集土器 (23) (当館蔵)



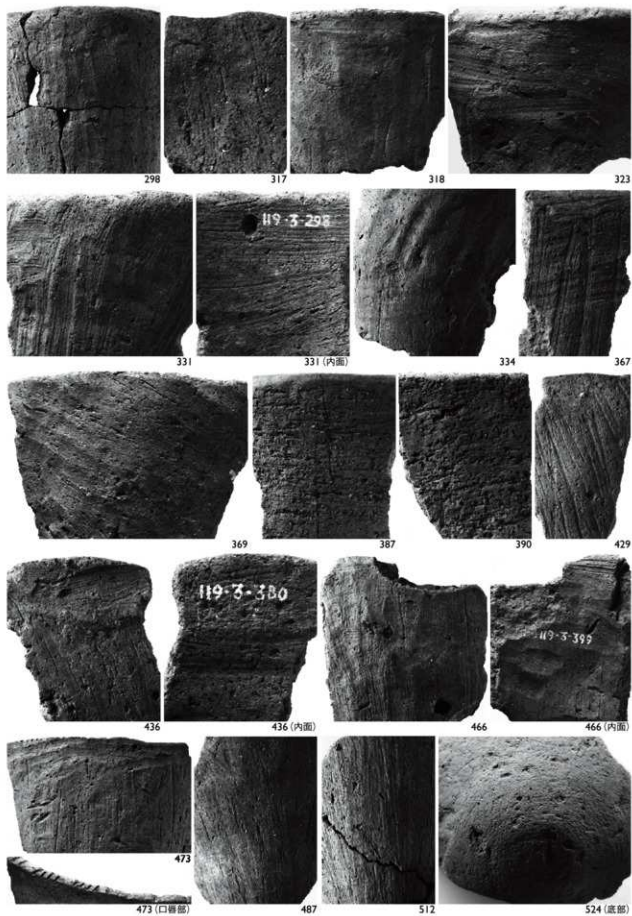


第 29 图 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (24) (当館藏)



0 (1/3) 10 cm

第30图 横浜市十王堂免遣跡採集土器 (25) (当館藏)



第31图 横浜市十王堂免道跡採集土器 (26) (当館蔵)

第7表 横浜市十五堂免遺跡採集土器観察表 (無文土器)

発見地(住居)番号	発見地種別(内訳)	発見時期(内訳)	発見地種別(内訳)	発見時期(内訳)	発見地種別(内訳)	発見時期(内訳)		
206	318 19 穴子塚の遺跡(一)	縄文	37 3269 72	穴子塚の遺跡(一)	縄文	47 3290 35	野原	
208	130 20 穴子塚の遺跡(二)	縄文	38 1407 8	穴子塚の遺跡(二)	縄文	47 3296 15	穴子塚の遺跡(二)	
210	132 42 藤倉島の遺跡(一)	縄文	38 1524 7	穴子塚の遺跡(三)	縄文	47 3307 7	穴子塚の遺跡(三)	
213	122 9 藤倉島の遺跡(二)	縄文	38 1524 32	穴子塚の遺跡(三)	縄文	48 3309 20	藤倉島の遺跡(二)	
32	92 8 穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3274 10	穴子塚の遺跡(四)	縄文	47 3308 32	穴子塚の遺跡(一)	
33	131 10 藤倉島の遺跡(三)	縄文	38 3282 46	穴子塚の遺跡(四)	縄文	48 3301 38	穴子塚の遺跡(一)	
384	1279 79	穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3289 43	穴子塚の遺跡(一)	縄文	48 3272 64	穴子塚の遺跡(一)
397	1244 42	穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3284 78	穴子塚の遺跡(一)	縄文	47 3287 17	穴子塚の遺跡(一)
386	325 72	穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3326 124	野原	48 3407 19	野原	
387	329 17	穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3274 10	穴子塚の遺跡(一)	縄文	48 3322 44	藤倉島の遺跡(一)
388	326 39	藤倉島の遺跡(三)	縄文	38 3285 56	野原		野原	
389	1287 52	穴子塚の遺跡(一)	縄文	38 3232 38	野原		野原	
311	3379 29	藤倉島の遺跡(一)	縄文	39 1479 47	野原		野原	
311	3332 31	穴子塚の遺跡(一)	縄文	40 3362 80	野原		野原	
312	3384 42	穴子塚の遺跡(一)	縄文	40 3333 73	野原		野原	
313	3298 38	藤倉島の遺跡(一)	縄文	402 3579 41	野原		野原	
314	3335 41	穴子塚の遺跡(一)	縄文	403 3337 47	野原		野原	
315	3384 25	藤倉島の遺跡(一)	縄文	404 3247 40	ナギ		ナギ	
314	3295 25	藤倉島の遺跡(一)	縄文	405 3340 47	野原		野原	
317	3291 77	穴子塚の遺跡(一)	縄文	405 3340 47	野原		野原	
318	3252 30	藤倉島の遺跡(一)	縄文	406 3309 46	野原		野原	
319	3287 17	藤倉島の遺跡(一)	縄文	407 3284 29	野原		野原	
320	3324 78	穴子塚の遺跡(一)	縄文	408 3487 48	野原		野原	
321	3280 61	穴子塚の遺跡(一)	縄文	409 3369 46	野原		野原	
322	3268 97	藤倉島の遺跡(一)	縄文	410 3301 22	野原		野原	
323	3334 30	藤倉島の遺跡(一)	縄文	411 3229 40	野原		野原	
324	3383 9	穴子塚の遺跡(一)	縄文	412 3286 27	野原		野原	
325	3277 88	藤倉島の遺跡(一)	縄文	413 3337 36	野原		野原	
326	3340 75	藤倉島の遺跡(一)	ナギ	414 3340 23	野原		野原	
327	3330 45	藤倉島の遺跡(一)	ナギ	415 3366 30	野原		野原	
328	3279 70	穴子塚の遺跡(一)	縄文	416 3347 25	ナギ		ナギ	
329	3348 38	穴子塚の遺跡(一)	縄文	417 3293 43	野原		野原	
330	3284 43	穴子塚の遺跡(一)	縄文	418 3369 22	野原		野原	
331	3286 31	藤倉島の遺跡(一)	縄文	419 3344 28	野原		野原	
332	3298 56	穴子塚の遺跡(一)	縄文	420 3325 22	野原		穴子塚の遺跡(一)	
333	3286 64	穴子塚の遺跡(一)	縄文	423 3360 17	野原		野原	
334	3279 32	穴子塚の遺跡(一)	縄文	424 3384 66	ナギ		ナギ	
335	3271 46	藤倉島の遺跡(一)	ナギ	425 3285 57	ナギ		ナギ	
336	3276 57	穴子塚の遺跡(一)	縄文	424 3228 28	穴子塚の遺跡(一)	縄文	429 3308 34	穴子塚の遺跡(一)
337	3288 39	藤倉島の遺跡(一)	縄文	425 3315 102	穴子塚の遺跡(一)	縄文	424 3315 102	穴子塚の遺跡(一)
338	3286 80	藤倉島の遺跡(一)	縄文	426 3279 64	穴子塚の遺跡(一)	縄文	425 3312 101	穴子塚の遺跡(一)
339	3322 42	藤倉島の遺跡(一)	縄文	427 3325 111	ナギ		ナギ	
340	3330 65	藤倉島の遺跡(一)	縄文	428 3354 98	穴子塚の遺跡(一)	縄文	434 3445 34	穴子塚の遺跡(一)
341	3337 20	藤倉島の遺跡(一)	縄文	429 3286 44	野原		野原	
342	3328 18	藤倉島の遺跡(一)	縄文	430 3346 31	穴子塚の遺跡(一)	縄文	428 3346 31	穴子塚の遺跡(一)
343	3325 27	穴子塚の遺跡(一)	縄文	431 3339 32	藤倉島の遺跡(一)	縄文	428 3339 32	藤倉島の遺跡(一)
344	3324 59	藤倉島の遺跡(一)	縄文	432 3321 18	野原		野原	
345	3464 31	穴子塚の遺跡(一)	ナギ	433 3341 20	穴子塚の遺跡(一)	縄文	439 3399 47	穴子塚の遺跡(一)
346	3275 74	穴子塚の遺跡(一)	縄文	434 3342 46	野原		野原	
347	3342 28	穴子塚の遺跡(一)	縄文	435 3287 42	野原		野原	
348	3486 52	藤倉島の遺跡(一)	縄文	436 3386 26	藤倉島の遺跡(一)	縄文	422 3486 52	藤倉島の遺跡(一)
349	3389 31	穴子塚の遺跡(一)	縄文	437 3217 23	穴子塚の遺跡(一)	縄文	423 3274 18	穴子塚の遺跡(一)
350	3284 53	穴子塚の遺跡(一)	縄文	438 3289 23	穴子塚の遺跡(一)	縄文	428 3289 23	穴子塚の遺跡(一)
351	3325 40	穴子塚の遺跡(一)	縄文	440 3374 29	穴子塚の遺跡(一)	縄文	429 3374 29	穴子塚の遺跡(一)
351	3322 28	穴子塚の遺跡(一)	縄文	441 3328 37	穴子塚の遺跡(一)	縄文	427 3407 147	ナギ
352	3380 17	藤倉島の遺跡(一)	縄文	442 3289 38	野原		野原	
353	327 42	藤倉島の遺跡(一)	縄文	443 3276 62	穴子塚の遺跡(一)	縄文	429 3276 62	穴子塚の遺跡(一)
356	3323 34	穴子塚の遺跡(一)	縄文	444 3324 85	野原		野原	
357	3389 31	ナギ	445 3223 56	穴子塚の遺跡(一)	縄文	426 3415 86	野原	
358	3275 73	藤倉島の遺跡(一)	縄文	446 3254 46	野原		野原	
359	3346 28	藤倉島の遺跡(一)	縄文	447 3320 63	穴子塚の遺跡(一)	縄文	433 3442 33	穴子塚の遺跡(一)
360	3382 31	藤倉島の遺跡(一)	縄文	448 3320 39	穴子塚の遺跡(一)	縄文	434 3429 39	穴子塚の遺跡(一)
362	3382 19	藤倉島の遺跡(一)	縄文	449 3310 43	穴子塚の遺跡(一)	縄文	435 3305 13	ナギ
362	3328 8	藤倉島の遺跡(一)	縄文	450 3288 48	穴子塚の遺跡(一)	縄文	428 3288 48	穴子塚の遺跡(一)
363	3338 42	藤倉島の遺跡(一)	縄文	451 3284 78	野原		野原	
364	3387 31	藤倉島の遺跡(一)	ナギ	452 3326 97	藤倉島の遺跡(一)	縄文	418 3297 99	ナギ
365	3384 18	藤倉島の遺跡(一)	縄文	453 3281 47	ナギ		野原	
366	3386 21	穴子塚の遺跡(一)	縄文	454 3346 26	穴子塚の遺跡(一)	縄文	450 3346 26	穴子塚の遺跡(一)
367	3385 28	藤倉島の遺跡(一)	縄文	455 3352 29	穴子塚の遺跡(一)	縄文	451 3352 29	穴子塚の遺跡(一)
368	3384 28	藤倉島の遺跡(一)	縄文	456 3346 38	野原		野原	
369	3285 40	穴子塚の遺跡(一)	縄文	457 3424 21	穴子塚の遺跡(一)	縄文	443 3403 88	穴子塚の遺跡(一)
370	3286 39	穴子塚の遺跡(一)	縄文	458 3289 17	穴子塚の遺跡(一)	縄文	444 3322 67	ナギ
371	3228 59	穴子塚の遺跡(一)	縄文	459 3346 38	穴子塚の遺跡(一)	縄文	445 3346 38	穴子塚の遺跡(一)
372	3378 22	穴子塚の遺跡(一)	縄文	460 3378 14	野原		野原	
373	3336 41	穴子塚の遺跡(一)	縄文	462 3378 19	野原		野原	
374	3251 42	藤倉島の遺跡(一)	縄文	463 3368 42	藤倉島の遺跡(一)	縄文	449 3362 42	野原
375	3293 31	藤倉島の遺跡(一)	縄文	464 3386 28	野原		野原	
376	3375 26	藤倉島の遺跡(一)	縄文	465 3386 29	ナギ		ナギ	
377	3388 27	藤倉島の遺跡(一)	縄文	466 3396 38	藤倉島の遺跡(一)	縄文	452 3377 61	ナギ
378	3338 38	穴子塚の遺跡(一)	縄文	467 1481 59	藤倉島の遺跡(一)	縄文	453 1483 67	ナギ
379	3382 12	穴子塚の遺跡(一)	縄文	468 3257 77	ナギ		野原	
380	3345 23	穴子塚の遺跡(一)	縄文	469 3484 33	野原		野原	
381	3317 25	野原	470 1482 41	藤倉島の遺跡(一)	縄文	454 1484 41	藤倉島の遺跡(一)	
382	3332 15	野原	471 1486 16	藤倉島の遺跡(一)	縄文	457 1491 28	野原	
383	3386 22	野原	472 3386 27	穴子塚の遺跡(一)	縄文	458 3386 27	野原	
384	3287 18	野原	473 3310 10	藤倉島の遺跡(一)	縄文	459 3346 27	野原	
385	3484 12	野原	474 3359 24	ナギ		500 3388 38	野原	
386	11	野原	474	3359	ナギ	561	38	ナギ

### (7) 所屬時期不明の土器 (第33図)

569、573は所屬時期不明の土器である。胴部から底部の破片で、明確な文様は施されない。569には刺突状の痕跡が認められるが、偶発的所産の可能性もある。569、571、573の底部先端はいずれも乳房状に突出し、569、572では突出部の中央が僅かに凹む。569の底部から3cm程上の位置には緩い段が認められる。器面に明確な調整痕は認められないが、全面が弱く撫でられ平滑である。内面は横方向の粗い擦痕が認められる。内外面ともに細かな繊維状、筋状の圧痕が多数観察される。色調は薄くくすんだ赤褐色を呈し、内面の大部分は黒色化している。

これらの所屬時期について明確には指摘し得ないが、右に指摘した器形、底部形態、器面、胎土等の様相から、草創期隆線文土器の時期の可能性もある。ただ、先端の突出する底部は先の早期後半の土器(568)にも認められる。しかし、568の底部は先端の突出に合わせて内面も凹んでいるのに対し、569、571、573の底部内面にはそのような凹みは認められず、作出が異なる。また器面調整や胎土の様相は大きく異なる。現時点ではいずれとも決し難く、隆線文土器の時期の可能性を指摘しておくに留めておきたい。

### 三 林氏採集土器群について—考察—

#### (1) 器面の調整具痕について

林氏資料のうち、数点の器面に調整具によると思われる痕跡が認められた(第34図)。163、226の内面には水平に調整痕が認められ、その端に調整具痕が観察される。調整具痕の幅は十二〜十五mm程度である。擦痕や粘土の様子を観察すると、調整具痕は調整具の一回一回の動きの終点に残されているようである。226は水平な調整痕の端にそのまま調整具痕が

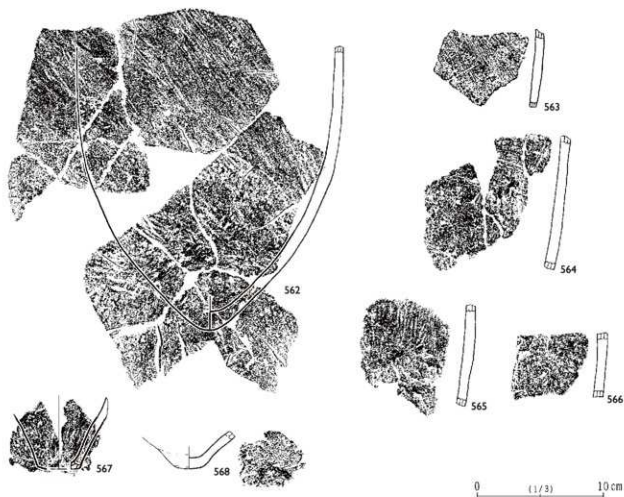
残されているが、163では終点の直前で僅かに上方に曲がっている。これらの痕跡は、内面調整時の腕の動きを反映しているものと考えられ、おそらく土器の内側に右手を入れ、腕を引く動作により調整を行なったことで生じたと推測される。163の調整具の動きの終点直前の湾曲は、その際の腕の動きによるものである。両者とも調整具痕の縦の位置は概ねまとまるが、特に226は揃っており、一回一回の調整のストロークが規則的に行なわれたことを示している。また細かな点では、163の調整具痕はいずれも右上がりになっているのに対し、226ではいずれも左上がりになっている。おそらく調整具の持ち方や手首の角度の違いによるものと考えられるが、163は口縁部付近、226は胴部という部位の違いに起因する可能性もある。

492の外面には縦位の擦痕とともに調整具痕が認められる。調整具痕の幅は六mm程度である。163や226と同様に調整具の動きの終点に残されているようであり、上から下へ調整具が動いたことが分かる。また調整具痕の位置も概ね揃う。

これらのように調整具痕が顕著に残る例はあまり多くないが、土器製作時の腕、身体動作を復元する上で重要な情報となる。

#### (2) 補修孔について

岡本勇氏による大浦山遺跡調査報告で既に指摘されているように、大浦山式土器には縦長の切れ目状に施される補修孔が特徴的に認められる(岡本一九六〇)。これは大浦山式の他に「平板式」や花輪台式にも認められるが(原田一九八七、一九九二)、他地域、他時期の土器には見られず、燃糸文期後半の特徴と言つてよい。また口縁部に楔状の刻みが施されることもあり、これも同様の目的のための処置と考えられている。林



第32図 横浜市十王堂免遺跡採集土器 (27) (当館蔵)

第8表 横浜市十王堂免遺跡採集土器観察表  
(早期後半・時期不明) 山式)

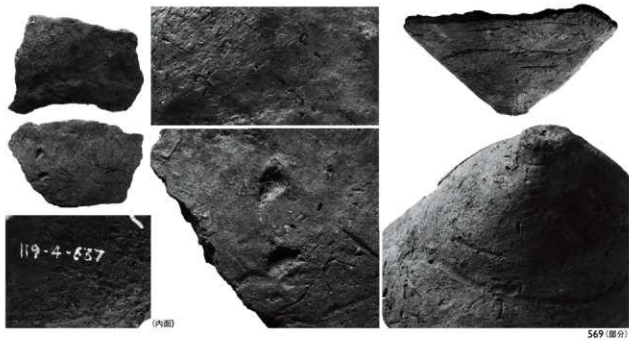
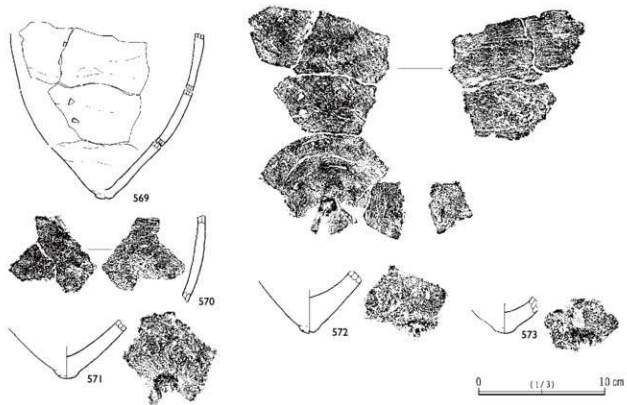
番号	注記番号	重量(g)	器面調整(外面)	器面調整(内面)
562	4-565	635	条痕状の擦痕(斜)	条痕状の擦痕(横)
	4-636			
563	3-402	37	条痕状の擦痕(斜)	ケズリ状の擦痕(横)
564	4-638	63	条痕状の擦痕? (縦)	不明瞭
565	4-638	57	条痕状の擦痕? (縦)	不明瞭
566	4-638	25	条痕状の擦痕? (縦)	不明瞭
567	4-645	20	ケズリ状の擦痕(縦)	ケズリ状の擦痕(縦)
568	4-646	18	不明瞭	不明瞭
569	4-637	126	ナデ	粗い擦痕(横)
570	—	26	ナデ	粗い擦痕(横)
571	4-639	51	ナデ	ナデ?
572	4-640	45	不明瞭	不明瞭
573	4-644	21	不明瞭	不明瞭

氏資料の中にも補修孔や刻みが施された土器が散見されたため、ここでまとめておきたい(第35図)。

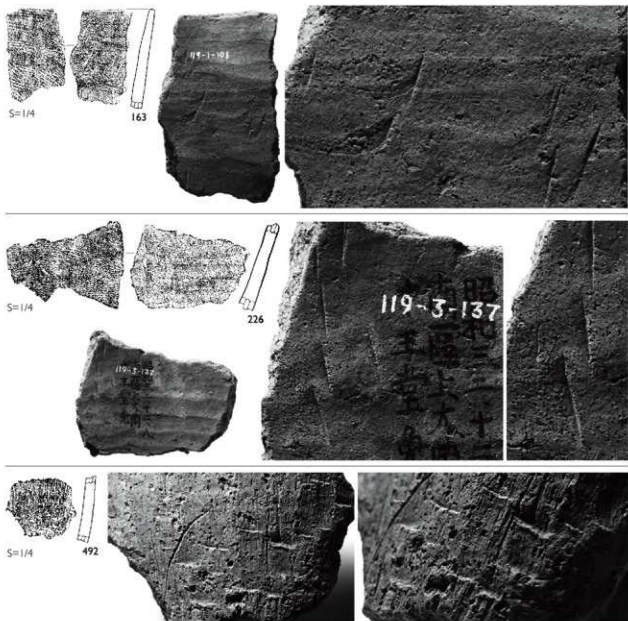
燃索文期前半の夏島式、稲荷台式土器に認められる補修孔は円形である(15、52)。器壁の半分以上の厚さを外面からの穿孔による。孔の径は四〜五mm程度である。

大浦山式土器には縦長の切れ目状の補修孔が多く認められる(87、88、99、104、109など)。夏島式、稲荷台式や他時代の土器に見られる円形の補修孔は穿孔具の回転によって穿孔されているのに対し、縦長で切れ目状の補修孔は、小林達雄氏の指摘のように、道具の往復によって穿孔されていると考えられる(小林一九七七)。ただ、中には孔がほぼ円形で、回転による穿孔と考えられるものもある(100など)。また穿孔痕は縦長となつても孔そのものは概ね円形であることも多い。多くが外側からの穿孔が深く入り「片面穿孔」(原





第 33 图 横浜市十王堂免道跡採集土器 (28) (当館蔵)

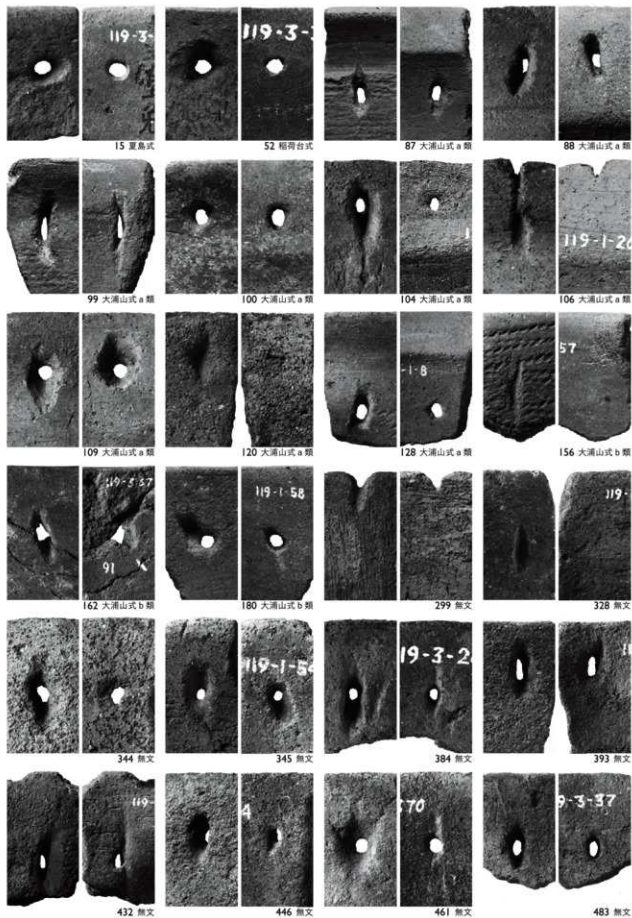


第34図 器面調整具の痕跡がみられる土器

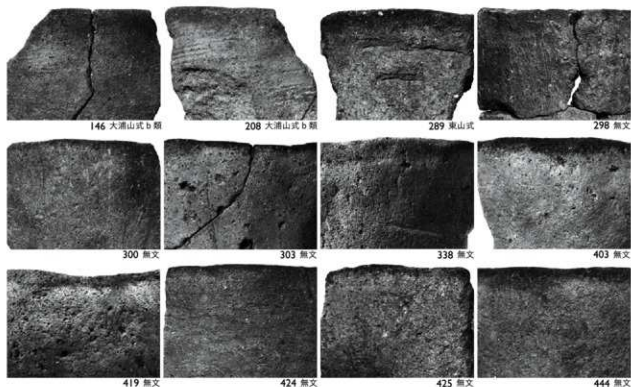
田一九九二)のようになる。口唇部に補修刻みが作出されるものは補修孔が穿たれるものに比べ少ない(106、299)。大浦山式の補修孔には穿孔を途中で取りやめたと考えられるものも散見されるが(106、120、156など)、このようなやり方も他の時期にはあまり見られない。106は中途の補修孔に加え、口唇部に楔状の刻みが作出される。180では、穿孔を一度途中で取りやめた後、位置を僅かにずらして再度を行なったようである。孔は円形である。

これらの特徴は無文土器にも共通する。なお、384、432、461には、内面にも擦り切りの痕跡がある。

(3) 無文土器の口縁部変色について  
 本遺跡出土土器を観察する中で、口縁部が黒色化しているものが一定数存在していることに気付いた(第36図)。いずれも口唇部端から五、一〇mm程度が黒色化しており、無文の土器に多く見られるが、大浦山式b類(146、208など)や東山式(289)の土器片にも少量認められる。断面を観察すると黒色化は内部には及んでおらず、おそらく使用に伴う痕跡と考えられるが、どのよ



第 35 図 土器にみられる補修孔  
左：外面 右：内面



第36図 口縁部が黒色化した土器群

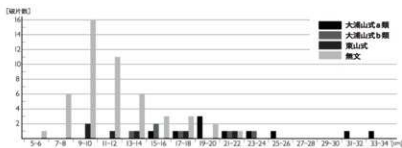
うな要因で生じたのかは现阶段ではよく分からない。例えば土器に蓋をして煮沸することなどが想定されようか。実験的な分析も必要であろう。黒色化部分の下端が明確になるもの(403、303など)、漸位的なもの(146、208、289など)が認められる。

#### (4) 土器の大きさにについて

分類ごとの土器群の大きさの傾向を把握するため、口径が復元可能な破片の口径を計測し比較した(第37図下段)。各土器群の口径分布は大浦山式a類が十五〜三十四cm、大浦山式b類が十三〜二十四cm、東山式が九〜二十二cm、無文土器は五〜二十二cmで、九〜一〇cmにピークが認められる。これらのことから大浦山式に比べ無文土器は明らかに小形となる傾向が指摘できる。東山式は母数が少ないが無文土器に近い傾向を示すようである。なお、夏島式、稲荷台式土器には口径が復元可能な個体は存在しなかった。

また、破片全体における口径復元可能な破片数の比率を算出したところ、大浦山式と無文土器、東山式との間には明確な差が認められた(第37図上段)。土器が割れ、生じる破片の大きさ

	無文	東山式	大浦山式b類	大浦山式a類	無文前期半
口縁部破片数(A)	176	21	77	59	51
口径復元可能破片数(B)	49	6	6	10	0
口径復元可能比率(B/A)	27.8%	28.6%	7.8%	16.9%	0%



第37図 十王堂免遺跡採集土器片から復元した口径サイズ

は元の土器の大きさに関わらず一定であると仮定した場合、理論上、元の土器が大きいほど一つの破片から口径を復元できる可能性は低くなり、元の土器が小さければ、一つの破片からでも口径が復元できる可能性は高くなる。算出した比率をそうした視点でみてみると、大浦山式は数値が低く、それに比べ無文土器および東山式は数値が高くなる。つまり大浦山式は東山式や無文土器と比較し、元の個体のサイズが大きい可能性が高く、先の口径サイズの傾向を追認する結果となった。

この傾向の違いの要因を即断することは出来ないが、一つの可能性として用途の違いが反映されていると考えることは許されよう。あるいは先に指摘した口縁部黒色化の現象が無文土器に多く認められることと関連するかも知れない。

無文土器の編年の位置づけは未だ共通の見解に至っていないが、大きさの違いが同時期における用途の違いを示していると想定するならば、無文土器の一部（特にサイズの小さいもの）は大浦山式と同時期に存在した可能性が高いことになる。今後、無文土器の編年を検討する際には、このような視点も有用となるかも知れない。

### (5) 林氏資料の数量

林氏資料の破片数、重量の内訳を第38図に示した。大浦山式および無文土器が多数を占め、燃糸文期前半（夏島式、桶荷台式、東山式）が少なく、一つの破片の重さ（大きさ、厚さ）がa類の方が重いという傾向を示している。周辺の燃糸文期後半の遺跡においては、押型文土器が出土する例も散見されるが（岡本一九五七・一九五九、守屋一九九五など）、林氏資料には確認できなかった。

実際に存在した土

器の個体数を破片資料から復元することは容易ではないが、

底部の破片数は最小個体数として有効である。林氏資料には

大浦山式二十五点、無文土器六十七点の

底部破片が含まれている。本稿で無文土

器とした一群が、燃糸文期の複数時期の

土器を含んでいるという前提は踏まえな

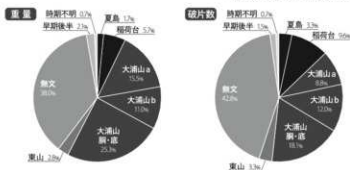
ければならないが、

それであっても一遺跡からの出土としては、これまでに知られている当該遺跡の中でも極めて多い部類に入ると言えよう。

おわりに

十王堂免遺跡は、これまでもその名前こそ知られてはいたが、内容が公表される機会はほとんどなかった。本稿で中期以外のほぼ全ての土器片を紹介したが、土器の量だけからしても、本遺跡が当該期の遺跡として大規模なものであったことが推察され、おそらく、燃糸文期後半にあつては、複数の住居址からなる集落跡であつたと想像される。なお、本

重量	夏島	桶荷台	大浦山a	大浦山b	大浦山 胴・底	東山	無文	早期後半	時期不明	
合計	42,559g (485%)	706	2,429	6,589	4,676	10,781 (384%)	1,209	16,168 (96%)	896 (4%)	295 (2%)
単位はg。〔 〕は非陶器製土器の重量(内訳)。										
破片数	夏島	桶荷台	大浦山a	大浦山b	大浦山 胴・底	東山	無文	早期後半	時期不明	
合計	669片 (86片)	22	64	59	80	121 (64)	22	286 (18)	10 (2)	5 (1)
単位は片。〔 〕は非陶器製土器の破片数(内訳)。										



第38図 十王堂免遺跡採集土器群の重量・破片数の内訳

稿ではあまり触れられなかったが、今回報告した土器には、表面に貝塚から出土する土器にみられるような白色付着物のあるものが散見された。これは土器を包含していた土層付近に貝塚のあったことを示している可能性がある。ただ、林氏や芹沢氏の記述にはそのような内容は見られなかった。今後、理化学的な分析等を行うことで、より遺跡の状況を復元できる可能性もあろう。

また、遺跡の評価を行うためには土器以外の資料についても分析も行う必要がある。林氏の十王堂免遺跡採集資料には、スタンブ形石器や「螺岸」（原田一九八八）といった燃系文期に特有の石器群が大量に含まれている。これらの整理も今後行なっていく予定である。

さらに、当館には、十王堂免遺跡周辺の林氏の採集資料も多く収蔵されており、その中には燃系文期をはじめとする、本遺跡と近い時期のものも少なからず含まれている。それらの整理、分析を進めることで、本遺跡を含めた当該地域のより具体的な姿を描くことが可能となつてくよう。今後はこれらの公表も順次進めていきたいと考えている。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、石井寛氏、原田昌幸氏、建石徹氏、安藤広道氏、藤山龍造氏、小林謙一氏、戸田哲也氏、峰村篤氏、川口徳治朗氏、武田周一郎氏、大網信良氏、長佐古真也氏の各氏にご教示、ご助言をいただきました。

また図版の作成にあたっては高山理美氏、橋本遼太氏、小澤政彦氏のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 註

(1) 当館の所蔵する林氏旧蔵資料のうち、横浜市中心名貝塚採集土器については既に報告を行なっている（千葉一〇一五）。またその一部を対象とした胎土分析、赤色顔料分析および同貝塚で林氏が採集した骨角器については本誌で報告を行なっている（建石・降橋・千原論文および高橋・千原論文参照）。

(2) 林氏の手書き文章は、句読点が全て句点で表現されている。引用に際しては、文脈から適宜句点を読点に改めた。

(3) 横浜市磯子区ウェブサイトに「磯子区歴史年表 昭和二十一年～昭和四十五年」による。（<http://www.city.yokohama.lg.jp/isago/isago/ueyos/vwmap02.html>）  
一九六七年七月二〇日閲覧。

(4) 本稿では林氏の言う「十王堂免」採集資料を対象とした。「平白」「森町赤穂原」等の注記をもつ資料は今後整理を行なう予定である。

(5) 藤山龍造氏のご教示による。

(6) 接合した破片が複数存在するため、この破片数と図版番号は一致しない。

(7) 岡本勇氏は大浦山遺跡での報文で、大浦山式土器のうちの燃系文が施される一群

（第一型式）について「器面は表裏ともによく磨かれており、とくに表面では

多くのものにつやが感じられる」としている（傍点は原典ママ、岡本一九六〇）。

(8) ただ、林氏資料の中には後期に属する土器は確認されていない。

(9) 紅取遺跡の入海式土器も林氏の採集資料であり、当館に収蔵されている（鎌倉川

県立博物館編一九七〇 図版3-4）。

(10) この傾向は型式の特性によるものではなく、廃棄や埋没といった遺跡における二次的な要因によるものであろう。

## 引用文献

- 石井 寛 一九九一「横浜市内の燃系文終末期資料とその評価」『調査研究集録』第二八冊 横浜市埋蔵文化財センター  
岡本 勇 一九五七「相模平坂貝塚」『駿台史学』三 駿台史学会  
岡本 勇 一九五九「三浦郡栗山町馬の背山遺跡」『横浜貿易博物館研究報告（人文科学）』第三号 横浜貿易博物館



岡本 勇 一九六〇「三浦市大浦山遺跡」〔横須賀市博物館研究報告（人文科学）〕第一四号 横須賀市博物館

神奈川県史編纂室編 一九七九「神奈川県史 資料編」〇 考古資料

神奈川県立博物館編 一九七〇「神奈川県考古資料集成」 縄文式土器」神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 一九八〇「紅取遺跡」神奈川県立博物館発掘調査報告書第十二号 神奈川県立博物館

小林達雄 一九七七「縄文土器の世界」日本原始美術大系 一 縄文土器 講談社

藤原 正 一九七七「全境遺跡発掘調査概観」富里村史編纂委員会

杉原莊介・芹沢長介 一九五七「神奈川県夏島における縄文文化初頭の目録」明治大学文学部研究報告考古学第二册 明治大学

芹沢長介 一九五七「神奈川県大丸遺跡の研究」『駿台史学』七号

芹沢長介 一九六二「神奈川県横浜市赤穂原遺跡」『日本考古学年報』十一 日本考古学協会

千葉 毅 一〇一五「神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料」林國治氏、小林小二郎氏同慶の横浜市地名寺貝塚採集資料」『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第四十二号 神奈川県立歴史博物館

戸田哲也 一九八八「縄文土器」の型式学的研究と編年（中編）『神奈川考古』第二十二号 神奈川考古同人会

戸田哲也 一九九五「縄文系土器終末期の一樣相」片瀬山 a・b 類土器を中心として」『縄文時代』第六号 縄文時代文化研究会

中西克也・中野修秀 一九八五「東金市菅谷古墳群及び南外輪戸遺跡 滝・木浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書」菅谷古墳及び南外輪戸遺跡調査会

中村信博 二〇〇二「天矢場」茂木町教育委員会

林 國治 一九六七「西日本旅行メモ あしあとの記」シマ文庫

林 國治 一九七七「昭和五十二年記 横浜の遺跡名表と石鐘採集数控え」（私家本）横浜開港資料館所蔵 請求番号：林資料十一

林 國治 一九七九「昭和五十四年記 私の考古学付記」（私家本）横浜開港資料館所蔵 請求番号：林資料十八

原田昌幸 一九八六「縄文系土器終末期の諸問題 無文土器」『東山式』の設定」『物質文化』四六号

原田昌幸 一九八七「縄文系土器終末期の諸問題（Ⅱ）『平坂式』の再検討」『物質文化』四十八号

原田昌幸 一九八八「木工具としての縄文期の八種斧Vについて」『竹匯』第五号 北総たけべらの会

原田昌幸 一九八九「縄文系土器終末期の諸問題（Ⅲ）Ⅰ「大浦山式土器」の検討」『物質文化』五十二 物質文化研究会

原田昌幸 一九九一「縄文系土器様式」ニューサイエンス社

原田昌幸 二〇〇八「縄文系土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

宮崎朝雄 一九八一「縄文系土器群の終末と無文土器群」『土曜考古』第三号 土曜考古学研究会

宮崎朝雄 一九九四「片瀬山遺跡（宮崎北）発掘調査報告書」神奈川県企業庁水道局施設課

守屋慶人 一九九五「平坂貝塚出土土器の再検討」『局地的出土状況の再確認を中心として』『明治大学考古学博物館 館報』No.〇 明治大学考古学博物館

野内秀明 一九八四「三浦半島における無文土器群の概観」『横須賀市人文博物館研究報告』二八

横浜市埋蔵文化財センター編 一九九〇「港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告Ⅱ 山田大塚遺跡」横浜市埋蔵文化財センター

【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の

縄文時代前期貝塚出土動物遺体

— 横浜市上台遺跡住居址内貝塚ブロックサンプルの分析 —

吉 永 亜紀子  
千 葉 毅  
(横浜市立歴史博物館)

【キーワード】

上台遺跡 住居址内貝塚 動物遺体 貝製品 縄文時代前期

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市上台遺跡住居址内貝塚のブロックサンプルの分析報告を行なった。このサンプルは一九七六年に神奈川県立博物館が発掘調査したものである。

出土動物遺体の定量的内容を明らかとし、当該地域の出土動物遺体データの追加を図るとともに、本遺跡の生業活動における貝類資源利用のあり方を検討した。

出土貝類種は計十三種、古鶴見湾湾口部という立地を反映した組成であった。ハマグリが八四%を占め、採貝活動領域は本遺跡周辺にあつたと考えられる。主体的に採集されたハマグリは食料だけでなく貝製品の材料として利用されていたことが明らかとなった。貝刃において打ち欠き特徴とする資料群、磨耗貝器がまとまって出土した点はほとんど類例がなく注目に値する。

はじめに

神奈川県立歴史博物館の前身である神奈川県立博物館（以下、両者とも当館とする）では、一九六七年の開館から二〇年間ほど、地域研究の一環として県内各地での発掘調査を実施してきた。これまでに行なわれた発掘調査は八遺跡で十九回にわたり、調査結果は『神奈川県立博物館発掘調査報告』（第一号―第十九号）にまとめられている。

これらの調査は、大規模な発掘調査がそれほど多くなかった時期に行なわれたこともあり、その成果は当時の学界に少なからず影響を与えてきた。ただ、報告された資料は調査で得られた全資料のうち、ごく一部に留まっているものも多く、さらに未報告資料の中には今日的な視点で重要な情報を含んでいるものも少なくない。現在、当館ではこのような状況に鑑み、これまでに当館が実施した発掘調査資料の再整理を行なっているところである。

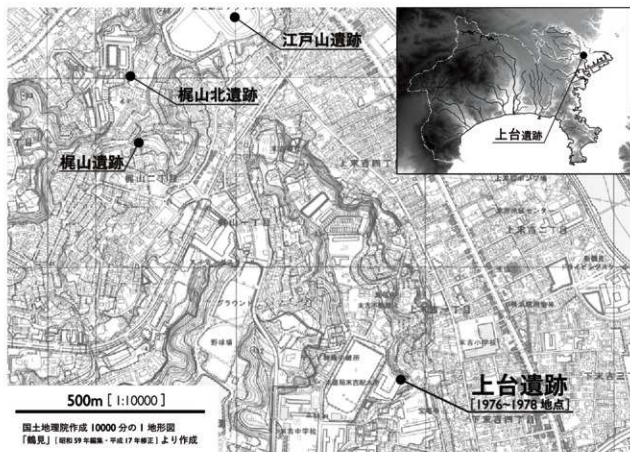
本稿では、一九七六年に実施された横浜市上台遺跡<sup>（横浜市）</sup>の発掘調査の際に採取された貝層ブロックサンプルの分析を行なったので以下に報告する。  
（千葉）

一 横浜市上台遺跡および分析対象資料について

（一）上台遺跡および神奈川県立博物館による発掘調査の概要

上台遺跡は、横浜市鶴見区上末吉に所在する縄文時代早期・前期、弥生時代後期・古墳時代前期を主体とする遺跡である。下末吉台地先端の標高四十二m程度の台地上に位置し、鶴見川からは現状で四〇〇～五〇〇m程の距離にある（第1図）。

遺跡は台地上に広く展開すると考えられており、これまでに当館が実



第 1 図 上台遺跡の位置および調査区配置図

施した発掘調査をはじめとしていくらかの調査が実施されている（神奈川県立博物館編一九七七・一九七九、上台遺跡調査団編一九九九、玉川文化財研究所編二〇〇七）。当館の実施した調査は三次にわたっており（第一次が一九七六年、第二次が一九七七年、第三次が一九七八年）、調査目的は、第一次が縄文時代前期黒浜式期の貝層を伴う住居址の調査、第二次・三次はそれに加え、第一次調査の際に出土した夏局式土器に関する知見を得るためのものであった。設定された調査区は第一次調査のものが1区、第二・三次調査で設定された区画が2区とされた。

本稿では、当館が実施した第一次調査の際に採取された貝層ブロックサンプルを対象とし分析を行なう。

（千葉）

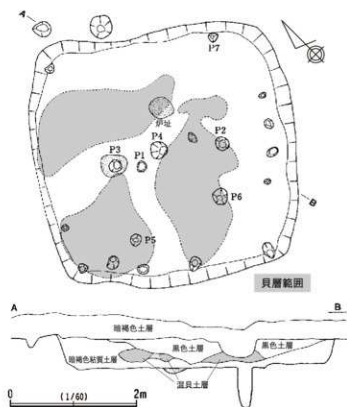
## （2）住居址について

一九七六年の調査では、縄文時代前期黒浜式期の竪穴住居址が一基検出された（1号住居址、第2図）。住居址は三・九m×四・一mの不整形を呈する小型の竪穴住居址である。炉址は住居中央のやや北東にあり、灰と焼土の厚さは中央で一〇cmである。P2およびP3付近にも部分的に焼土が認められているが、それらは灰まじりの焼土が二次的に散乱したものであり、覆土は下から暗褐色粘質土層、混土貝層、黒色土層に区分されており、混土貝層は平面的に大きく三つの範囲に分かれる。三つの範囲とも住居址の西側に偏っていることから、「貝殻の投棄が西側から行われたことを示す」（神奈川県立博物館編一九七九）とされた。遺物は混土貝層および黒色土層から多く出土した。

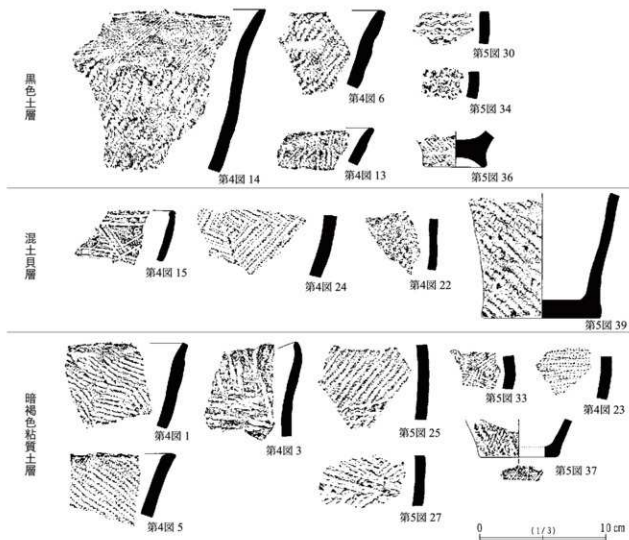
（千葉）

## （3）貝層ブロックサンプルについて

本稿では前述の住居址から採取された貝層ブロックサンプルを分析対



第2図 上台遺跡1号住居址と住居址内貝層  
（神奈川県立博物館編1979を改変）



第3図 上台遺跡1号住居址出土土器  
(神奈川県立博物館編1979を改変、番号は引用元のものを示した)



第4図 黒浜式期の想定海岸線と上台遺跡  
(神奈川県立生命の星・地球博物館編2004を改変)

象とする。ただ、このサンプルの採取位置は調査時の記録に残されておらず不明である。

出土した土器は、下層の暗褐色粘質土層から上層の黒色土層まで、黒浜2式土器を主体とし、他型式は混在しない(第3図)。このことから、覆土および貝層の形成された時期についても、黒浜式期の短期間に形成されたと考えられる。

なお、黒浜式期の暦年較正年代は六四〇〇～五九〇〇cal BPと考えられており(工藤二〇一二)、温暖な気候(PG Warm-2の末期)に伴ういわゆる縄文海進の最盛期にあたる。復元された六〇〇年前の海岸線を参照すると(神奈川県立生命の星・地球博物館編二〇〇四)、上台遺跡は東京湾を眼前に臨むとともに、古鶴見湾湾口部の台地先端に位置していたことが分かる(千葉)

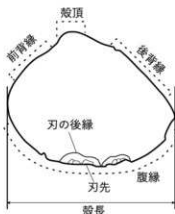
## 二 出土貝類遺体の内容

### (1) 分析資料と方法

本稿で分析対象とするのは、第一次調査において採集された住居址内貝層ブロックサンプル、整理用コンテナにして約五箱分の貝類遺体である。既報には、調査時に獣骨・魚骨の出土にも注意が払われたが出土していないとの記述がある(神奈川県立博物館編一九七九)。本分析においても精査したが貝類以外の動物遺体は確認出来なかった。

出土貝類遺体は同定後、腹足綱は殻軸部が遺存する個体を一個体として計数、最小個体数(MNI)とした。一枚貝綱は殻頂部が遺存する個体を一個体として計数、左右で多い方を最少個体数とした。出土点数の少ない二枚貝は貝合わせも行い、最小個体数を算出した。破片資料もすべて同定し、同定資料数(MSP)として計数した。

出土貝類遺体のサイズを把握するため、デジタルノギス(Mitutoyo, CD-P20M) を使用し腹足綱は殻径・殻高、二枚貝綱は殻長・殻高を○、○1mmまで計測した。計測箇所と本稿で使用する部位名称は第5図の通りである。貝製品は破片資料も含め肉眼観察により選別し、デ



第5図ハマグリ部位名称と計測箇所  
(川口1989に加筆)

ジタルマイクロスコープ(3R-WM401PC24GHワイヤレス顕微鏡・倍率六〇倍)による観察のうえ分類・分析を行った。これらの分析により得られた出土貝類遺体の内容を以下に報告する。(吉水)

### (2) 出土貝類種と組成

既報に記載されている出土貝類種は腹足綱二種、二枚貝綱九種の合計十一種である。本分析では、腹足綱二種、二枚貝綱一種が新たに同定され、出土貝類種は腹足綱四種、二枚貝綱九種、計十三種を数える(第1・2表・第8・9図)。その生息域は、外海岩礁底から内湾湾口砂礫底・干潟砂泥底にわたり、古鶴見湾湾口部という本遺跡の立地を反映しているといえよう。出土点数は一二九七点(MNI)、破片資料も含めると三三〇四点(MSP)である。ハマグリが八割以上と主体を占め(第6図)、「ハマグリが九〇%強を占める」という既報の調査所見とも相違ない。

#### アワビ属

殻頂付近から殻長の中間辺りまでの内唇部が出土した。内唇部のサイズからみて殻長一三〇mmを超える個体に由来するものである。このような大型のアワビが本遺跡周辺で採集可能であったか、外部より持ち込まれたものであるかは検討の余地がある。

#### ツメタガイ

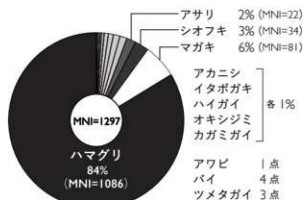
三点出土している。風化・欠損により殻高の計測は出来なかったが、いずれも殻径四五mm前後の個体であった。

#### アカニシ

軸唇部のみが四点、殻高約九五mmの個体が一点、破損箇所があるため正確な計測は出来ないが殻高一〇〇mmを超える個体が二点出土している。体層部には被熱や破損が確認される個体もあり、利用に関わる痕跡である可能性も示唆される。また、体層部上部から中間部が遺存している個体の形質に注目すると、結節がツノ状に尖るツノアカニシと呼ばれるタイプであることが指摘される(第7図)。サザエなどでは生息環境によって形質が変化することが知られているが(富岡一九九九)、アカ

第1表 上台遺跡1号住居址出土貝類種名表

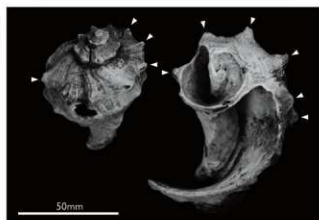
巻貝綱	Gastropoda
アワビ属	<i>Haliotis</i> sp.
ツメタガイ	<i>Glossaulax didyma</i>
アカニシ	<i>Rapana venosa</i>
バイ	<i>Babylonia japonica</i>
二枚貝綱	Bivalvia
ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i>
サルボウ	<i>Scapharca kagoshimensis</i>
マガキ	<i>Crassostrea gigas</i>
イタボガキ	<i>Ostrea denselamellosa</i>
ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>
カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>
アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
シオフキ	<i>Macra veneriformis</i>



第6図 上台遺跡1号住居址出土貝類組成

第2表 上台遺跡1号住居址出土貝類一覧表

種名	L	R	破片	MNI	NISP
アワビ				1	1
ツメタガイ				3	3
アカニシ				7	7
バイ				4	4
ハイガイ	12	7		12	19
サルボウ	1	3		4	4
マガキ	81	42	110	81	233
イタボガキ	5	10		10	15
ハマグリ	955	1086	704	1086	2745
オキシジミ	9	9		16	18
カガミガイ	6	13		17	19
アサリ	22	17	16	22	55
シオフキ	34	32	15	34	81
計				1297	3204



第7図 結節(矢印部分)が尖るアカニシ

ニシでは形質に影響を与える要因や時期的変化は不明である(黒住耐二氏の「」教示による)。東京湾の洪積層出土アカニシから現生アカニシまでを対象とし、結節の形質によって十種類に分類、比較を行った水沢は(一九六〇)、貝塚産および沖積層出土アカニシには結節がツノ状を呈するタイプが多く、棲息深度や塩分濃度との関係性も示唆している。遺跡出土のアカニシの形質については、地域的・時期的な特徴があるのか等、今後注意を払いたい。

バイ

風化・欠損により計測は出来なかったが、殻高六〇mm前後の個体が四点点出している。

ハイガイ・サルボウ・オキシジミ・カガミガイ・アサリ・シオフキ

内湾湾奥部干潟群集であるハイガイが少なく、内湾湾中部砂泥底に生息域をもつ二枚貝が主体を占め、湾口部砂礫底群集であるイタボガキが出土している組成は、古鶴見湾湾口部に形成された本遺跡の立地を反映したものであるといえる。計測、貝合わせの詳細を第3表に示した。

ハマグリ

一〇八六点(MNI)が出土し本遺跡において主体を占める。既報では出土貝類種にチョウセンハマグリの記事があったため、同定に際し精査したが、すべてハマグリと同定されチョウセンハマグリは確認出来なかった(同定に際し黒住耐二氏にご指導賜った)。チョウセンハマグリが生息域は湾外沿岸砂底であり(富岡一九九九)、現在関東でよく知られている産地は茨城県鹿



第3表 上台遺跡1号住居址出土貝類観察表

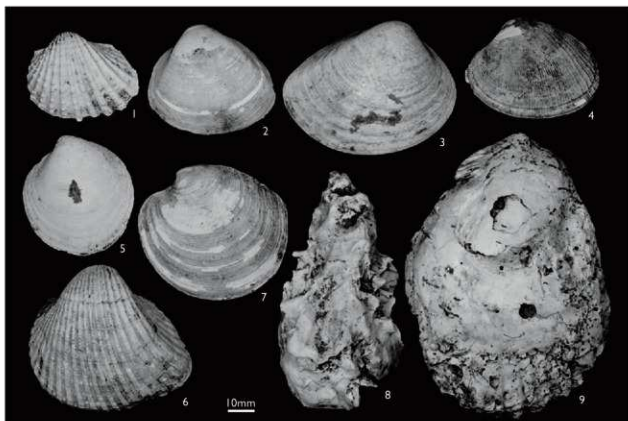
ハイガイ					サルボウ					シオブキ				
左右	殻長	殻高	備考		左右	殻長	殻高	備考		左右	殻長	殻高	備考	
L	37.54	33.28			L	59.44	53.28			L	-	40.57		
L	26.22	21.82			R	51.69	43.64			L	41.68	-		
L	23.08	18.55			R	-	38.63			L	45.64	39.39		
L	33.97	28.38			R	44.08	36.39			L	43.62	-		
L	-	28.21								L	46.86	39.83		
L	33.63	28.97								L	41.89	-		
L	40.76	32.48								L	-	39.42		
L	24.51	20.47								L	45.63	40.48		
L	34.14	26.63								L	-	35.67		
L	27.14	23.03								L	45.85	41.77		
R	23.28	20.28								L	42.13	37.71		
R	25.28	22.05								L	-	39.25		
R	-	26.00								L	42.59	36.88		
R	-	23.26								L	39.89	-		
R	-	24.13								L	-	34.74		
R	29.21	24.44								L	44.50	-		
L	36.54	29.87		合員①						L	38.74	35.37		
R	-	29.63		合員①						L	-	36.93		
										L	36.86	34.52		
										L	-	35.62		
										R	51.46	43.40		
										R	42.05	37.79		
										R	-	39.98		
										R	42.43	36.05		
										R	42.71	38.47		
										R	44.61	39.01		
										R	42.34	37.87		
										R	44.28	-		
										R	44.99	40.96		
										R	42.58	36.77		
										R	34.26	-		
										R	33.50	-		
										R	41.46	37.59		
										R	43.88	36.10		
										R	40.71	-		
										R	39.78	36.88		
										R	41.64	38.02		
										R	44.36	-		
										R	40.39	35.18		
										R	44.19	37.09		
										R	37.80	34.87		
										R	-	38.67		
										R	42.08	-		
										R	-	40.09		
										L	44.03	-	合員①	
										R	45.24	-	合員①	
										L	43.21	36.86	合員②	
										R	43.64	36.59	合員②	
										L	41.49	36.38	合員③	
										R	41.19	36.15	合員③	

\*「-」は破損欠損により計測不可であることを示す。計測値の単位は mm である。



第8図 上台遺跡1号住居址出土貝類遺体(腹足綱)

1 アワビ類 2 ハイ 3 ツメタガイ 4 アカニシ



第9図 上台遺跡1号住居址出土貝類遺体(二枚貝綱)

1 ハイガイ 2 シオフキ 3 ハマダリ 4 アサリ 5 オキシジミ 6 サルボウ  
7 カガミガイ 8 マガキ 9 イタボガキ

島灘や千葉県九十九里浜である。東京湾内湾の西岸域に位置し、さらに入り江を呈していた古鶴見湾に立地する本遺跡周辺においては、チョウセンハマグリが生息し採集可能な環境ではなかったと推察される。本遺跡より出土しているとするれば、チョウセンハマグリが生息域である地域より持ち込まれた可能性や、本遺跡周辺にとどまらない広域な採貝領域を考慮する必要がある。しかし、本分析ではチョウセンハマグリは確認できず全てハマグリと同定されたこと、その他に出土している貝類遺体組成から、採貝領域は本遺跡周辺にあり、そこで採集可能であったハマグリを主体的に採集、利用していた貝類資源利用の在り方が想定されよう。

出土したハマグリは殻長分布を第10図に示した。殻長分布の最小値は三二・七二mm、最大値は七四・二四mm、平均値は五二・三〇mmであった。殻長五〇〜六〇mm前後の個体が多く出土しており、殻長四〇mmより小型の個体は非常に少なく、また殻長三〇mm以下の個体は見られなかった。「中型以下の個体に限られ、二×三cm大の個体さえ混じっている」という既報の調査所見とは若干異なるようである。殻長五〇〜六〇mm台のハマグリが豊富に採集可能であった本遺跡では、採貝活動により得られたハマグリを食料として利用するほか、貝刃などの道具の材料としても積極的に利用していた。貝製品については次項で詳述する。

時間的制約もあり、すべてのハマグリについて徹底した貝合わせ作業を行うことができなかったが、貝合わせを行った結果十三組が合貝となつた。また、特異な成長障害をもつ個体が一点出土している(第11図)。

(十古水)

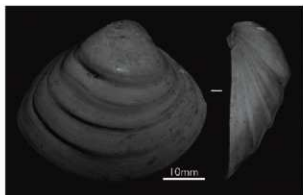
### (3) 貝製品

出土貝類遺体には、人為的な加工痕・使用痕が認められる貝製品が含まれていた。出土貝類遺体組成において主体を占めるハマグリを材料とした資料が多く、剥離・打ち欠きにより加工が加えられ使用された貝刃と、著しい磨耗痕が特徴的に観察される磨耗貝器に大別される。出土ハマグリ全体における貝製品の割合は一割であった(第12図)。以下、貝製品毎に詳述する。

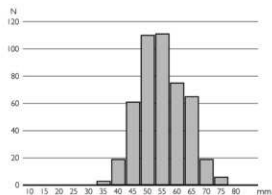
#### 貝刃

ハマグリ製一四四点、カガミガイ製一点の計一四五点が出土した。貝刃は縄文時代を通じ、東京湾岸域をはじめ各地より出土する貝製品としてよく知られる。加工痕・使用痕の認められない出土貝類遺体との区別としては、研究者の共通認識として次のような定義が挙げられるであろう。

「二枚貝の腹縁を加工して刃器として使用した貝製品の種類、二枚



第11図 特異な成長障害をもつハマグリ



第10図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ殻長分布(加工、使用痕の無い左殻、右殻の計469点)

貝の腹縁を打ち欠き刃を付けた打製刃器、二枚貝縁辺部に押圧による刃部調整を有する骨角器」(神沢・川口一九七二、川口一九八九、宮川二〇〇六)。

このような定義に則るならば、貝刃には様々な加工方法・使用方法と形態が想定され得る。東京湾岸域の縄文時代貝塚出土資料を分析した神沢・川口(一九七二)は、刃の位置と幅により四群八類、加工方法により六型に分類し、貝刃に多様な形態があることを提示した。しかしながら、その後遺跡の報告書において貝刃として報告され研究対象となってきたのは、腹縁部に連弧状の剥離を加え波状の刃部を呈する貝製品が大半である。

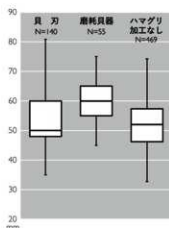
本遺跡出土ハマグリには、一般的に貝刃として認識され報告事例の多い腹縁部に波状の刃部を有する形態の貝刃以外にも様々な形態の貝刃が含まれており、それぞれ刃部や刃の後縁に、加工や使用に伴い生じたであろう刃こぼれ、微小な剥離、磨滅、擦痕、線状痕が観察された。出土貝類遺体は採貝活動から調理、加工、廃棄、埋没、発掘調査といった諸過程を経て様々な営力を受け破損が生じることが考えられるが、本稿では形態や前述した加工痕、使用痕の有無、現生ハマグリを打ち欠いた割れ口との比較検討を行うことで、貝刃とそれ以外の出土貝類遺体の区別を行った。資料全体が風化、磨耗しており観察が十分に行えない資料については対象外とした。なお、貝製品に観察される様々な痕跡は、加工によって生じたものであるのか、使用に伴って生じたものであるのか峻別し難いため、本稿では加工痕、使用痕を併記した。

先行研究における貝刃の分類では、牛沢(一九七七)が千葉県・加曾利貝塚出土資料について行った、腹縁の刃部範囲を角度として捉え計測する分類方法が広く採用されている。しかし、大きな打ち欠きを加え製

第4表 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製貝刃分類表

加工方法	分類	加工・使用痕が観察される部位と特徴	左 端	右 端	該当出土資料No.
剥離	A	腹縁に局所的な剥離(幅10mm前後)を加え刃部とする。	2	3	L.32,40/R.30,41,79
	B	1 前背縁寄りの腹縁部と後背縁寄りの腹縁部。腹縁中央部は未加工、未使用で自然面が残る。	-	4	R.9,136,137,138
		2 腹縁中央部。両背縁および両背縁寄りの腹縁部は未加工、未使用で自然面が残る。	3	3	L.111,134,135/R.77,78,105
		3 後背縁から腹縁中央部にかけて。前背縁寄りの腹縁～前背縁は未加工、未使用で自然面が残る。	5	-	L.112,114,117,118,129
		4 前背縁から腹縁中央部にかけて。後背縁寄りの腹縁～後背縁は未加工、未使用で自然面が残る。	2	-	L.22,26
5 腹縁全体に加工、使用が及ぶ。 剥離の幅や打ち欠きの奥行きは不規則であるため、刃部は様々な形状を呈する。	7	20	L.5,7,12,48,116,113,120/R.6,16,18,20,21,25,28,87,122,123,125,126,127,128,130,131,132,133,139(破片資料)144		
連弧状の剥離	C	1 腹縁中央部から前背縁にかけては未加工、未使用で自然面が残る。 1次加工で剥離後、2次加工で等幅の連弧状の剥離を加える。刃の奥行きは狭い。	6	8	L.2,3,35,39,115,119 R.10,15,32,33,34,36,37,108
	2 腹縁全体に1次加工で剥離後、2次加工において等幅で規則的な連弧状の剥離を加える。	9	10	L.19,23,44,45,47,49,50,52,53 R.27,42,43,46,51,54,55,56,57,58	
打ち欠き	D	1 腹縁の一部を深く打ち欠いた部分を刃部とする。	7	11	L.8,60,61,66,64,76,121 R.4,11,14,62,63,65,74,75,96,97,124
		2 後背縁の突出した部位を欠くような深い打ち欠きや剥離。腹縁中央部～前背縁は未加工。	6	6	L.59,67,68,109,110,141 R.1,12,13,38,106,107
		3 腹縁全体を打ち欠く。丸形を呈する。	3	1	L.69,72,73/R.71
打ち欠き+剥離	E	4 前背縁から後背縁寄りの腹縁にかけて斜めに大きく打ち欠く。幅広い刃部を呈する。	5	9	L.91,92,93,94,140 R.96,98,99,100,101,102,103,104,143
		5 両背縁から背面の中央部に印けて大きく打ち欠く。設置付近のみが残るため変形を呈する。	5	7	L.7,80,81,82,83 R.70,84,86,85,88,89,90
		殻頂部から腹縁にかけて垂直に半截した破断面を刃部とする。	2	-	L.17,29

62 82 合計 144点



第14図 上台遺跡1号住居出土貝製品殻長分布

が見られない破砕貝の破断面

B2タイプ…腹縁中央部に加工痕・使用痕が認められる。両背縁および両背縁寄りの腹縁部は未加工・未使用であり自然面が残る。

B1タイプ…前背縁寄りの腹縁部と後背縁寄りの腹縁部に加工痕・使用痕が認められる。腹縁中央部は未加工・未使用で自然面が残る。

下の5タイプに細分される。

Bタイプ…前背縁から後背縁にかけて主に剥離による加工痕・使用痕が認められるもの。加工痕・使用痕の認められる範囲により以下

といった加工痕・使用痕が明瞭に認められる。

は非常に狭いが、同幅の連弧状の剥離と刃先の磨滅、線状痕

Aタイプ…局所的な加工痕(剥離)・使用痕が認められるもの。腹縁に幅

一〇mm前後の局所的な剥離を加え刃部としている。刃部の幅

は以下の通りである(第4表、第17・18・19図)。

貝刃は、主に剥離によって加工が加えられているA・B・Cタイプ、主

に打ち欠きによって加工が加えられているD・Eタイプに大別し、加工

痕・使用痕が観察される範囲や形態によって細分した。各タイプの特徴

は以下の通りである(第4表、第17・18・19図)。

有用であると考えられる。

刃により鋭く立つ角は磨滅し消失するのであろう。先行研究において貝

刃に度々観察されてきた剥離・磨滅・線状痕・擦痕は人為的な加工・使

用の結果生じる可能性が指摘され、貝刃と破砕貝を区別する項目として

を觀察した。

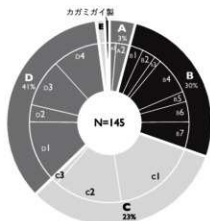
觀察の結果、貝刃において刃の後縁に該当する箇所は、成長線に沿う

ような平滑でなだらかな破断面を呈していた。貝刃において刃先に該当

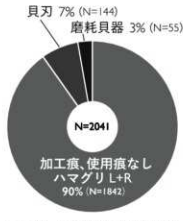
する箇所も同様に平滑な破断面を呈し、鋭く明瞭な角が立つ。これらの

破断面の特徴は、貝刃の刃の後縁・刃先には見られないものである。剥

離・打ち欠きを加える貝刃製作の過程で破断面は平滑ではなくなり、使



第13図 上台遺跡1号住居出土貝刃分類の組成



第12図 上台遺跡1号住居出土ハマグリにおける貝製品の割合

作されている資料群など本遺跡出土資料に觀察される加工痕・使用痕は先の分類方法では捉えきれないことから、独自の分類を試みた。

加工痕・使用痕の觀察に先立ち、現生ハマグリと破損箇所のある本遺跡出土ハマグリ

の破断面の觀察を行った(第15・16図)。觀察に使用した現

生ハマグリは、本遺跡より多く出土している殻長五〇〜六

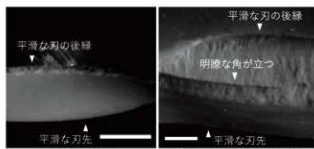
七〇〜八〇mm台のハマグリは購入による入手が出来なかつ

たため、チョウセンハマグリをそれぞれ筆者が鮮魚店で購

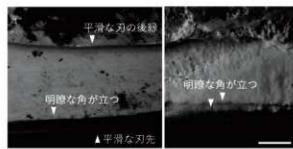
入したものである。現生ハマグリについては、鶏卵大のハマ

グリストーンで内面から腹縁縁辺部に打撃を加え、破断面を觀察した。本遺跡出土ハマ

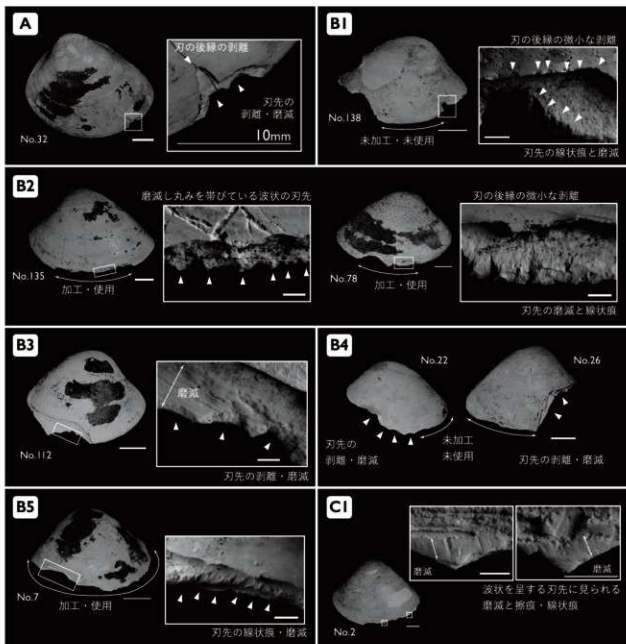
グリについては、破損箇所があるものの加工痕・使用痕が見られない破砕貝の破断面



第15図 現生ハマグリの割れ口

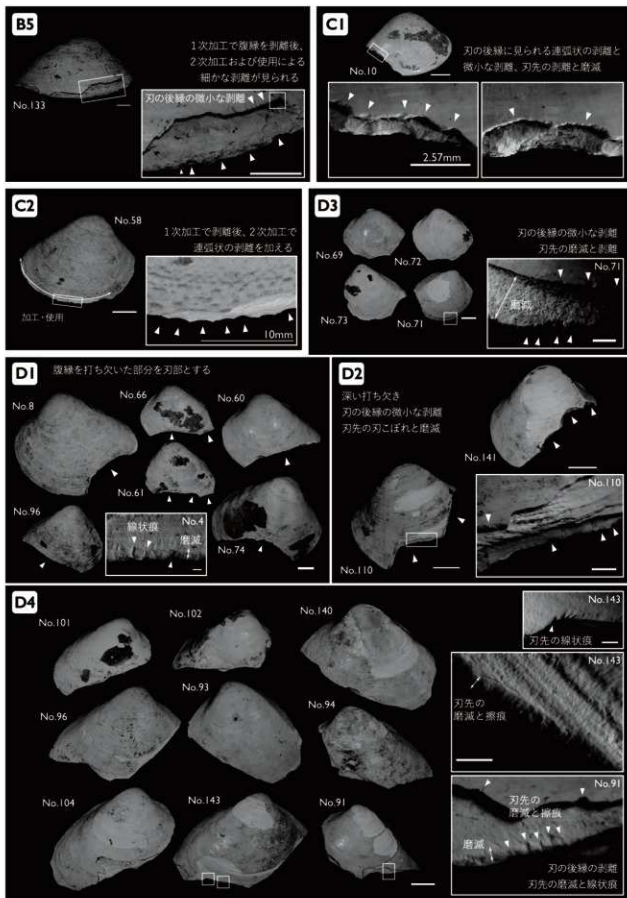


第16図 加工痕・使用痕の見られない出土ハマグリの割れ口



第17図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕(1)

資料No. は第4表と対応する。貝刃右下スケールは10mm。拡大写真内スケールは数値の記載がないものは1mmを示す。



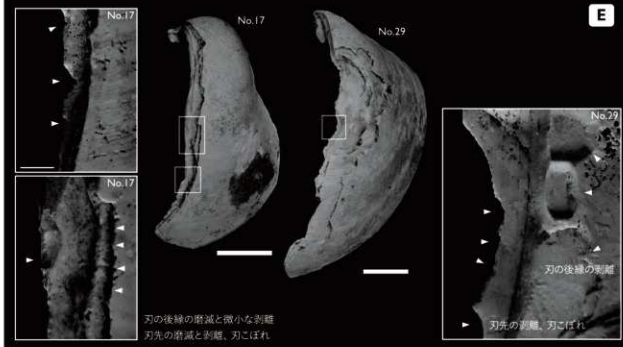
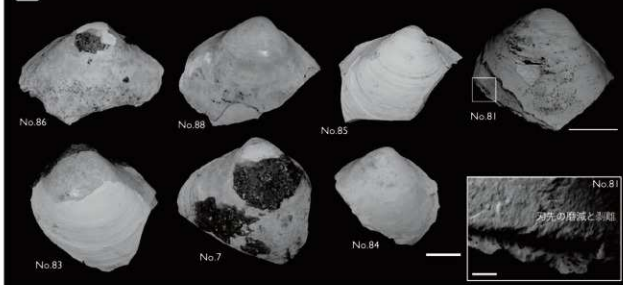
第 18 図 上台遺跡 1 号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕 (2)

資料 No. は第 4 表と対応する。貝刃右下スケールは 10mm、拡大写真内スケールは数値の記載がないものは 1mm を示す。



D5

両背縁から背面中央に向かって大きく打ち欠く



第19図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製貝刃の分類と加工痕・使用痕(3)  
資料No.は第4表と対応する。貝刃右下スケールは10mm、拡大写真内スケールは1mmを示す。

- C**タイプ…前背縁から後背縁にかけて主に連弧に差がみられる。
- B5**タイプ…腹縁全体に加工痕・使用痕がおよぶ。剥離や打ち欠きの幅・奥行は不規則であるため刃部は様々な形態を呈する。右殻が多く出土しており、左右の出土数に差がみられる。
- B4**タイプ…前背縁から腹縁中央部の範囲に加工痕・使用痕が認められる。腹縁中央部から後背縁にかけては未加工で自然面が残る。
- B3**タイプ…後背縁から腹縁中央部の範囲に加工痕・使用痕が認められる。前背縁寄りの腹縁前背縁は未加工・未使用で自然面が残る。



第20図 上台遺跡1号住居址出土  
カガミガイ製貝刃

- D1タイプ：腹縁から殻の中央部に向かって、腹縁の一部を深く打ち欠いた部分を刃部とする。一点出土しているカガミガイ製貝刃も本タイプに該当する（第20図）。
- D2タイプ：後背縁寄りの腹縁から後背縁にかけて打ち欠きや剥離が見られ、殻が突出している部分を除くような形態を呈する。前背縁から腹縁中央部は未加工・未使用であり自然面が残る。
- D3タイプ：腹縁全体を深く打ち欠き、殻頂部周辺を残し丸形を呈する。
- D4タイプ：前背縁から後背縁寄りの腹縁にかけて、斜めに大きく打ち欠く。
- C1タイプ：腹縁中央部から前背縁の範囲は未加工・未使用で自然面が残る。一次加工で腹縁を剥離後、二次加工で連弧状の細かい剥離を加えて刃部を製作している。刃部は波状を呈し刃の奥行きは狭い。
- C2タイプ：C1と同様の加工方法と波状の刃部が見られるが、加工痕・使用痕の範囲がより広く腹縁全体におよぶ点が異なる。
- Dタイプ：前背縁から後背縁にかけて主に打ち欠きによる加工痕・使用痕が認められるもの。加工痕・使用痕が認められる範囲と形態により以下の5タイプに細分される。

- D5タイプ：両背縁から背面の中央に向けて斜めに大きく打ち欠く。D4タイプにさらに後背面からの打ち欠きを加えたタイプとも捉えられる。殻頂部周辺のみが残り変形を呈する。
- Eタイプ：殻頂部から腹縁にかけて、垂直に半裁した形態を呈し、その破断面を刃部とする。刃部には著しい剥離や線状痕が見られる。
- 先行研究では貝刃の材料となった貝種また形態の割合について、加工方法・機能・用途との関連という視点から遺跡毎に分析が行われてきた。本遺跡出土貝刃分類の組成は第13図の通りである。貝種は、カガミガイ製貝刃一点を除きすべてハマグリ製であった。加工方法と加工・使用部位の組み合わせによって細分されるが、剥離による加工を特徴とするA・Bタイプは三三%、一次加工後、二次加工で連弧状の剥離を加えるCタイプは三三%、打ち欠きによる加工を特徴とするD・Eタイプは四四%（カガミガイ製貝刃を含む）であった。特定の加工方法や形態が主体を占める傾向はみられず、一つのタイプに偏らない多様な貝刃のあり方がうかがえる。また、報告例がほとんど見られないD・Eタイプ、即ち大きな打ち欠きによる加工と幅の広い刃部を特徴とするタイプが一定の割合を占める点は、本遺跡の特徴として指摘されよう。神沢・川口（一九七二）、川口（一九八九）によれば、これら大きな打ち欠きを加えるタイプの貝刃は、刃部としての形状、使用による損耗が認められるにも関わらず単なる破砕貝として見なされ易く、出土例が非常に少ないと指摘されている。
- 貝刃を含む貝製品と、貝製品以外の出土ハマグリサイズの比較するため、殻長の計測を行い第14図に殻長分布を示した。貝刃の材料として

加工・使用痕の見られるハマグリは殻長約五〇〜六〇mmであった。加工・使用痕の見られない出土ハマグリよりはやや大きいサイズが選択されているものの、その分布はほぼ重なっている。大型個体への選択性は見られず、加工痕・使用痕が見られない殻長約七〇mm以上の大型個体も散見される。本遺跡で多く出土している殻長約五〇〜六〇mmの中型個体が貝刃の材料としても主に利用されていたことが指摘される。ハマグリはサイズが大型になるほど殻の厚みも増すことから、中型個体の入手と加工のし易さが殻長分布に反映されている可能性も考えられる。

#### 磨耗貝器

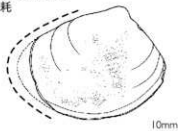
すべてハマグリ製であり五十五点が出土した。磨耗貝器としたハマグリは、背面の模様が肉眼観察可能であるような遺存状態が良好な個体であるにも関わらず、部分的に著しい磨耗痕が認められる資料群である。金子・忍沢(一九八六)では「ヘラ状貝製品」、川口(一九八九)では「磨耗貝器」として分類されている貝製品であり(第21図)、次のような特徴が指摘されている。

- (一) 器体の一部に磨耗痕、研磨痕、擦痕を有する。
  - (二) 明瞭な加工痕が認められず、貝の有する自然形をそのまま利用したものがほとんどである。
  - (三) より厚さのある大型の貝への選択性が認められる。
  - (四) 土器の器面調整、皮なめし等幅広い用途を有していたと考えられる。
- また、貝刃や貝輪といった出土貝製品と比べて磨耗貝器の出土報告例は少なく、その要因としては次のような指摘がなされている(金子・忍沢一九八六、川口・一九八九)。
- (一) 研究者側の認識不足である可能性があり、より一層の遺物への注意力が必要である。

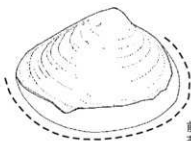
第5表 上台遺跡1号住居址出土磨耗貝器分類表

著しく磨耗している箇所と形態の特徴	左殻	右殻	該当出土資料No.
殻頂部、前丘部、殻頂部は磨耗により孔が開く	1	-	L 2
殻頂部欠損、前背縁から後背縁にかけての縁辺の割れ口と背面が磨耗	-	2	R 7, 17
殻頂部欠損、殻頂・前背縁・背面が磨耗	-	2	R 3, 33
前丘、前背縁から腹縁にかけて縁辺の背面が磨耗	-	1	R 32
前丘、前背縁から腹縁にかけて縁辺の内面が磨耗	-	2	R 19, 34
前背縁から腹縁にかけて斜めに欠損、割れ口と内面が磨耗	-	1	R 55
後背縁から腹縁にかけて斜めに欠損、割れ口が磨耗	1	-	L 56
前背縁個欠損、半裁 割れ口、背面が磨耗	7	4	L 9, 10, 23, 24, 50, 52, 53 / R 18, 20, 31, 35
前背縁個欠損、半裁 割れ口、内面が磨耗	4	-	L 8, 21, 22, 26
後背縁個欠損、半裁 割れ口が磨耗	1	1	L16 R 46
後背縁個欠損、半裁 割れ口、背面が磨耗	2	14	L 5, 6 R 37, 38, 39, 40, 41, 42, 43, 44, 45, 47, 48, 49, 51, 54
後背縁個欠損、半裁 割れ口、内面が磨耗	-	3	R 12, 14, 30
殻頂部欠損、殻頂から後背縁にかけて直線的に磨耗	3	1	L 4, 11, 15 R 13
殻頂部欠損、殻頂から前背縁にかけて直線的に磨耗	2	-	L 25, 28
腹縁割れ口全体が磨耗	-	1	R 36
腹縁の内面全体が磨耗	1	-	L 1
腹縁個から深く打ち欠いた割れ口と背面が磨耗	1	-	L 29
	23	32	合計55点

後背縁～腹縁にかけて  
著しく磨耗



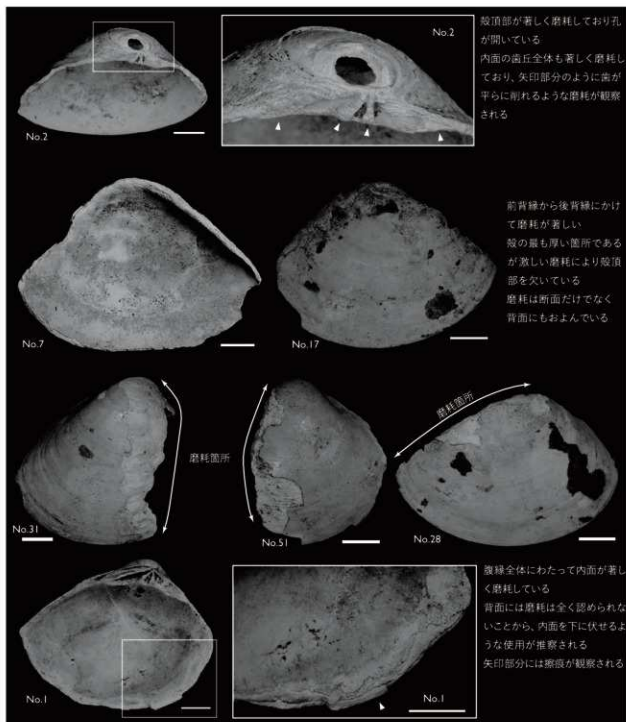
伊豆子貝塚（東京都）出土  
ハマグリ製磨耗貝器【縄文後期・壱之内1式期】



加曾利北貝塚（千葉県）出土  
アリスガイ製磨耗貝器【縄文中期・加曾利B式期】

前背縁～腹縁にかけて  
著しく磨耗

第21図 他遺跡出土磨耗貝器  
(金子・忍沢 1986 年に加筆)



殻頂部が著しく磨耗しており孔が  
開いている  
内面の歯丘全体も著しく磨耗し  
ており、矢印部分のように歯が  
平らに削れるような磨耗が観察  
される

前背縁から後背縁にか  
けて磨耗が著しい  
殻の最も厚い箇所である  
が激しい磨耗により殻頂  
部を欠いている  
磨耗は断面だけでなく  
背面にもおよんでいる

腹縁全体にわたって内面が著  
しく磨耗している  
背面には磨耗は全く認められ  
ないことから、内面を下に伏せる  
ような使用が推察される  
矢印部分には磨痕が観察される

第22図 上台遺跡1号住居址出土ハマグリ製磨耗貝器と磨耗痕

(一) 一見、自然遺物との区別が困難である。

(二) 食料残渣として扱われてしまうことで、実数は出土例をかなり上回る可能性がある。

本遺跡出土資料ではヘラ状を呈する形態の資料は見られず、著しい磨耗の痕跡が特徴的であることから川口(一九八九)にない「磨耗貝器」として報告する。著しい磨耗痕を有する部位毎に出土資料を一覧したものが第5表である。いずれの磨耗貝器も、殻が最も厚い殻頂部付近を含んでいながら著しく磨耗しており、資料によっては背面や内面にも削りこまれるように磨耗がおよんでいる。擦痕が観察される資料もあった。磨耗貝器にみられる著しい磨耗痕は局所的であり、貝殻全体が風化により磨滅・磨耗している資料とは明らかに異なる(第22図)。磨耗貝器の殻長分布は、殻長約五五〜六五mmに集中する。大型個体への選択性がうかがえ、先行研究の指摘を追認する結果であった(第14図)。

#### 有孔貝器

ハマグリ製一点が出土している。川口(一九八九)によると、有孔貝器とは「自然の殻形は保ちつつ、二枚貝や巻貝の殻頂部および体層部に粗雑な小孔を穿つもの」と定義されている。本資料も殻頂部の孔に拡張や研磨は認められず、内面からの穿孔以上の加工は施されていない点から有孔貝器と分類した。ただし、本資料は縁辺に目を向けると、後背縁から腹縁にかけて加工・使用された痕跡が認められ、第4表ではD2タイプに分類される貝刃でもある。

本資料と類似した有孔貝器は、本遺跡より直線距離にしてそれぞれ約一〜三km程度の位置に形成された梶山貝塚(第1図・前期花植下層式期)から一点、下組東貝塚(前期花植下層式期)から四点報告例がある(第23図)。いずれも腹縁に加工痕・使用痕を有し、貝刃としての形態も呈す

る点の本資料と共通する。下組東貝塚では有孔貝器ではなく「貝刃」として報告されており、穿孔は「紐掛け用」の孔としての機能が推測されている(玉川文化研究所編二〇〇六)。

時期・地域は異なるが、東京湾東岸域にあたる千葉県・加賀利北貝塚(居住址地域・加賀利EⅡ式期)からも一点報告例をみることが出来る。ただし、穿孔以外に加工痕・使用痕は認められず、貝刃としての形態を呈していない点の本資料や梶山貝塚、下組東貝塚出土資料と異なる。

#### 貝輪

イタボガキ製一点が出土している(第24図)。貝輪は縄文時代を通じて各地から出土する貝製品であり、材料となる貝種は様々である。本資料は全体の三分の一程度が欠損しているが、孔が開けられ縁辺が等幅となつている形態から貝輪と分類した。背面および内面、断面に研磨は認められず、未製品か

ら



第23図 上台遺跡1号住居址および他遺跡出土ハマグリ製有孔貝器



第24図 上台遺跡1号住居址出土  
イタボガキ製貝輪

## まとめ

古鶴見湾では、縄文時代前期・花積下層式期に学史的に著名な菊名貝塚や下組東貝塚をはじめとした斜面貝塚が形成され始める。貝類遺体は勿論のこと、多くの魚類遺体と釣針などの漁撈具の出土は、生業活動の一端に活発な漁撈活動と海産資源利用がうかがえるものである。しかしながら、関山式期に入ると、貝塚だけでなく遺跡の分布そのものが空白となり、貝塚は白幡浦局ヶ丘遺跡の土坑内貝層以外に見つかっていない。本遺跡が形成された黒浜式期に入り、湾口部や湾奥部で貝塚を含む集落遺跡が再び形成され始め、続く諸磯a・b式期に継続する茅ヶ崎貝塚や西ノ谷貝塚といった環状を呈する集落も形成されるようになる。このように数多くの貝塚が形成されている一方、出土動物遺体の詳細な分析や定量的内容が明らかとなっていない貝塚は断片的であり、当該地域の採貝・漁撈・狩猟活動と動物資源利用の考察を行う上では課題が多く残されている。本稿では、古鶴見湾において遺跡数が増加し始める黒浜式期に形成された本遺跡の出土貝類遺体の分析を行うことで、本遺跡周辺を採貝

製品であるかの区別は判然としない。材料となっているイタボガキは左殻五点・右殻一〇点が出土しており、左右で出土数に差異が認められた。本資料は右殻が利用されており、出土数の左右差は貝輪製作に関連する可能性も考え得る。(吉水)

活動領域としてハマグリを主体的に採貝していた生業活動の一端と、多様な形態の貝刃を中心とする貝製品の出土から、食料としての利用だけでなく道具の材料として積極的に利用していた貝類資源利用のあり方を明らかにすることができた。

本遺跡の調査時および本分析においても貝類遺体以外の動物遺体が確認されなかった点は、本遺跡に限らず東京湾岸域の当該期住居址内貝塚にみられる動物遺体の出土傾向として指摘されており(植月・小島二〇〇〇、忍沢二〇〇一・二〇〇二)、当該期の動物資源利用・廃棄行動に関連するものとして注視したい。本遺跡では貝製品のまとまった出土も鑑み、単なる食料残滓の廃棄場にとどまらない可能性も示唆される。

貝刃については近年、製作方法に迫る詳細な観察分析(山崎・黒住・大城二〇一四)、弓・矢柄製作の加工具、赤色顔料製作に関連した可能性の指摘など(山崎二〇一〇)、先学により指摘されてきた製作・機能・用途の時間的・地域的特徴が詳細に提示される論考が出されている。本遺跡出土の多様な貝刃もその一事例として捉えることができ、貝刃の材料として選択されている殻長五〇～一六〇mm台のハマグリが入手可能であった環境的要因を背景として、金子・忍沢(一九八六)が指摘しているように、用途の汎汎性とそれに対応可能な製作加工の簡便性が相俟つて重要な道具のひとつとして位置付けられていたと推察される。多様な形態の貝刃は様々な機能・用途を持っていたことが想定され、石器等の共伴する遺物の検討、本分析で観察された種々の痕跡の実験考古学的な検討も今後必要である。

本遺跡出土貝刃のあり方は、一遺跡から一〇〇点以上確認された点、他遺跡では報告例がほとんど見られない大きな打ち欠きによる加工方法によつて製作された資料群、有孔貝器の出土という点において、本遺跡か

ら近距離に形成された梶山貝塚と共通性を見出すことができた。一方で、形成された時期の違い、住居址・内貝塚と斜面貝塚の違い、磨耗貝器を伴う点においては差異も指摘される。

本稿で報告した内容も含め、縄文時代の古鶴見湾岸地域における生業活動と動物資源利用を明らかにしていくには、当該地域における出土動物遺体の再検討と定量的内容の集成に努め、採貝・漁撈・狩猟活動のあり方と動物資源利用の通時的な比較検討、さらに奥東京湾や東京湾東岸域といった近隣地域との比較検討も今後の課題として残されている。

(吉水)

#### 謝辞

本稿をまとめるにあたり、川口徳治朗氏、黒住耐二氏、平澤悠氏にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 植月 学：小島秀彰 二〇〇〇「縄文前期の生業と居住形態―千葉県唐塚遺跡の生業活動とその季節性―」『古代』第一〇八号 早稲田大学考古学会  
牛沢百合子 一九七二「骨・角・牙・貝製品」『加賀貝塚Ⅳ』滝口宏編 中央公論美術出版  
忍沢成規 二〇〇一「横浜市茅ヶ崎貝塚の貝層」『茅ヶ崎貝塚―貝塚編―財団法人横浜市ふるさと歴史財団  
横浜市ふるさと歴史財団  
忍沢成規 二〇〇三「西ノ谷貝塚J57号住居跡内貝塚の調査」『西ノ谷貝塚』財団法人横浜市ふるさと歴史財団  
神奈川県立生命の星・地球博物館編 二〇〇四「企画展 12℃の世界 ワークショップ」神奈川県立生命の星・地球博物館  
神奈川県立博物館編 一九七七「神奈川県立博物館発掘調査報告書 第十号 梶山遺跡」神奈川県立博物館

神奈川県立博物館編 一九七九「神奈川県立博物館発掘調査報告書 第十二号 上台遺跡」神奈川県立博物館

上台遺跡調査団編 一九九六「上台遺跡発掘調査報告書」上台遺跡調査団

金子浩昌・忍沢成規 一九八九「骨角器の研究 縄文編Ⅰ・Ⅱ」慶友社

川口徳治朗 一九八九「縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究」『昭和六十年

三年度科研費補助金（一般研究）研究成果報告書』

神沢勇一・川口徳治朗 一九七二「東京湾沿岸域出土の貝冚について」『神奈川県立博物館研究報告』第一巻第四号 神奈川県立博物館

工藤雄一郎 二〇二二「旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―」新泉社

杉原莊介編 一九七七「加賀利北貝塚」中央公論美術出版

玉川文化財研究所編 二〇〇七「上台遺跡（上末吉）丁目九五四番地一所在 発掘調査報告書」玉川文化財研究所

玉川文化財研究所編 二〇〇六「横浜市港北区 下組東貝塚 発掘調査報告書」玉川文化財研究所

富岡直人 一九九九「貝類」『考古学と動物学』西本豊弘・松井章編 同成社

永沢謙次 一九六〇「房総半島の洪積層に於けるアカニシの変異に就いて」『東北大学理学部報告』地質学 四―東北大学

宮川博司 二〇〇六「縄文時代における貝冚の採相とその機能論的考察」『考古学論究』第十一号 立正大学考古学会編

山崎純男 二〇〇一「大分県中津市本那馬溪町枡淵穴出土の貝冚について」『先史学』考古学論究Ⅴ 上巻 甲元眞之先生退任記念 龍田考古会編

山崎真治・黒住耐二・大城秀子 二〇一四「神奈川県南城市熱田原貝塚出土貝冚の製作技術」『日本考古学』第三十八号 日本考古学協会



【資料紹介】

神奈川県立歴史博物館所蔵の骨角器

― 林國治氏、赤星直忠氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料 ―

高橋 健  
千葉 毅

(横浜市歴史博物館)

【キーワード】  
称名寺貝塚 骨角器 銚頭 縄文時代

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市称名寺貝塚採集骨角器の報告を行なった。これらは林國治氏、赤星直忠氏旧蔵資料である。今回報告した二十五点の資料は、現在称名寺A貝塚とされている地点から採集されたものである可能性が高い。銚頭、釣針、有尾刺突具などの狩猟漁撈具のほか、針や垂飾、貝輪、貝刃などが含まれる。銚頭三点は、縄文時代後期初頭から中葉に位置づけられる。大型の銚頭は角座骨を含めた素材取りに特徴があり、その製作技術的な系譜や編年上の位置づけが注目される。

はじめに

神奈川県立歴史博物館では、その前身となる神奈川県立博物館の一九六七年の設立以来、県内の考古資料の収集に努めてきた。現在、当館ではそれらの整理作業を進めており、整理が進んだ資料から順次公表を行なっている。

本稿では、横浜市称名寺貝塚採集の骨角器の報告を行なう。これらは林國治氏及び赤星直忠氏により採集され、その後当館に収蔵された資料である。

一 林國治氏旧蔵資料

(一) 資料の概要

林國治氏は戦前戦後にかけて、横浜市中心に考古資料の採集を精力的に行なっていた在野の考古学研究者である。現在、林氏が採集した資料の大半は当館に収蔵されている。

林氏は昭和二〇年代に数回にわたり称名寺貝塚を訪れており、土器、土製品、石器、骨角器、動物遺体等を採集している。これらのうち土器、土製品については既に報告を行なった(千葉二〇一五)。これらの土器群は、吉田格氏による称名寺貝塚の発掘調査及び称名寺式設定の契機となったものでもあり、学史的に重要な資料であった。今回報告する骨角器については、資料への個別の注記がなく詳細な採集時期は不明であるが、基



第1図 称名寺貝塚の位置

本的には同時期に採集されたものと考えている。

当館が所蔵する林氏採集の称名寺貝塚採集骨角器には、紙箱で保管されていたものと(写真1)、個別に保管されていたものがある。

前者は、林氏が称名寺貝塚で採集した動物遺体が保管されている木箱に取まっていた。紙箱には「称名寺貝塚 骨角器」とマジックで注記されており、箱の中には十三点の骨角器とともに「称名寺貝塚」と記されたメモが収納されていたことから、これらの骨角器は称名寺貝塚で採集されたものである可能性が高い。ただ、それらの中には「三ツ澤貝塚」と注記された骨角器も混在していたことから、全てが称名寺貝塚採集のものではない可能性がある。そのため本稿では、注記から明らかに他の遺跡で採集されたと判断される資料および細片を除いた七点の資料を報告する。

後者は、称名寺貝塚採集資料として個別に当館に登録されているもので、骨角器が十一、貝製品が五、点ある。(千葉)

## (2) 紙箱で保管されていた資料(第2図、写真2)

1、3は鹿角製で雄形・鉤引式の銚頭である。全て基部の破片であり、逆鉤を残すものはない。

1は「稱名寺貝塚」の注記を持つ。本来一五cmを優に超える大型品だったと考えられる。表面側(図左)に鹿角表面の溝、裏面側には海綿質がみられる。軸部の断面は扁平な楕円形であり、索肩が大きく突き出している。索肩の突出方向(図中央の右側)に「片側交互」に逆鉤がついていたと推測される(第6図エ)。軸部の根元に浅い段をもち(▲a)、幅広いの溝を入れたようになっていて、繫索(糸繩)の装着と関係するものであろう。基部は逆円錐に近い形状であるが、表面は平滑に仕上げられ

ておらず、特に索肩の近くでは不整な小平面が連続する(▲b)。端部は鈍頭になっている。称名寺式期の銚頭にしばしばみられる、繫索(糸繩)を通すための索肩の抉りは設けられていない。

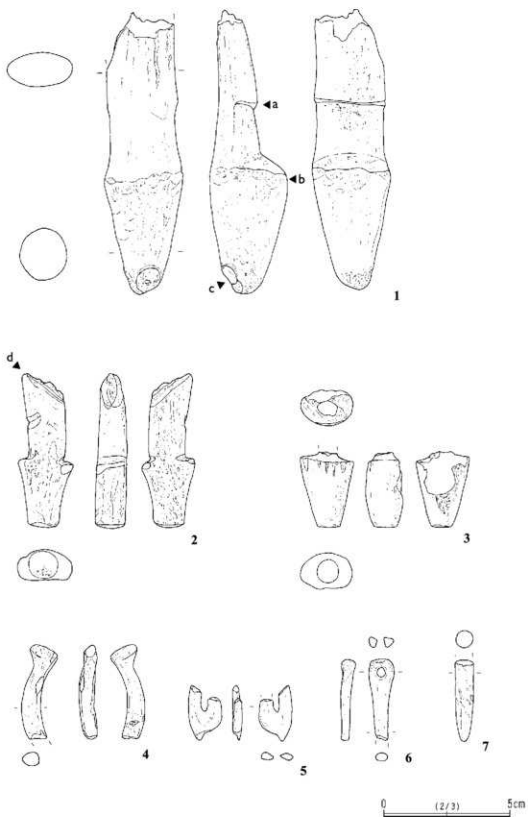
この資料は素材取りに特徴がみられる。海綿質は軸の裏面側で顕著だが、基部ではほとんど確認できない。素材に角幹部を利用したのであれば、中心部に

ある海綿質の組織を表面のどこかに確認できるはずである(今回報告の2・3などと比較すると分かりやすい)。注目すべきは、基部端近くに残る小凹面である(▲c)。これは原材の自然面であるが、鹿角そのものにはこのような凹面をもつ部分はなく、シカ頭蓋骨の内面にあたると思われる(写真3)。したがって、この銚頭は鹿角の角幹部から角座骨にかけての部分を利用して作られたものである。

2は、上端部に摺り切りによる斜位の切断痕が残る資料である(▲d)。鹿角表面の溝(図左)と、裏面側に海綿質を残す。板状の素材から作られており、索肩は両側に張り出している。基部端には平坦面を設けてい



写真1 林氏採集資料が保管されていた紙箱



第2圖 称名寺貝塚採集骨角器 (1) 林園治氏旧蔵資料・紙箱保管 (当館蔵)



写真2 称名寺貝塚採集骨角器 (1) 林國治氏旧蔵資料・紙箱保管 (当館蔵)



a. 角座骨のついた鹿角(エゾシカ)  
 b. 角幹部と角座骨(毛皮残存)  
 c. 頭蓋骨内面の凹凸

写真3 鹿角と角座骨

る。上端付近はおそらく被熱により黒く変色しているが、擦り切りも含めて意図は不明である。

3も鹿角表面の溝と裏面の海綿質を残す。裏面側が破損しているために確実ではないが、索肩は軸の周りを一周するように設けられていたらしい。基部端には平坦面をもつ。

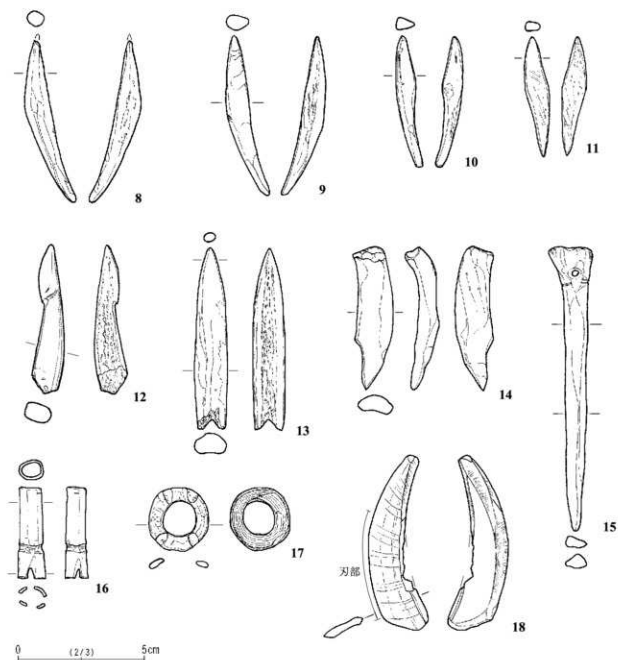
釣針とした資料二点は、いずれも破片である。これまでに称名寺貝塚から出土した釣針をみると、軸頭部は二つの突起をもつタイプが主であり、アグのつき方は内アグ/外アグ/両アグ/無アグの各種がみられる。軸が湾曲する曲軸のタイプが出現するのが特徴である。4はやや湾曲した軸の頂部に突起が一つ付いた大型釣針の破片、5は小型釣針未成品の湾曲部の破片だと推測した。5の突起は外アグになる部分だろうか。

6は有孔の骨針の頭部破片、7は刺突具の先端部破片である。(高橋)

### (3) 個別に保管されていた資料(第3・4図、写真4)

有尾刺突具が四点出土している(第3図8・11)。いずれも「ノ」の字状の全形をほぼ残す資料である。中央が着柄部、下端が逆鉤として機能したと考えられている。12は先端に逆鉤をもつヤス先の破片である。今回報告する資料には、多段の逆鉤付ヤス(吉田報告の分類による中型筈)は含まれていない(吉田一九六〇)。有尾刺突具が称名寺貝塚の各地点から出土しているのに対して、多段の逆鉤付ヤスはI貝塚からは出土していない。したがって当資料群を一旦まとりとみた場合、I貝塚にやや近い様相を示しているといえるかもしれない。

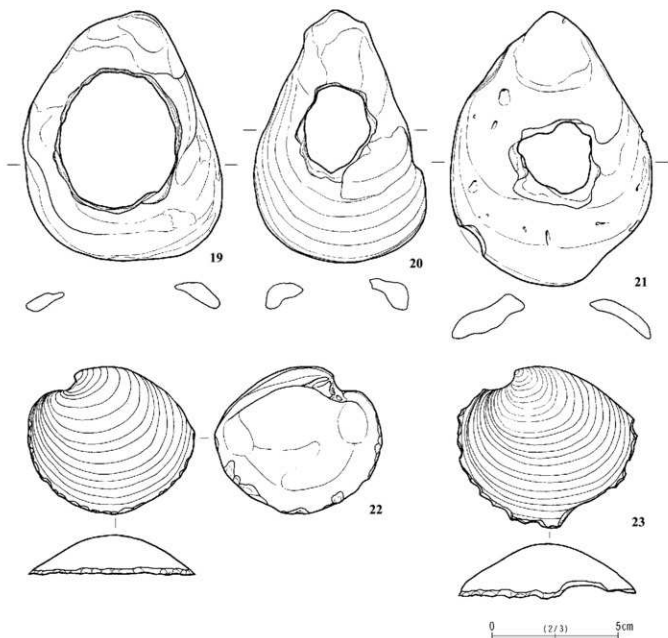
13は刺突具の先端部破片である。14は器種不明としたが、表面の磨耗が著しい骨片で人工品ではないかもしれない。15は有孔の骨針で、ほぼ完形の資料。16は、鳥管骨を切断して一端に溝を巡らせ、四力所に切込



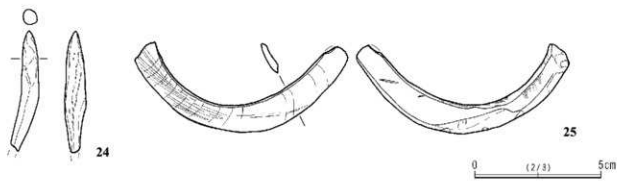
第3図 称名寺貝塚採集骨角器(2) 林國治氏旧蔵資料・個別保管(当館蔵)

を入れている。用途不明だが、垂飾の一種だと考えた。17は環状の垂飾で、サメ椎骨を横方向に分割し、中央に大きく穿孔したものである。サメ椎骨製の垂飾は中央に穿孔しただけの場合が多いが、このように加工されたものは、福島県寺脇貝塚などに類例がある。18はイノシシ牙の加工品である。イノシシの下顎犬歯を素材とし、縁辺を磨いて刃部を作り出している。

貝製品としては、貝輪と貝刃がある。貝輪はイタボガキ製のものが三点である(第4図19、21)。20は「昭和二〇、二二、二四 稱名寺門内」の注記を持つ。一部読めないが、前号で紹介した土器と同じ昭和二五年十二月二四日に、林氏によって採集された資料であろう。穿孔が小さい二点は未成品であろう。称名寺貝塚からは過去の調査によってもイタボガキ製の貝輪が多く出土しており、千葉方面の貝塚において中期に盛行したイタボガキ製貝輪が後期にベンケイガイ製に置き換わるのとは異なる



第4图 称名寺貝塚採集骨角器(3) 林國治氏旧蔵資料・個別保管(当館蔵)



第5图 称名寺貝塚採集骨角器(4) 赤星直忠氏旧蔵資料(当館蔵)



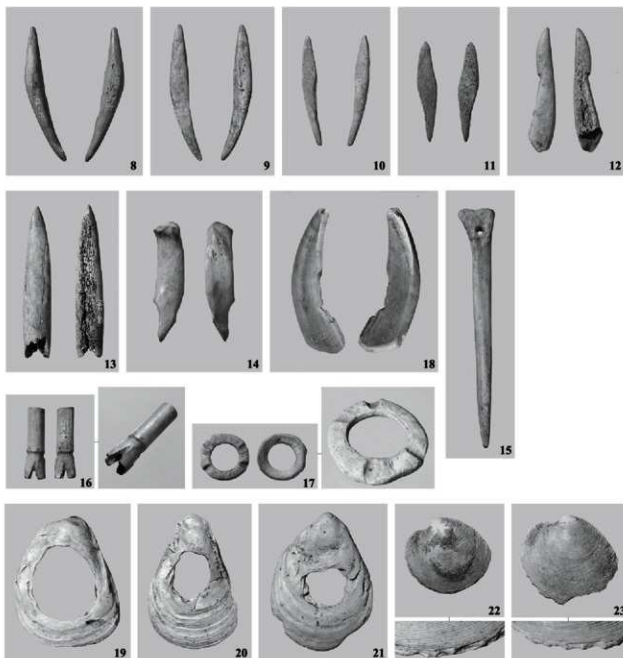


写真4 称名寺貝塚採集骨角器(2) 林國治氏旧蔵資料・個別保管(当館蔵)



写真5 称名寺貝塚採集骨角器(3) 赤星直忠氏旧蔵資料(当館蔵)

った傾向をみせている。貝刃はカガミ製のもの2点みられる22、23。22は内外面、23は外面に剝離を有する。(高橋)

## 二 赤星直忠氏旧蔵資料(第5図、写真5)

第5図24・25は赤星直忠氏の旧蔵資料である。赤星氏は大正末期から昭和二〇年代にかけて、数回にわたり称名寺貝塚の調査を行なっているが、当館に収蔵されている資料がいつ採集されたものなのかは現状では確認できていない。

24は有尾刺突具である。尾部をやや欠損する。25はイノシシ牙製のヘラ状製品である。イノシシ下顎犬歯を板状に切断し、縁辺部を整えているが穿孔などはみられない。神奈川県埋蔵文化財センター所蔵の赤星ノート(No.三三七)にこの資料の実測図が掲載されており、「横浜市金沢区称名寺内 称名寺貝塚 県立博物館蔵」と注記されている。おそらくこれも現在のA貝塚の出土品であろう。(高橋)

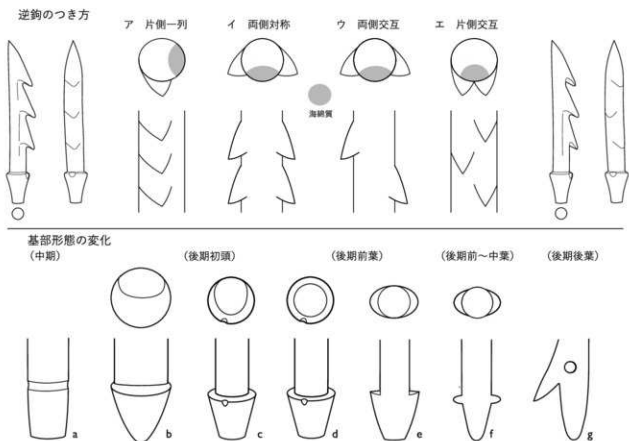
## 三 銚頭について

今回報告した資料のうち、銚頭に分類されるのは紙箱に入っていた3点である(第2図1、3、写真2、1、3)。第2図1は「稱名寺貝塚」の注記をもつが、地点は記されていない。2・3は注記をもたず、箱から称名寺貝塚出土の可能性があると判断した資料である。林氏は昭和二四年一月に赤星氏によるA貝塚の調査に参加し、三月には個人で発掘を行っている(千葉二〇一五)。また昭和二六年には吉田格氏によるB貝塚の調査にも参加している。林氏による称名寺貝塚発掘資料は、個人でA貝塚を調査した時の出土品である可能性が高い。

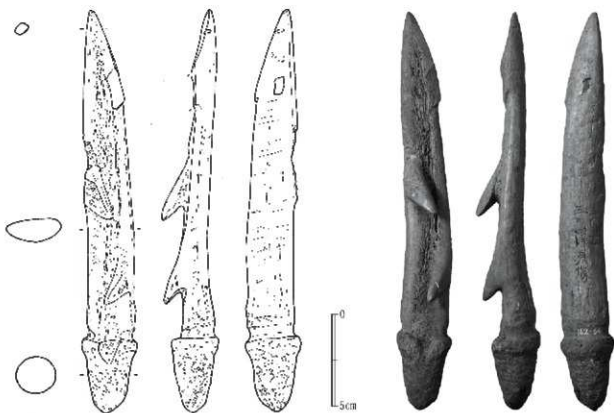
縄文時代の関東地方の銚頭は、基本的には雄形・鉤引式に分類される。

第1表 称名寺貝塚採集骨角器 属性表

図番号	器種	状態	素材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考	目録番号	資料番号
林園治氏旧蔵資料										
1	銚頭	頭部欠	鹿角一角座骨	112	32	30	65.1	紙箱入、注記「稱名寺貝塚」	—	—
2	銚頭	基部破片	鹿角	31	21	15	9.8	紙箱入	—	—
3	銚頭	基部(切断痕)	鹿角	61	21	12	5.7	紙箱入	—	—
4	釣針?	頭部破片	鹿角	37	12	6	1.6	紙箱入	—	—
5	釣針?	未成品?	不明	22	13	3	0.6	紙箱入	—	—
6	針	頭部破片	鹿角骨	32	10	6	1.3	紙箱入	—	—
7	刺突具	先端部破片	鹿角	32	7	7	1.2	紙箱入	—	—
8	有尾刺突具	ほぼ定形	鹿角	67	10	8	3.5		142-75	CX0000360
9	有尾刺突具	定形	鹿角	65	9	6	2.5		142-77	CX0000362
10	有尾刺突具	定形	鹿角骨?	53	8	6	1.3		142-78	CX0000363
11	有尾刺突具	定形	鹿角	49	9	4	1.6		142-81	CX0000366
12	逆鉤付刺突具	基部欠	鹿角	59	12	8	3.7		142-79	CX0000364
13	刺突具	先端部破片	鹿角	72	13	8	5.3		142-80	CX0000365
14	不明	摩耗している	鹿角骨	57	15	9	6.1		142-76	CX0000361
15	針	定形	シカ中手足骨	113	18	5	7.6		142-83	CX0000368
16	垂飾?	定形	鳥骨	36	9	7	1.9		142-85	CX0000370
17	垂飾	定形	サメ椎骨	25	24	5	1.3		142-84	CX0000369
18	磨製刃器	一部欠	イノシシ下顎犬歯	69	20	5	7.9		142-82	CX0000367
19	貝輪	定形	イタボガキ	99	79	12	45.8	注記「稱名寺門内 昭和二〇(十二)二四」	152-16	CX0000432
20	貝輪	未成品	イタボガキ	101	69	9	39.6		152-17	CX0000433
21	貝輪	未成品	イタボガキ	109	81	16	80.4	注記「稱名寺」	152-15	CX0000431
22	貝刃	定形	カガミガイ	59	66	16	25.1		152-27	CX0000443
23	貝刃	定形	カガミガイ	65	71	16	28.8		152-26	CX0000442
赤星直忠氏旧蔵資料										
24	有尾刺突具	定形	鹿角	48	8	7	2.4		142-5	CX0000290
25	へら状製品	ほぼ定形	イノシシ下顎犬歯	84	17	4	6.6		142-6	CX0000291



第6図 鈎頭の形態模式図



第7図 ミツ沢貝塚採集鈎先 (当館蔵)  
CX0000349 (2-143-65)

すなわち、基部を柄の先端に設けたソケットに差し込む装着方法で（鋸頭本体にはソケットを設けない）、獲物の体内に引っかかるための逆鉤をもつ。中期から後期の関東地方西部の鋸頭にみられる逆鉤のつき方と基部形態を模式的に示したのが第6図である。

鋸頭の逆鉤のつき方は、両側／片側と分類されることが多い。しかし称名寺貝塚においては独特の逆鉤配置をもつタイプが存在するため、これを含めて四つに分類した（第6図上段）。片側一列（ア）のタイプは、縄文時代中期からみられ、称名寺貝塚からも出土する。小型の鋸頭では主体を占める。両側対称（イ）となる資料はこの時期・地域にはあまりみられず、逆鉤の位置をずらして両側交互（ウ）になるのが一般的である。片側交互（エ）は、B貝塚からまともな出土したタイプで、一段ごとにずれた位置に逆鉤が付いている。今回報告した資料はいずれも逆鉤部を残していないが、軸部の断面形などから考えて、1は片側交互（エ）、2・3は両側交互（ウ）だったと考えられる。

鋸頭の基部は、柄への固定と離頭に関わる部分であり、繫索が結びつけられる索肩（ないし索溝・索孔）もこの位置に設けられる。縄文時代中期においては、基部は板状で索溝をもつ（第6図下段a）。称名寺B貝塚では端部に平面が作りだされて逆円錐台になる（同c・d）。索肩は浅く、繫索（鋸繩）を通すための挟りが入る。基部の加工は丁寧である。今回報告した資料のうち、1はb、2はおそらくd、3はeに相当する。

1の基部形態bは、大型で基部端が鈍く尖り、軸の根元に段をもつ。これは称名寺A貝塚出土例（金子二〇〇九a、第52図1・3）と共通する特徴であり、他の地点からは出土していない。林氏の調査歴を考えると1もA貝塚出土である可能性が高く、称名寺式古く中段階に位置づけられる。2の基部形態dはB貝塚とC貝塚から出土しており、称名寺式新

段階から堀之内式にかけてのものだと考えられる。3の基部形態eは、これまで称名寺貝塚からは出土例が知られていなかったもので、後期前葉・堀之内式期に位置づけられる。

称名寺A貝塚出土と考えた1は、B貝塚における「大型鋸」よりもさらに一回り大きく、角幹部から角座骨にかけての部分を利用する素材取りが特徴的である。落角ではなく狩猟による獲物の角を利用していたことを示している。このような素材取りの類例は少ないが、三ツ沢貝塚や千葉県余山遺跡の出土資料（金子二〇〇九b）にも確認できる。

三ツ沢貝塚例は同じく林園治氏の採集による神奈川県立歴史博物館蔵品で、全長二・二cmを測る大型品である（第7図）。逆鉤は「片側交互」（エ）の配置であるが、模式図に示したよりもさらに内側に巻きこむ。軸の根元はややくびれ、索肩には大きな挟りが入る。基部の組織が粗いことから、角座骨を利用したものと報告した（高橋二〇一一）。三ツ沢貝塚例は、基部形態や素材取りなどがA貝塚例と共通する一方、索肩の挟りをもち、軸下部の段がない点などで異なっている。型式学的には、bとcの中間、すなわちA貝塚とB貝塚の資料群の中間に位置付けられるだろう。

1の基部のサイズは三ツ沢貝塚例と比較しても遜色なく、やはり二〇cmクラスの超大型品だった可能性もある。特徴的な素材取りの目的は、より大きな鋸頭を製作するためだろう。角座骨も含めれば、より長い原材が得られるからである。片側交互の逆鉤配置も、緻密質の部分を利用してなるべく大きな逆鉤を作りだすためと考えることができる。つまり称名寺式古く中段階において、より大きな鋸頭を製作するために、素材取りや逆鉤の配置が工夫されていたのである。

称名寺式期の漁具については、系譜を他地域に求める必要はなく、東

京湾岸域において中期の漁具をベースに独自に発達したものと考えられる(金子二〇〇九a、高橋二〇一六)。今回新たに報告した資料により、その成立段階の様相をより具体的に明らかにすることができた。ただし、中期後半の銛頭からの変遷は必ずしもスムーズなものではない。この点については、より大型の銛頭を製作するために素材取りや逆鉤の形状などが急激に変化したものと考えているが、なお検討の余地が残されている。(高橋)

おわりに

称名寺貝塚は古くから存在が知られ、多くの研究者により調査が行なわれていたことから、出土品は各地に分散して存在し、その全貌を把握するのは困難な状況であった。最近になり、それらの再整理が進み遺跡の詳細に踏み込むことが出来るようになってきた(横浜市歴史博物館編二〇一六など)。

当館の所蔵する資料についてはこれまでに土器、土製品の、今回は骨角器の報告を行なった。今後は石器や動物遺体等の整理、分析も継続して行なっていく予定である。(千葉)

謝辞

本稿をまとめるにあたり石井寛氏、吉川久雄氏、上奈穂美氏、豊原照司氏のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 金子浩昌 二〇〇九a「神奈川県横浜市称名寺貝塚出土の骨角器の形態と吉田格編『年』」『東京国立博物館蔵骨角器集成』東京国立博物館
- 金子浩昌 二〇〇九b「千葉県銚子市余山貝塚出土骨角器の研究」『東京国立博物館蔵骨角器集成』東京国立博物館
- 金子浩昌・忍澤成視 一九八六「骨角器の研究 縄文編Ⅰ・Ⅱ」慶友社
- 高橋 健 二〇一一「縄文時代漁具の研究」『横浜市歴史博物館調査報告』七
- 高橋 健 二〇一六「称名寺貝塚の骨角製漁具」『称名寺貝塚と称名寺式土器』シンポジウム資料集
- 千葉 毅 二〇一五「神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料―林國治氏、小林小二郎氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚集資料―」『神奈川県立博物館研究報告(人文科学)』第四十二号 神奈川県立歴史博物館
- 横浜市歴史博物館編 二〇一六「称名寺貝塚 土器とイルカと縄文△」『横浜市歴史博物館 物産』
- 吉田 格 一九六〇「称名寺貝塚調査報告書」『武蔵野郷土館調査報告書』武蔵野郷土館

本稿は、高橋が受けた公益財団法人三菱財団平成二十七年人文科学研究助成(神奈川県横浜市称名寺貝塚の考古学的研究)による研究成果の一部である。

神奈川県立歴史博物館所蔵横浜市称名寺貝塚

採集土器の胎土分析および赤色顔料分析

建石 徹  
(文化庁)  
 降幡 順子  
(宮内庁考古研究所)  
 千葉 毅

【キーワード】

称名寺貝塚 称名寺式土器 胎土分析 赤色顔料分析 縄文土器

【要旨】

神奈川県立歴史博物館が所蔵する横浜市称名寺貝塚採集縄文土器の一部について、胎土分析および赤色顔料分析をおこなった。胎土分析を実施した十三点の土器片すべてについて、南関東周辺地表層地質の一般的な特性が認められた。この傾向は、先に実施した同貝塚出土土器（横浜市ふるさと歴史財団所蔵分）の胎土分析の結果（建石・河西・新免・降幡二〇一六）ともよく調和する。赤色顔料分析では、二点から鉄系赤色顔料が検出された。本資料群が帰属する縄文時代中期末から後期初頭は、日本列島における水銀米利用の開始期にあたるが、当該資料については水銀米でなく、鉄系赤色顔料が用いられていた。

はじめに

神奈川県立歴史博物館では横浜市称名寺貝塚（第1図）採集の縄文土器や石器等の考古資料を収蔵している（千葉二〇一五）。この度、縄文土器の一部を対象として胎土分析および赤色顔料分析を実施したので報告する。

本研究で対象とした資料の所属時期である縄文時代中期末から後期初頭の関東地方においては、在地の土器型式が存在する地域に非在地の土器型式が流入し、在地の土器型式との影響関係の中で変化していくことが指摘され、注目されてきた（石井一九九二、鈴木二〇一〇など）。これらの動向を踏まえ、筆者らのうち千葉は、関東地方における当該期土器群を再整理し、特に在地の土器型式としての加曾利E式系土器の変遷を確認した（千葉二〇一三）。

また建石と降幡らは、当該期土器群の胎土分析や赤色顔料の材料分析等の事例を蓄積してきた（建石・降幡二〇一四、建石・新免・降幡二〇一六、建石・河西・新免・降幡二〇一六など）。

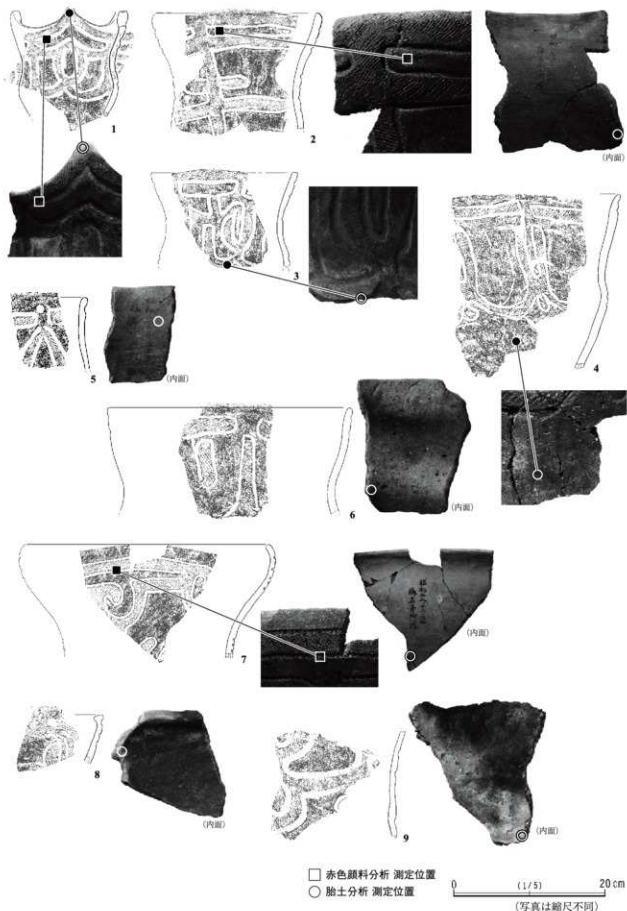
本研究では、当該期における人の動きや物資の交換、地域間関係等の実態をより具体的に解明するための基礎情報を蓄積することを第一の目的とする。

一 資料（試料）

分析に供した資料は、当館の所蔵する称名寺貝塚採集縄文土器十三点（第2・3図）で、一九四九年、一九五〇年に林

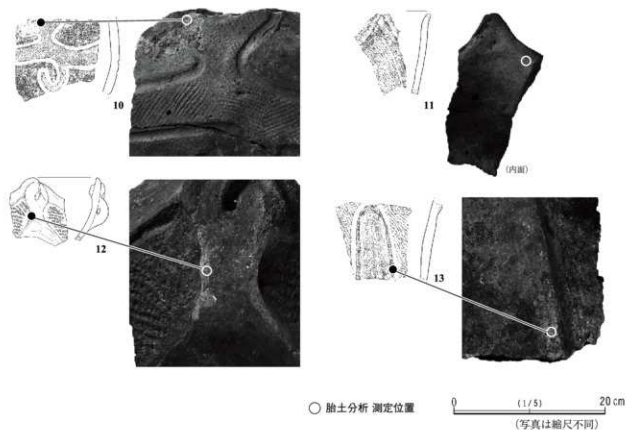


第1図 称名寺貝塚の位置



第2図 分析資料および測定位置 (1)





第3図 分析資料および測定位置 (2)

第1表 分析資料一覧

番号	胎土分析	顔料分析	型 式	千葉 (2015) での番号
1	○	○	称名寺式	第2図1
2	○	○	称名寺式	第4図17
3	○		称名寺式	第2図2
4	○		称名寺式	第4図16
5	○		称名寺式	第2図3
6	○		称名寺式	第2図4
7	○	○	称名寺式	第4図20
8	○		称名寺式	第8図38
9	○		称名寺式	第3図7
10	○		称名寺式	第4図21
11	○		加曾利E IV or V式	第8図50
12	○		加曾利E IV or V式	第8図51
13	○		加曾利E IV式	第5図24

國治氏により採集されたものである。1～10は縄文時代後期初頭の称名寺式土器である。1～6は口縁部に窓枠状区画の変化した文様が描かれる。7～10はJ字状の文様が口縁部に描かれる。7を除く九点は称名寺式古段階に比定される。7については、文様構成から中段階に下る可能性が高い。11、12は加曾利E IV式または「加曾利E V式」(石井一九九二)と考えられるが、判断は難しい。13は隆帯脇の処理から加曾利E IV式と考えられる。

全点を胎土分析に供し(一)、器面に赤色顔料が塗布された可能性を考えた1、2、7を赤色顔料分析に供した(二)。

## 二 胎土分析

### (1) 分析方法

a. 蛍光X線分析による化学組成の検討

胎土分析に用いる各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光X線分析(非破壊法)を用いた。測定条件を以下に示す。

分析装置…エタックス製蛍光X線分析装置EAGLEIII、線源ターゲット…ロジウム(Rh)、管球(電圧…三〇kV、電流…一〇〇mA)、X線照射径…五〇 $\mu$ m $\phi$ 、測定雰囲気…真空、測定時間…三〇〇秒、一資料の測定回数…三回から五回、定量分析の計算法…F/P法、標準試料…JGI-I他八試料を使用。

土器胎土の主成分元素と考えられるケイ素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)、マンガン(Mn)の八元素の測定をおこなった。ナトリウム(Na)は土器胎土の主成分元素と考えられるが、非破壊分析法では定量性が悪いことが予想されるため、本分析では扱わなかった。

分析に際しては機器に備えられたCCDカメラの画像観察により、X線照射範囲(分析範囲)に大粒の粒子がなるべく含まれないよう配慮した。したがって本法では、土器胎土(粘土と混和材の混合物と仮定)のうち粘土部分を主な対象とすることとなる。X線照射範囲の決定に際しては、あわせて、なるべく平滑な面にX線を照射することにも心がけた。

#### b. 肉眼観察等による大粒粒子の観察

地名寺貝塚出土縄文土器(横浜市ふるさと歴史財団所蔵分)について肉眼観察等により主に胎土中の大粒粒子(混和材に由来するものが多いと仮定)の特徴を記載した河西学(二〇一六)の研究成果に基づき、本分析では特に堆積岩・スコリア・変質火山岩、花崗岩及びその造岩鉱物(石英・雲母類等)等の有無について注目し、肉眼及びルーペによる観察をおこなった。

#### (2) 分析結果

第2表に蛍光X線分析により得られた分析資料の胎土の化学組成(八元素)を示した。いずれも岩石学の慣例に従い、酸化物として表記し、八元素の酸化物の総和を百とした際の百分率を示した。また同じ表に大粒粒子の観察結果を、特に上記の岩石、鉱物等に注目して示した。

#### a. 蛍光X線分析の結果

SiとFeの相関については、 $S_{Fe}$ が五三・二一六四・六wt%、 $F_{Si}$ が六九・一七・九wt%で、概ね負の相関が認められるが、13のように、 $S_{Si}$ が比較的高いにも関わらず、 $F_{Fe}$ がそれほど低くない(二〇・四wt%)ものも認められる。

$Al_2O_3$ は、一八・八一・二六・三wt%。Alは原料の風化(II粘土化)の程度により増加することが知られている。

$TiO_2$ は、一・一一一・二六wt%。

$MgO$ は、〇・七一一・二〇wt%。13は二・〇wt%と比較的多い。

胎土の地球化学的特性を検討するためには本来はCaとKの相関についても検討すべきところであるが、本分析に供した資料の多くがCaOが五wt%を超える高濃度(1, 3, 4, 7, 10, 11, 13)で、しかもこれらに $K_2O$ との優位な相関( $CaO$ が増えたと $K_2O$ が減り、 $CaO$ が減ると $K_2O$ が増える)が認められないため、これらの $K_2O$ の含有量は、胎土に由来するものに貝塚の埋蔵環境によりCa成分が付着・吸着した影響が加わったものと判断した。 $K_2O$ は〇・五一一・九wt%である。3, 4, 9, 12は他より多い(一・四wt%以上)。

$MnO$ は、検出限界以下一〇・三wt%。8, 12は特に少なく(検出限界以下)、2, 4は特に多い(〇・二wt%以上)。

本法における胎土の分類の結果、南関東周辺の表層における地球化学

第2表 分析結果 (wt%)

番号	千葉(2015)での番号	型式等	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MgO	CaO	K <sub>2</sub> O	MnO	主な大粒粒子	赤色顔料
1	第2図1	称名寺式	56.5	1.3	18.8	12.5	0.8	8.7	1.2	0.1	堆積岩、スコリア、雲母類	鉄系
2	第4図17	称名寺式	53.2	1.1	26.3	14.2	1.4	2.9	0.7	0.2	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
3	第2図2	称名寺式	56.3	1.5	21.0	12.4	1.1	5.8	1.7	0.1	スコリア、堆積岩	
4	第4図16	称名寺式	49.7	1.3	19.6	17.9	1.4	7.8	1.9	0.3	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
5	第2図3	称名寺式	55.8	1.7	22.6	14.4	0.9	3.4	1.1	0.1	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
6	第2図4	称名寺式	59.1	1.3	23.0	11.3	1.1	3.0	1.2	0.1	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
7	第4図20	称名寺式	60.5	2.1	21.3	7.9	0.7	6.7	0.7	tr	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	鉄系
8	第8図38	称名寺式	61.1	2.0	20.6	10.3	1.1	4.1	0.7	tr	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
9	第3図7	称名寺式	64.6	1.5	21.5	6.9	1.2	2.7	1.5	0.1	堆積岩、石炭、雲母類、スコリア	
10	第4図21	称名寺式	56.6	1.6	21.3	11.5	0.9	6.8	1.2	0.1	堆積岩、スコリア、変質火山岩類	
11	第8図50	加曾利EIVorV式	57.7	2.5	20.4	11.2	0.6	6.9	0.5	tr	堆積岩、スコリア	
12	第8図51	加曾利EIVorV式	62.7	1.4	23.1	7.2	0.7	3.5	1.4	tr	堆積岩、スコリア	
13	第5図24	加曾利EIV式	52.9	2.6	22.9	10.4	2.0	8.0	1.1	0.1	スコリア、変質火山岩類	

tr: 検出限界以下

的特性(塩基性寄り)の傾向と異なり、他の資料とは識別される可能性がある資料は次の通りである(括弧内の「多」「少」は資料群における相対的なもの)。

- 7 称名寺式(Si多、Fe少、ただしK少)
- 8 称名寺式(Si多、ただしFe多、K少)
- 9 称名寺式(Si多、Fe少、K多、Mn少)
- 12 加曾利EIV式あるいはV式(Si多、Fe少、K多、Mn少)

これらの資料で認められたSiが多い、Fe・Mn(主に有色鉱物等に由来)が少ない、Kが多い(主に長石類に由来)等の傾向は、いずれも他の資料群と比べて酸性寄りの胎土であることを示唆し、富士火山等、塩基性寄りの地球化学的特性を持つ給源等の影響を強く受けた南関東周辺の表層の一般的な特性と

は異なるものといえる<sup>(3)</sup>。

7、8は、上記の通り大枠で酸性寄りの胎土をもつと考えられるが、Feが多い(8)、Kが少ない(7、8)等の傾向は、これらの特性と異なるもので、一般的には塩基性寄りの特性といえる。これらの資料は、何らかの要因で異なる特性の材料が混合された可能性がある。

上記以外の資料は、いずれも比較的塩基性の特性を示すもので、南関東周辺の表層地質の地球化学的特性と調和するものといえる。

#### b. 大粒粒子の観察結果

いずれも堆積岩、スコリア、変質火山岩等を含み、南関東周辺の表層地質の一般的な特性と調和する傾向を示した。9は花崗岩の造岩鉱物である石英、雲母類等を他より含むが、堆積岩、スコリアが認められることから、南関東周辺の表層地質の範囲で考えた。

#### (3) 胎土の総合的な検討

蛍光X線分析の結果と大粒粒子の観察結果を総合して検討する。今回分析に供した十三点の資料のうち、蛍光X線分析の結果(主に胎土の粘土部分の検討)と大粒粒子の観察結果(主に胎土の混和材部分の検討)のいずれもが(南関東周辺の表層地質の一般的な特性(塩基性寄り)と異なる結果を得た資料はなかった。

蛍光X線分析の結果、南関東周辺の表層地質の一般的な特性と異なる傾向を示した四点は、いずれも大粒粒子の観察では南関東周辺の表層地質の一般的な特性が認められた。このうち7、8は、蛍光X線分析の結果、一部の元素の含有量に酸性寄りの特性とは矛盾する特性が認められており、異なる特性の材料が混合された可能性が予想されたが、大粒粒子の観察結果を踏まえれば、その可能性は俄然高まったといえる。

### 三 赤色顔料の材料調査

#### (1) 分析方法

縄文時代に利用された赤色顔料はベンガラ(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)と水銀朱(辰砂HgS)の二者が知られる。資料がそのいずれであるのかを確認することを目的として、器面(外面)の赤色部と、顔料の付着が認められない内面等の胎土について定性分析をおこなった。

分析にはエネルギー分散型蛍光X線分析(非破壊法)を用いた。測定条件を以下に示す。

分析装置…エタックス製蛍光X線分析装置EAGLE III、線源ターゲット…ロジウム(Rh)、管球(電圧…三〇kV、電流…一〇〇μA)、X線照射径…五〇μm、測定雰囲気…真空、測定時間…三〇〇秒。

赤色部の分析に際しては、機器に備えられたCCDカメラの画像観察により、X線照射範囲に赤色部が多く含まれるよう配慮した。

#### (2) 分析結果

各資料の赤色部と胎土の蛍光X線スペクトル図を第5図に示した。

通常、土器胎土は一定量のFeを含むが、1、7は赤色部と胎土のFeおよびSiの含有量(カウント数)の比に優位な差が認められた。水銀朱の主成分であるHg、Sは認められなかった。いずれの資料の赤色部もベンガラ等の鉄系赤色顔料によるものであると考えられる。2は赤色部と胎土のFe含有量比に有意な差が認められなかった。水銀朱の主成分であるHg、Sも認められなかった。赤色部は胎土の酸化状態の違い等、鉄系赤色顔料に関わらない可能性が高い。

分析結果の概要を第2表に示した。

### 四 考察

胎土分析に供した十三点は、いずれも南関東の表層地質の特性と一致する特性を示した。この傾向は、先に実施した称名寺貝塚出土土器(横浜ふるさと歴史財団所蔵分)の胎土分析の結果ともよく調和するものといえる(建石・河西・新免・降幡二〇二〇)。

9は破片資料であるため文様構成の詳細は不明だが、本資料群の中でも「西から来た」可能性があると予想された資料であった。本資料は、二段のJ字状の文様がやや左右の間隔を狭くして描かれるものと考えられ、称名寺式第三段階に比定される可能性が高い。一方、文様描出には称名寺式の初期に観察される手法の特徴―太く深い沈線やそれに伴う内面の突出、節の細かい縄文等―を残しており、西日本方面との関わりを窺わせる型式学的特徴を持つ。このような資料の胎土分析の結果が太枠で他の資料と同様の在地的な傾向を示したことは興味深い。

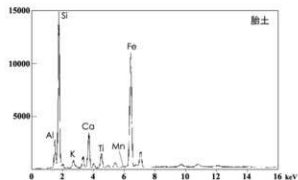
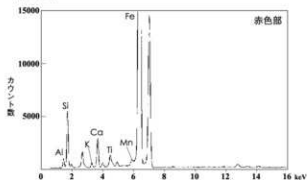
また、1、7には鉄系赤色顔料が塗布されていることが明らかとなった。後期初頭は日本列島において水銀朱利用の開始期にあたることから知られている。近年、関東における当該期の水銀朱使用例が蓄積されつつあるが、それらはいずれも西日本に型式学的な故地をもつ中津式系土器に知られる(第4図、建石・降幡二〇一四など)。これらは土器あるいは顔料が西日本から



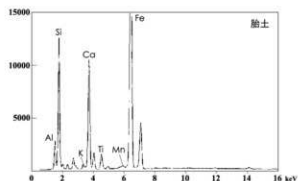
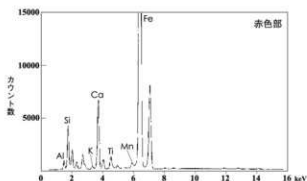
第4図 水銀朱の塗布が確認された綾川東遺跡出土中津式系土器(株式会社ダイサン編2014より)

称名寺貝塚採集土器 (番号は第2図による)

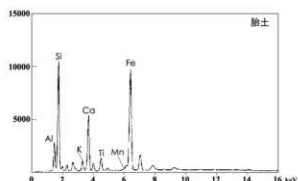
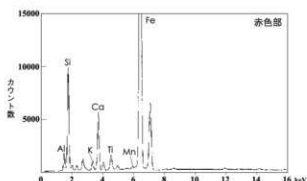
番号：1



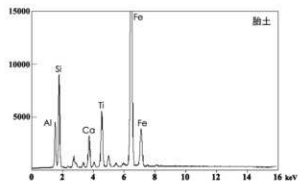
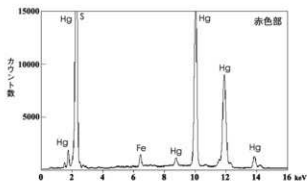
番号：2



番号：7



東京都緑川東遺跡 敷石遺構 SV1 出土土器 (株式会社ダイサン編 2014 より、一部改変)



第5図 称名寺貝塚採集縄文土器および緑川東遺跡出土土器の蛍光X線スペクトル図 (赤色部と胎土の比較)

購入された可能性が高い。それに対し、7は文様構成、文様描出技法等を見て、称名寺式の初期の特徴は失われており、関東地方での製作技法によっているとみてよい。ほぼ同時期の緑川東遺跡出土中津系式土器には水銀朱が利用されている一方で、称名寺式の本資料群には中期以前から関東地方で利用されている鉄系赤色顔料が用いられていることは、当該期の土器製作者と材料調達との相関、人の動きや物資の交換、地域間関係等を考える上で非常に示唆的である。今後は周辺地域も含めて事例蓄積をおこない、さらに議論を進めていきたい。

本研究を実施するにあたり、河西学氏、石井寛氏、高橋健氏、玉田芳英氏、二宮修治氏、新免歳晴氏および称名寺式土器研究会の皆様にご協力をおこしいただきました。記して感謝申し上げます。

## 註

- (1) 当館所蔵の称名寺貝塚採集資料のうち、縄文土器については千葉(二〇一五)で報告をおこなった。土器の型式学的検討等の詳細はそちらを参照されたい。
- (2) 筆者らの近年の研究(たとえば石・降幡(二〇一四)では、胎土中の主成分八元素に、産地分析の際に有効な指標元素となることが知られるストロンチウム(Sr)、ルビウム(Rb)、ジルコニウム(Zr)の微量成分三元素を加えた十一元素の組成を検討してきた。本研究における分析条件では微量成分三元素の定量が困難であったため、主成分八元素の定量による検討をおこなう。
- (3) 横浜周辺に同様の特性をもつ粘土等が全く産出しないということではない。

## 引用文献

- 石井 寛 一九九二「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第九冊 横浜市ふるさと歴史財団
- 河西 学 二〇一四「緑川東遺跡出土土器胎土の肉眼による予察的観察」『東京都国立市緑川東遺跡―第二十七地点―介護老人保健施設設立および増築工事に

伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』国立市教育委員会  
河西 学 二〇一五「緑川東遺跡出土縄文土器の岩石学的手法による胎土分析」『緑川東遺跡―第二十八地点―株式会社ダイサン』

河西 学 二〇一六「縄文時代中期末～後期初頭土器の肉眼観察からみた胎土の特徴」『平成二十七年年度三葉財団人文科学研究助成企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム 称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館  
株式会社ダイサン編 二〇一四「東京都国立市緑川東遺跡―第二十七地点―介護老人保健施設設立および増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」国立市教育委員会

鈴木徳雄 二〇一七「称名寺式における異系統土器の共存―異系統土器の移入と変容の過程」『異系統土器の出会い』今村宮爾編 同成社

石井 寛・降幡順子 二〇一四「緑川東遺跡敷石遺構S.V1出土中津系土器に付着した赤色顔料の材料調査」『緑川東遺跡出土縄文土器の胎土分析』東京都国立市緑川東遺跡―第二十七地点―介護老人保健施設設立および増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』株式会社ダイサン編 国立市教育委員会

石井 寛・降幡順子 二〇一五「緑川東遺跡出土縄文土器の胎土分析(Ⅱ)」『緑川東遺跡―第二十八地点―株式会社ダイサン』

石井 寛・降幡順子・河西 学 二〇一五「土器胎土分析の総合的な考察」『緑川東遺跡―第二十八地点―株式会社ダイサン』

石井 寛・河西 学・新免歳晴・降幡順子 二〇一六「土器胎土分析の総合的な考察」『平成二十七年年度三葉財団人文科学研究助成企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム 称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館

石井 寛・新免歳晴・降幡順子 二〇一六「縄文時代中期末～後期初頭土器の化学組成からみた胎土の特徴」『平成二十七年年度三葉財団人文科学研究助成企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム 称名寺貝塚と称名寺式土器』横浜市歴史博物館

石井 寛 二〇一三「関東甲信越地方における称名寺式土器と加賀利E式土器の混在の様相」『完新世の気候変動と縄文文化の変化』公開シンポジウムⅣ 関東甲信越地方における中期～後期変動期Ⅳ・3Kaイベントに関する考古学現象

三田 予福集「同実行委員会」  
千葉 毅 二〇一五「神奈川県立歴史博物館所蔵の考古資料―林國治氏、小林小三郎氏旧蔵の横浜市称名寺貝塚採集資料」『神奈川県立歴史博物館研究報告(人文科学)』第四十二号 神奈川県立歴史博物館

## 山北中学校遺跡出土の武蔵型板碑について

鳥居和郎

### 【キーワード】

武蔵型板碑 緑泥片岩製板碑 山北中学校遺跡 河村氏

### 【要旨】

中世の関東では緑泥片岩で造られた武蔵型板碑が広く流通した。中世の神奈川県域でも同様であるが、その分布は県の東部に多く、西に行くにしたがって減少する傾向にあり、箱根町、南足柄市、小田原市などの県西部ではほとんど存在しない。ところが、昭和二十六年（一九五二）に県の西端に位置する山北町で、多数の武蔵型板碑が出土しており、武蔵型板碑の流通を考える上で重要な事例であるが、これまでその存在はほとんど知られていなかった。本稿は神奈川県内の板碑分布の概要を述べ、山北中学校遺跡の板碑の紹介を行うものである。

はじめに

板碑とは板状の石材で作られた卒塔婆で、五輪塔や宝篋印塔などと共に中世の代表的な信仰関係の石造物として全国各地で造られた。関東地方では埼玉県の秩父地方や比企郡小川町などで産出する緑泥片岩で造られた武蔵型板碑という形式のものが多く、関東一円に流通した<sup>1)</sup>。

緑泥片岩は板状に剥離する性質があるため板碑型への加工が比較的容易で、また、緑色の色彩は美しく、この点でも信仰具に適していた。平成二六年、埼玉県小川町にある武蔵型板碑の石材採掘や板碑型への加工を行っていた下里・青山板碑製作遺跡が国指定史跡に指定されたことは記憶に新しい。

武蔵型板碑の形は板状の石材の頭部を山形に作り、その下部に二段の切り込みを入れ、塔身の中央に供養の対象となる仏像や種子、その下方に願文、造立趣旨、年紀などの銘を刻む。板碑の大きさは五メートルを超える大型のものから二〇センチメートル程の小型のものもあるが、五〇センチメートルから七〇センチメートル程度のものが多い<sup>2)</sup>。

旧武蔵国域で確認された武蔵型板碑は五万基に及ぶとされるが、周辺の地域を加えるとその数はさらに多く、中世に造立された板碑の総数はどの位になるか見当もつかない。このような生産量の多さとともに造形的にも優れているところから、武蔵型板碑はわが国の板碑の代表的な存在となっている。

神奈川県域の板碑では、数量としては武蔵型板碑が一番多く見られるが、その分布は一概ではない。大まかにいえば県東部は多いが、西部は少なく、特に相模川以西では極めて少ない。しかし、本県西端に位置する山北町で、昭和二十六年（一九五二）に複数の武蔵型板碑が出土してい



たのである。文献史料の少ない中世の山北地方や同地を支配した河村氏に関する資料として、また、武蔵型板碑の流通を考える上でも重要な資料であるが、これまでその存在は広く知られることがなかった。

当館では、本年二月、特別展「石展—かながわの歴史を彩った石の文化—」を開催し、山北中学校遺跡出土の板碑の展示を行ったが、会場の制約もあり武蔵型板碑は二基の展示にとどまった。本稿では資料の重要性に鑑みて、現在、確認できる山北中学校遺跡から出土した板碑を破片を含め紹介をおこないたい。なお、本文末尾にそれらの目録を掲げた。

#### 一 神奈川県域の板碑の分布と武蔵型板碑

最初に神奈川県域に分布する板碑と石材について簡単に述べておく。本県で製作された板碑は「相模型板碑」などと称されることがあるが、武蔵型板碑のように定型的な形があるわけではなく、箱根山周辺で産出する安山岩を用いて製作された板碑を総称するもので、用語としては甚だ曖昧と言わざるを得ない。また、安山岩の中でも、小田原市根府川周辺で産出する根府川石製のもの、石質に特徴を持つため区別することが多い。異外の石材としては、黒雲母片岩製の常総型板碑、緑泥片岩製の武蔵型板碑がある。

次にこれらの石材ごとの使用状況を簡単に述べてみる。

#### (1) 根府川石

小田原市根府川周辺で産出する安山岩で板状節理を持つ。鎌倉時代末から南北朝時代に板碑の石材として利用された。現在でも石碑などに見られていることが多い。根府川石製の板碑は、現在、六基確認されており、いずれも小田原市域に伝来、あるいは出土するため、きわめて地

域的に展開した板碑といえる。製作時期は居神社社の文保元年（一三二七）銘が最も古く、小田原城御用米曲輪遺跡から出土した康永元年（一三四二）銘が最も新しい。

#### (2) 安山岩

箱根山などで産出する安山岩を板碑の石材として利用したもので、もともと板状の石材ではないため板状に整形して利用したものや、自然石に近いものまで様々な形のものがある。

整形が施された板碑の中でも大型のものは、徳治三年（一三〇八）銘の鎌倉市長谷寺の宝篋印塔陽刻板碑で、全高はおよそ二・七メートルある。全体を丁寧に板状に整形し、塔身には宝篋印塔がレリーフされている。長方形の塔形とともに陽刻で表現する方法は当時盛行していた武蔵型とは異なるものである。

南足柄市沼田の西念寺には、武蔵型板碑の特徴をもつ鎌倉時代末期から南北朝時代とみられる阿弥陀三尊種子板碑がある。頭部は山形で、二段の切り込みを入れ、その下に頸部を表現した印刻線を持つ。確認できる高さは七三・五センチメートル、基部の幅は三〇センチメートル程度である。

前述した二基ほどの大きさではなく小型のものであるが、鎌倉市長谷寺には五輪塔を陽刻したものが二基ある。また、山北中学校遺跡からも形状が似る大日如来の種子を陰刻した板碑が出土している（図7）。

あまり加工を施さず、自然石に近い石材を利用した板碑で比較的大型のものとしては、小田原城内に鎌倉から南北朝時代とみられる大日一尊種子板碑が建つ（石材の産地は箱根山周辺とされる）。また、小型のものとして居神社社、玉伝寺などには安山岩の扁平な河原石に五輪塔を線刻、

または陽刻したものが<sup>ある</sup>。

安山岩は五輪塔や宝篋印塔などの石材としての利用は多く、その製品は関東一円に展開したが、板碑に造られることは少なかった。板状に加工する工程が必要となるため、避けられたのであろう。

### (3) 黒雲母片岩(常総型板碑)

筑波山麓の黒雲母片岩で作られた板碑で、横幅のある四角形のものが多いが、神奈川県には武蔵型を模した形のものもある。鎌倉市五所神社にある弘長二年(一二六二)の年紀をもつ俱利伽羅不動板碑。また、同市の光明寺にある年紀銘は判読しがたいが五所神社のものと同時期とされる阿弥陀種子板碑などで、本県内での流通量は少ない。

### (4) 緑泥片岩(武蔵型板碑)

石材の産地は前述したとおりである。神奈川県内で確認される板碑の中では数量的に最も多いが、その分布は多摩川の流域である川崎市域や横浜市域に多く、西部に行くに従って減少する。このことから武蔵型板碑の流通には多摩川の舟運が重要な役割を果たしていたことがわかれる。鎌倉市域にも多いがこれらは海運によっていたとみられ、鎌倉幕府が所在していたため武家の館や寺院が多く、それにとまない板碑の遺立数も多かったのであろう。

このように県内分布の板碑は、地元石材である箱根周辺の安山岩を使用したものもあるが、数量的には少なくその分布も限られている。数量が多いのは緑泥片岩製の板碑だが、西に行くに従ってその数が減るのは、その重量が流通の障壁となったからであらう。

## 二 山北中学校遺跡の武蔵型板碑

昭和二六年、神奈川県山北町の山北中学校の校舎建築にともなう山裾の削平工事の際、中世の墓地在り発見された。発見当時の状況を伝える記録類は存在しないが、複数の板碑とともに、鎌倉時代から室町時代の五輪塔や宝篋印塔、また瀬戸・渥美・常滑・猿投窯の蔵骨器がともに出土した。板碑の内、一基は大日如來の種子が陰刻された安山岩製であるが、それ以外は緑泥片岩製の武蔵型板碑で、いずれも折損や欠損があるが、塔身に彫られた種子からみると確認できるものは阿弥陀三尊種子板碑である。

板碑とともに出土した五輪塔や宝篋印塔は近隣の種徳寺(山北町山北)に移設されており、五輪塔の水輪部を数えてみると五四基分あるため、かなりの規模の墓地であったことがうかがえる。

山北中学校遺跡について、昭和三年(一九五七)に山北地方の文化財調査をおこなった赤星直忠氏は、正応四年(一二九一)銘の一基、乾元二年(一二〇二)銘の一基を銘文の概略とともに簡単に紹介された。日野一郎氏は、『足柄乃文化』第七号で板碑とともに遺跡の概要を紹介されたが、赤星氏の調査同様、発見当時の記録がなく、出土資料も散逸し、しかも発見からかなり時間が経過した時期での執筆ということもあり、遺物の紹介が中心となっているのはやむを得ない。また、板碑研究の蓄積があまり多くなかった時代のためか、遺物の紹介は蔵骨器が中心で、板碑については、乾元二年銘と正応四年銘の武蔵型板碑、そして安山岩製の鎌倉時代末期とされる板碑の紹介にとどまり、その他の板碑については言及されていない。渡辺美彦氏は、『板碑の総合研究2 地域編』で神奈川県を担当され、その中で山北中学校遺跡の武蔵型板碑二基、安山岩製

板碑一基について報告されている。また、平成十二年に刊行された「山北町史」史料編では「山北中学校遺跡」の項で板碑の紹介を行っている。しかし、遺跡の概要説明が中心で、板碑は破片を除き主要な作例の図版は掲載されたが、トリミングされているものもあり、また、銘文や法量などの基本的な情報が割愛されているのは残念である。

管見の限りでは、山北中学校遺跡出土の板碑について述べている刊行物は以上の通りである。

板碑の中で年紀銘が確認できるものは多くはないが、最古のものは目録番号1の正応四年銘である。身部には天蓋の下に蓮台に乗る主尊の阿弥陀如来の種子を、その両脇には観音菩薩と勢至菩薩の種子が彫られる。種子の彫りも堂々としており、鎌倉時代の板碑の特徴が良く出ている。また年紀銘に加えて観無量寿経の偈文の一部が確認できる。上部と下部に折損が見られるのは惜しまれる。

他に造立年が確認できるものとしては、目録番号3、4の乾元二年銘である。これらもいずれも塔身の上部と下部が欠失し、主尊部も現状では確認できないが、3については脇侍として観音菩薩と勢至菩薩の種子が見えるため阿弥陀三尊種子板碑であることがわかる。4については脇侍の右側にあたる部分に観音菩薩の種子があるため、主尊に阿弥陀菩薩の種子を戴く阿弥陀三尊種子板碑と推測できる。これらの板碑は同年の二月と三月の同じ日にちに造られているため、同じ趣旨で造立されたとみられる。

また、年紀は確認できないものの、比較的完形に近い姿を残すものは目録番号2の阿弥陀三尊種子板碑である。塔身の中央部で斜めに折損しているが、中央に蓮台に乗る阿弥陀如来の種子、その下に脇侍としてやはり蓮台に乗る観音菩薩と勢至菩薩の種子を刻む。造立銘、趣旨銘など

は彫りが浅いため判読できない。

目録番号7は緑泥片岩製ではなく、安山岩系の石材を使用した大日一尊種子板碑である。身部には大日如来の種子が彫刻される。本品は素朴な表現ながら武蔵型を模した山形の頭部と二条線を持ち、この板碑の遺立に関わった人々が武蔵型を板碑の典型と見たからであろう。箱根山周辺の安山岩を使用した板碑は県内で数点見られるが、本品はそれらとは異なる石質であるため、今後、石材の産地が確定できると相模国西部の板碑流通を考える上で重要な作例となろう。

このように山北中学校遺跡出土の板碑には十三世紀末から十四世紀初頭の年紀銘があり、年紀が確認できないその他の板碑もほぼ同時期のものとみられる。武蔵型板碑の生産期間からみると、比較的前期のものである。また、流通の面からみても、ある程度の数量が出土した遺跡としては西限に位置するといえる。

中世の山北は河村郷といひ、波多野荘（現神奈川県秦野市域）を本領とした波多野遠義の子、秀高が地名を姓としてこの地を支配していたが、文献史料から河村氏の活動を伝えるものはほとんどない。日野一郎氏も指摘されたが、鎌倉時代の山北でこのような大規模な墓地を営むことができるのは河村氏以外存在しないとみられ、これら板碑は河村氏の信仰や経済、また、中世の山北を考える上で文献史料の欠を補う貴重な資料群といえる。

#### 注

(1) 現在、最古の武蔵型板碑は嘉禄二年（一二二七）の年紀を持つ阿弥陀三尊を刻んだ園像板碑（須賀広板碑・埼玉県熊谷市市南）とされる。神奈川県内では寛元二年（一二四四）の年紀銘を持つ阿弥陀如来種子板碑（横浜市青葉区鴨志田町）で

ある。武蔵型板碑の遺立は十四世紀の後期に最盛期を迎え、その後、若干の増減はあるものの次第に減少し、十七世紀初頭には遺立は行われなくなる。

(2) 特別展図録「板碑」の解説、埼玉県立博物館、昭和五十七年。

(3) 埼玉県教育局生涯学習文化財課の下里、青山板碑製作遺跡の指定に関する発表資料、平成二年。

(4) 特別展「石屋」かながわの歴史を彩った石の文化」主催、神奈川県立歴史博物館、神奈川県立生命の星・地球博物館、会期、平成二年二月六日～三月七日。

(5) 根府川石製の板碑については、「小田原市史」通史編、原始・古代・中世「第二節 相模型の板碑」の中で齊藤彦司氏が紹介しているが、その後、一基新たに発見された。(6) ①文政元年(一二二七) 大日一尊種子板碑、居神社社、②元享二年(一二三三) 阿弥陀一尊種子板碑、居神社社、③建武元年(二三三四)、阿弥陀三尊種子板碑、東京国立博物館所蔵(小田原駅西方の青橋付近出土)、④建武五年(二三三八) 阿弥陀三尊種子板碑、宝金剛寺、⑤康永元年(二三四二) 大日一尊種子板碑、御用米曲輪遺跡出土、⑥年未詳、種子不明板碑、御用米曲輪遺跡出土、以上が根府川石製である。また、「小田原市史」で根府川石とされた「小田原城址公園板碑」は、安山岩ではあるが根府川石ではない。

(6) 前掲(5)と同じ。四〇九頁「五輪塔刻の自然石板碑」参照。

(7) 当該地域の自治体史に記載のある泥片岩製板碑の数量を以下記す。ただし、銘文を中心とした史料編に掲載されている場合、外形に近いものか、破片であるか不明、厚木市域では六四件(破片を含む)、平塚市域で一四基、伊勢原市で破片のみ二宮町で一基、小田原市域で一基である。相模川以西では内陸部の厚木市域を除き、組織的な流通が行われなかったとみられる状況である。根府川石製や安山岩製の板碑が比較的多い小田原市域では、緑泥片岩製板碑は板橋の両覚院に貞和四年(二三四八)銘の破片、宍町時代にされる阿弥陀三尊種子板碑が、「小田原市史」編纂時の調査で確認されたが、伝世品ではなく輸入品の可能性があるとのことである。

(8) 「山北町史、史料編、原始・古代・中世」、二〇〇〇年、「山北中学校遺跡」の項には、日野一郎「中世墳墓の一形態―相模山北における鎌倉時代の墳墓群―」の

記述を採用し「五輪塔は少なくとも二基」とするが、種徳寺にある水輪の數と合わない。二基は完形の石塔の數であろうか。また、山北中学校遺跡出土の石塔とともに種徳寺周辺に所在した五輪塔の残欠などを安置したため數量が増加したのであろうか。

(9) 赤星直忠「山北埋蔵文化財と民俗資料」(神奈川県立文化財調査報告書「第一四集、一九五八年、赤星氏は「正応四年銘」を二基、「乾元二年銘」を一基とされているが、年紀と員數が入れ替わっている。

(10) 日野一郎「中世墳墓の一形態―相模山北における鎌倉時代の墳墓群―」(「古代」第二四二―二五合併号、早稲田大学考古学會、一九五七年、「足船之文化」第七号、昭和三十八年に再掲、「足船之文化」第三十五号に再々掲載。

(11) 坂詰秀一編「板碑の総合研究2 地域編」柏書房、一九八三年

(12) 前掲(8)と同じ。

(13) 神奈川県立生命の星・地球博物館山下浩之氏の示による。

(14) 前掲(2)と同じ。武蔵型板碑の遺立は十四世紀の後期に最盛期を迎え、その後、若干の増減はあるものの次第に減少し十七世紀初頭には遺立は行われなくなる。

(15) 前掲(10)と同じ。

	名称	年紀	縦×横 (cm)	備考
11	板碑破片 (三点)			同一の板碑の破片であるか確定はできない。
10	板碑破片		一七・〇 × 三二・五	
9	板碑破片		二七・〇 × 一七・〇	
8	板碑破片		二六・〇 × 一九・七	石質などから6の破片とみられる。
7	大日一尊種子板碑	確認できない	四五・八 × 一七・八	安山岩製。
6	主尊不詳板碑 (阿弥陀三尊種子 板碑カ)	未詳	四八・七 × 三三・五	塔身下部の大部分を欠失。破片として伝来している8は、 本碑の一部である。
5	主尊不詳板碑 (阿弥陀三尊種子 板碑カ)	未詳	六七・五 × 三〇・〇	塔身上部・下部欠失、右に観音の種子があるため、阿弥陀 三尊種子板碑とみられる。 *主尊部と左側の脇侍は欠失する。左側の脇侍の蓮台は残 り、右側に観音の種子(サク)があることから、主尊は 阿弥陀の三尊種子板碑であろう。
4	主尊不詳板碑	乾元二年 (一三〇二)	八四・五 × 三二・〇	塔身上部・下部欠失。
3	阿弥陀三尊種子板碑	乾元二年 (一三〇二)	六六・〇 × 三三・二	塔身の上・下部欠失、主尊は脇侍から判断した。 *塔身上部が欠失し主尊は不明であるが、脇侍から名称 を判断した。
2	阿弥陀三尊種子板碑	未詳	二二九・〇 × 三二・二	塔身の上・下部欠失、主尊は脇侍から判断した。 *三尊の下部に造立趣旨などの三行の銘文がかすかに見え るが判読はできない。
1	阿弥陀三尊種子板碑	正応四年 (一二九一)	七六・五 × 三二・〇	塔身の山形上部欠失、塔身下部欠失、中央で斜めに折損。 塔身の中央で斜めに折損、塔身の下部右側欠失。 *三尊の下部に造立趣旨などの三行の銘文がかすかに見え るが判読はできない。



図2 阿弥陀三尊種子板碑  
鎌倉時代

(キ  
リ  
ク)  
(サ)  
サ

□ □ □



図1 阿弥陀三尊種子板碑正応四年（一二九一）

(キ  
リ  
ク)  
(サ)  
サ

撰取 念仏 正応 十方 光明

□ □ □ □ □





圖4 主尊不詳板碑（部分）乾元二年（一三〇二）

右志者為慈父聖靈  
 乾元二年三月十八  
 往生極樂也



圖3 阿彌陀三尊種子板碑（部分）乾元二年（一三〇二）

(サク) 志為 [ ] 十  
 (キリク) 乾元二年二月十  
 八日  
 (サ) [ ] 往生極樂也





図7 大日一尊種子板碑 鎌倉時代



図5 主尊不詳板碑（部分） 鎌倉時代



※石質から図6と図8は同一の板碑とみられる。

サ  
ク  
□ □  
五  
年  
八  
月



図6 主尊不詳（阿弥陀三尊種子力）板碑（部分） 鎌倉時代



图 10 板碑破片



图 8 板碑破片 (6の破片)

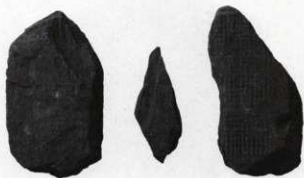


图 11 板碑破片 (三点)



图 9 板碑破片

「神奈川県立博物館研究報告 人文科学」編集等に関する規程

- 一 神奈川県立歴史博物館は、「神奈川県立博物館研究報告 人文科学」（以下、「研究報告」）を、毎年次に一号発行する。
- 二 考古・歴史・美術・民俗などの専門の研究に資することを目的として、「研究報告」は発行する。
- 三 「研究報告」を発行するにあたり、当館研究活動推進会議内に編集委員会を設ける。編集委員は、学芸部長及び学芸員若干名で構成する。
- 四 編集委員会は「研究報告」の編集作業を行い、研究活動推進会議から館長に報告する。
- 五 執筆する資格を有する者は、当館学芸員並びに編集委員会が認めたとする。
- 六 掲載する原稿の種類は、研究論文、研究ノート、資料紹介とする。
- 七 研究論文の掲載にあたっては、査読を行う。
- 八 査読は、外部の専門知識を有する研究者を含む二名以上の査読委員をもって行う。
- 九 査読委員は、編集委員会が適任と判断する者を選し、館長が委嘱する。
- 十 「研究報告」を発行するにあたり、別途、査読や執筆に係る内規を館長が定める。

「神奈川県立博物館研究報告—人文科学—」第43号編集委員会

編集委員 寺岡弘康、丹治雄一、角田拓朗、新井裕美

神奈川県立博物館研究報告  
人文科学 第43号

平成28年12月14日 印刷  
平成28年12月22日 発行

編集／発行 神奈川県立歴史博物館  
(旧神奈川県立博物館)  
横浜市中区南仲通5-60  
電話 045(201)0926  
印刷 株式会社D-サイト

この冊子は再生紙を使用しています。

## BULLETIN OF THE KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

## Cultural Sciences

## No.43

## Contents

<b>Note</b>	
TORII, Kazuo: A Study of Modified Portrait of Hojo Ujitsuna .....	( 1 )
<b>TANJI, Yuichi:</b>	
The Use as Andesitic Building Stones Produced around Hakone Volcano Somma in the Meiji Period and TSUCHIYA, Daijiro, the Entrepreneur of Building Stones .....	(15)
<b>Material</b>	
<b>CHIBA, Tsuyoshi:</b>	
Jomon Pottery of Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History : Objects from Juodomen Site in the HAYASHI, Kuniharu Collection .....	(31)
<b>YOSHINAGA, Akiko and CHIBA, Tsuyoshi:</b>	
Animal Remains Excavated from Kamidai Shellmidden of Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History .....	(81)
<b>TAKAHASHI, Ken and CHIBA, Tsuyoshi:</b>	
Bone, Shell and Antler Implements of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History : Objects from Shomyoji Shellmidden in the HAYASHI, Kuniharu and AKABOSHI, Naotada Collection .....	(101)
<b>TATEISHI, Toru, FURIHATA, Junko and CHIBA, Tsuyoshi:</b>	
Scientific Analysis of Jomon Potteries Excavated from Shomyoji Shellmidden of Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History .....	(113)
<b>JINNO, Yuta:</b>	
Bronze Standing Kannon Bosatsu (SK.Avalokitesvara) at Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History — General List of Extant Works in Kanagawa Prefecture of Zenko-ji Style Triads of Amida (Amitabha) and Attendants — ...	(121)
<b>TORII, Kazuo:</b>	
Musashi-style <i>Itabi</i> (Stone Stupa) Excavated at Yamakita Town, Kanagawa Prefecture, in 1951 .....	(135)
<b>KOIKAWA, Aya:</b>	
Gilt Bronze Placard Dated Eitoku 4(1384) of Private Collection for Dedicated Lotus Sutra Manuscript .....	(145)
<b>NEMOTO, Sachiko and KOMIYA, Masaaki:</b>	
The Dairy of Matudaira Mikinosuke During Stay in Edo —From September 11, Genji 1 (1864) to October 1— .....	(155)
<b>TERASAKI, Hiroyasu and TAKEDA, Shuichiro:</b>	
The Document List of NAKAI, Yoshigusu and Chozaburo, a Clerk of the Yokohama Specie Bank .....	(177)
<b>Report</b>	
<b>SHIMAMURA, Motohiro:</b>	
A Research on the Japan - Russia Historical Materials in the Last Years of the Edo Era, Supported by <i>Umi no Mana-bi</i> (the Learning of the Sea Project) Support .....	(199)

KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM  
OF CULTURAL HISTORY

Naka-ku Yokohama, Japan

2016